
虚無と紅翼の使い魔

yu-ki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

虚無と紅翼の使い魔

【Nコード】

N1541V

【作者名】

y u - k i

【あらすじ】

テンプレで行った先のゼロの使い魔の世界。チート能力持ちの主人公がゼロの世界を駆け巡ります。基本アニメを遵守。作者はw i k iとアニメが頼りです。

ゼロの使い魔

季節は春。

ここ、トリスティン魔法学院では二年生の使い魔召喚の儀式が行われていた。

「これで全員ですか？」

生徒達を監督していた先生、ジャン・コルベールは生徒達に確認する。

「いいえ、まだミス・ヴァリエールが・・・」

先ほど、サラマンダーを召喚したキュルケが言う。

そう言うのと生徒達とコルベールは奥にいたピンク髪の少女に注目する。

注目された少女、ルイズ・フランソワーズは苦虫を潰した様な顔をして、広場の中央に立った。

「昨日私にあんなこと言っただから、この子より凄い使い魔を召喚して見せるんでしょうね？ルイズ？」

キュルケがルイズを挑発する。

その言葉を聞いて、ルイズは昨日キュルケに言った言葉を思い出し

た。

『私、召喚魔法【サモン・サーヴァント】だけは自信があるの！あんた達じゃ束になっても適わなくらいの、神聖で、美しく、そして強力な使い魔を呼び出して見せるわ！』

ルイズの頭の中で昨日のやり取りが思い出される。

（うう・・・あんな事言っじゃなかった・・・）

ルイズは後悔するが、今更あの時の言葉を撤回する事だけは自分自身の貴族のプライドが許さなかった。

「と、当然じゃない！」

プライドの高い彼女はそう言って見栄を張るしかなかった。

「ゼロのルイズか・・・」

「何呼び出すんだ？」

「呼び出せっこないでしょ？また爆発してお終いよ。」

見栄を張るルイズに対し、周囲の生徒は陰口を叩く。

そんな中、ルイズは『サモン・サーヴァント』の詠唱に入る。

「宇宙の果てのどこかにいる私の僕よ！」

「「「「「！????」「」「」「」

ルイズの独特の詠唱に一同首をかしげるが、ルイズの詠唱は止まらない。

「神聖で、美しく、そして強力な使い魔よ！

私は心より求め、訴えるわ！我が導きに！答えなさい！！」

詠唱が完成し、杖を振るう。

ドカーン！！

その瞬間、強力な爆発があたりを包み込む。

「ゲッホ、ゲホ、やっぱりこうなったか！」

「やっぱり失敗じゃないか！」

ルイズが起こした爆発に、周囲が非難する。

しかし、爆発で怒った煙が晴れると爆発が起こった先に一人の男性が倒れていた。

「おい！アレ見ろよ！人だ！」

「あれは・・・平民？」

「ああ、あの姿どう見ても平民だよ！」

男性を一番近くで見ていたルイズは、自分が呼び出したのであろう男に失望していた。

「こ、こんなの・・・神聖で、美しく、そして強力な・・・」

~~~~~side~~~~~

「あんだ、誰？」

（えっ？なに？何だつて？

つかここどこ？明らかに日本じゃないよな？）

俺は目を覚ますとなにやら見覚えのある人物が目の前にいた。

「言葉が通じないの？どこの平民？」

目の前のピンク髪の女の子は不機嫌そうな顔で俺に質問してくる。

（って髪がピンク！？こんなの地球じゃありえねーだろ！コスプレ団体の集団か？）

俺が考え事をしている時に、ピンク髪の女の子に赤髪の女の子が近づいてくる。

「さすがね。大見得切ったことはあるじゃない。まさか平民を呼び出すなんて・・・」

おかしそうに言う赤髪の女の子。

「うるさいわね！ちよつと間違えただけじゃない！」

そうピンク髪の女の子が言うと、周りの人たちが一斉に笑い出す。

その笑いに耐えられなくなったのか、ピンク髪の女の子は頭がはげている男性に何か言っていた。

「ミスタ・コルベール。」

「なんだね？」

「あの、もう一度召喚させて下さいー！」

「それは出来ない。」

「何故ですか？」

「この儀式は、メイジにとって神聖なもの。」

それをやり直すなんて儀式そのものに対する冒瀆ですぞ。

君が好むと好まざると、この少年は君の使い魔に決まったのです。」

コルベールと呼ばれた男性はピンク髪の女の子に言う。

（コルベール？どっかで聞いたことあるような・・・？）

「でも平民を使い魔にするなんて聞いたことはありません！」

「平民であろうと何であろうと、例外は認められません。さあ、儀式と続けなさい。」

「ええ、こいつと？」

そう言ってピンク髪の女の子は持っていた杖で俺をつついた。

「早くしたまえ！そうでないと君は本当に退学になってしまいますぞ。ミス・ヴァリエール。」

コルベールと呼ばれた男性は、ヴァリエールと呼んだ女の子を叱った。

「わかりました。」

ヴァリエールと呼ばれた女の子は渋々返事をして俺に向き直る。

（コルベールにヴァリエール？それに俺のことを使い魔と呼ぶこの儀式。まさかこれって・・・）



そんな考えをしている内に、女の子は俺に近づく。

「あんだ、感謝しなさいよね。普通貴族にこんな事されるなんて一生ないんだから！」

そう言いながら杖を構える。

「我が名はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール」

（やっぱりゼロの使い魔の世界か！何でこんな場所に来たのかは知んねーけど、こんな死亡フラグ満載の世界にいてたまるか！  
つーか才人はどうした！ルイズの使い魔なんかにされたら殺される！）

「五つの力を司るペンタゴン。この者に祝福を与え、我の使い魔となせ。」

（不味い！詠唱が終わる！このままじゃ『コントラクト・サーヴァント』が完成しちまう。それだけは何としても阻止せねば！）

だが、その思考が間違いだった。

俺が逃げようとしたらルイズの顔がすぐ目の前にまで迫っていたのだ。

「ちょま・・・おれんぐー！」

「んっ・・・」

かわされる一方通行な契約。

ここに『コントラクト・サーヴァント』は完成した。

「うむ。無事に『コントラクト・サーヴァント』は成功しましたな。

」

（しまった！考え事してたら逃げるタイミング失った！）

ドクン！

その瞬間、俺の中で何かが脈を打った。

「ぐっ！がああああ！！体が・・・熱い！！！」

あまりの痛さに俺は転げまわる。

（くっそ！！両手に頭、それに胸が焼けるようだ  
！これって4つのルーンフラグだよな・・・）

俺はルーンの痛さに耐え切れず、闇の中に意識を落としていった。

~~~~~side end~~~~~

「ぐっ！がああああ！！体が・・・熱い！！！」

少年の体が少し発光し、ルーンが刻まれていく。

「大丈夫よ。今使い間のルーンが刻まれているから。死ぬことはないから安心なさい。」

痛みで転げ回っている少年にルイズは声を掛ける。

やがて光が止み、少年の体に使い魔のルーンが現れる。

「使い魔のルーンが3つ？それにこのルーンは今まで見たことのないルーンだ。」

コルベールはそう言うと、少年に刻まれているルーンをスケッチする。

「さあ、皆さんこれで使い魔の召喚の儀式は終わりです。今日はこれ以上授業がないので、皆さん使い魔と親睦を深めると良いでしょう。」

コルベールはそう言って生徒全員を解散させる。

「ミス・ヴァリエール。この少年を君の部屋まで運びます。いいで

すね？」

そう言つてコルベールは気絶している少年を見る。

「はい。分かりましたコルベール先生。よろしくお願いします。」

魔法が使えない自分に対しての配慮だろうと、ルイズは思い許可を出す。

そして、少年を魔法で浮かせたコルベールはルイズの部屋に向かい、ルイズもまた先生と自分が呼び出した使い魔を自分の部屋に案内する。

この日、後に『ゼロ虚無のルイズ』と呼ばれる事になるルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールと、

巻き込まれた地球人、しかしその後には『かみしろ紅の墮天使』または『まもる紅翼の使い魔』と呼ばれる事になる神代 護の

二人にとって最低にして最悪の出会いであった。

ゼロの使い魔（後書き）

初めまして。皆さんの作品を見て自分もと思い書きました。
初心者ですが、これからよろしく願います。

基本方針はアニメ通りやれたらいいなと思っています。

使い魔の能力

青く輝く美しい星『地球』。

その中に、『日本』という国がある。

その首都『東京』、彼、神代護^{かみしろもろ}は東京都の少し外れにある住宅街の中を歩いていた。

静かな住宅街を歩いていた少年は、学校帰りで自分の家に帰る途中だった。

「あゝあ、進路どうすっかな・・・」

歩きながら今度の進路を考えている時、護はいつも通る横断歩道で信号待ちをしていた。

「こら！待ちなさい！いきなり道路に飛び出ちゃだめって言うてるでしょ！！」

横断歩道の近くにある公園から女性の怒鳴り声がする。

護は、ふとその公園に眼をやると、小さな女の子が公園を飛び出し、道路に転がるボールを追いかけていた。

（危ないなあ・・・
まあでも、この辺は今の時間帯なんてめったに通らないし大丈夫か・・・）

そんなことを考えていると、女の子の奥の道路から一台の車がこちらに向けて迫ってくる。

「危ない！！！」

俺はそう叫んで女の子目掛けて走り出す。

迫る車の運転手はまだこちらに気づいていないようだ。

俺は急いで女の子の元に駆け寄り、女の子を公園のほうへと突き飛ばす。

「キャー！！」

女の子は突然地面に突き飛ばされて驚いたのか小さな悲鳴を上げた。

（間に合った！）

俺は女の子の無事を確認すると、車の方を見る。

車の方も俺に気が付いたのか急いでブレーキを踏んだ。

しかし、ブレーキのタイミングがあまりにも遅すぎた。

キキキ！！！！

タイヤがアスファルトをこがす音が辺りに響く。

「うつ、うわああああ！！！！！！」

俺は、迫り来る車に対し絶叫を上げる。

ピカーッ！

車と俺がぶつかりそうになる直前、俺は突然現れた光に飲み込まれた。

そしてその後、ぶつかるはずだった護は姿を消し、護の親は搜索願を出したが、護は一向に見つからなかった。

その後、地球において護の姿を見たものは誰もいなかった。

~~~~マモルside~~~~

「んっここは・・・？」

俺は自分が車で轢かれる寸前の夢を見た。

いや、アレは現実だった。それで俺はゼロの使い魔の世界にやってきて・・・



「そうだ！ゼロの使い魔！！」

記憶がはつきりして、ついそう叫んだ。

「誰がゼロですって・・・」

そんな声が聞こえ、俺は声のするほうに顔を向ける。

するとそこには鬼の形相をしたルイズが立っていた。

「げっ！夢じゃないし・・・ってそうじゃない。ごめんこつちの話だ。それよりここはどこですか？というより言葉分かります？」

（確か原作じゃ、最初は言葉が通じなかったような・・・）

俺は不安になりつつルイズに聞く。

「通じてるわ。ここはトリステイン魔法学院よ。あんたそんなことも知らないの？よほど知性のない平民なのね。」

（うっ、この物言い腹立つなあ・・・）

「そ、そうですか・・・取り合えず自己紹介を。私は神代護。こちらの世界ではマモル・カミシロ。マモルが名前でカミシロが家名になります。」

「あら、思っていたより礼儀正しいのね。私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールよ。」

あんたのご主人様で、私を呼ぶときはご主人様と呼びなさい。」

そう言っただけかなり上から目線でルイズは命令する。

（ちっ、分かってはいたけど殺すぞこの女。マジム力つく。才人もよく我慢したな・・・）

「ちょっと！返事くらいしなさいよ！」

「何で？俺はまだルイズさんを主人と決めたわけじゃねーぞ。つーかどういふことが説明してくれても良いんじゃない？」

知っているけどここは知らない振りをしておく。そのほうが動きやすいだろう。

「あんたは今日、この私に使い魔として召喚されたの！平民が貴族の、それも公爵家の息女であるこの私に呼び出されたのだから少しは感謝なさい！」

「ふざけんな馬鹿が！勝手に呼び出してんじゃねーよ！！つかどんな証拠があつてそんな事言えんだよ！」

さすがにここまで馬鹿にされるとキレる。思わず素の対応をしてしまった。

「なっとなっとなっ・・・なんて口の聞き方をする平民なのかしら！！いいわ！そこまで言うなら教えてあげる。使い魔の証拠はね！あんなのその！両手と！額にあるルーンの文字よ！」

これが『コントラクト・サーヴァント』をした証拠！！使い魔である証なんだから！！！！」

怒鳴りながらルイズは鏡を俺に見せ付ける。

鏡の中に写る俺の額には、『神の頭脳・ミヨズニトニルン』のルーンがしっかりと刻まれていて、両手を見たらそれぞれ『神の左手・ガンドールヴ』と『神の右手・ヴィンダールヴ』のルーンが刻まれていた。

（うつわ・・・マジかよ。めっちゃチートじゃん俺・・・  
しかし、ルイズにこき使われるのは癪だし、いつそのこと原作破壊しちまおうかな・・・）

なんて危ないことを考えていたら、服が投げられた。

「それ、洗っておいてね。あんたを怒鳴り散らしたら疲れたわ。今日は遅いから私もう寝るから。」

服は明日までに洗濯して、明日の朝は新しい服を用意しておきなさい。

素直に言うことを聞いていれば、ご飯はちゃんとあげるから。」

早口にそう言われ、部屋の明かりが消される。

（これは、能力確認のチャンスかも・・・）

「ああそうですか。分かりましたご主人様。それでは私は貴方様のお召し物を洗濯に行つて来ます。本日はそのまま外で過ごしますので失礼します。」

まったく感情のこもっていない言葉をルイズに言って、洗濯籠に入っているルイズの服を籠事持ち部屋を出る。

（よし、まずは状況確認だ。）

「私、スフレを作るのが得意なんですのよ。」

「それはぜひ食べてみたいな。」

「まあ、本当ですか？」

「勿論だともケティ。君の瞳に嘘はつかないよ。」

「ギーシュ様／＼」

「君への思いに裏表などはないんだ。」

ルイズの部屋を出て、しばらく歩いていたらそんな会話が聞こえてきた。

（あれは、ギーシュ？一緒にいるのは誰だ？名前がよく聞き取れなかった。）

まあいいか。無視して早く能力の確認をしよう。）

俺はそのまま横を通り過ぎようとする。

「ん？君はルイズが呼び出した平民じゃないか。こんな所で何をし

「ているんだ？」

目ざとく俺を見つけたギーシュは、そのまま俺に声を掛けた。

「あつ、今日の儀式で・・・一年生の間でも話題になっていましたわ。」

ギーシュに口説かれていた女の子も俺を見つける。

「彼がいきなり気絶して、僕らは大変だったんだ。」

そう言われるが、俺は無視する。正直ギーシュはあまり好きじゃない。

「待ちたまえ。」

無視して行こうとする俺をギーシュは呼び止める。

（ちつ、無視してくれば良いものを・・・）

「はい。何でしょうか？」

「平民が貴族の手を煩わせておいて、礼の一つもないのかい？」

（こいつも上から目線か・・・この世界の貴族はやっぱ好きになれねーな。）

「ああそうでしたか。それはどうもご親切に。ありがとうございました。」

極力無表情でお礼を言った。勿論感謝など一切こめていない。

「それでは私は失礼します。これ以上お二人の邪魔をするのも忍びないんで。」

そう言っただけで俺は出口に向けて歩き出す。

その後ようやく出口に出た俺は、人気がない場所まで移動した。

「よし。これでようやく能力の確認が出来るな。」

思わず声に出してしまった俺は、すぐに集中し始めた。

（取り合えず現状確認。今俺に刻まれているルーンは4つ。

『神の頭脳・ミヨズニトニルン』

『神の左手・ガンダールヴ』

『神の右手・ヴィンダールヴ』

『神の心臓・リーヴスラシル』

の全てのルーンが俺の中にある。

まず一つずつ確認していこう。

『神の頭脳・ミヨズニトニルン』は確か、魔道具が扱えるんだった

な。

それで確か、『神の右手・ヴィンダールヴ』が、全ての乗り物、または幻獣が扱えたはず。

次に言わずも知れた『神の左手・ガンダールヴ』。これは説明は良いだろう。

となるとやっぱり、『神の心臓・リーヴスラシル』だよな・・・

「これは原作じゃ、記すことも許されないとか書いてあったし、ぶっちゃけどんな能力か想像がつかん。

二次創作によく出る『自分の分かる範囲の魔法や能力が全て使える』とかだったら楽だったのに・・・

まあ人生そんなにうまく行くわけないか。」

そう言いつつも自分の発言に期待して、ハガレンの練成をやってみる。

「これで剣が出てきたら笑っちゃうよね・・・」

自分で言ってる虚しいが、試しにやってみることにした。

パン

手を合わせてから地面に手を着く。

バチバチバチ

すると、激しいスパークと共にイメージどおりの剣が出てきた。

「はい？」

さすがにこの出来事には驚きを隠せなかった。

俺はためしに別のことをやってみる。

「影分身の術！」

ナルトに出てくる影分身をやってみたが・・・

ボン

煙と共にもう一人の俺が隣に立っていた。

成功である。

「マジかよ・・・ああごめん”俺”。せっかく出てきてもらって悪いけど、もう用すんだから帰って良いよ。」

「ああわかった。」

ボン

そう言うと、すぐに分身体の俺は煙と共に消えていった。

「ああ・・・てことはアレも出来るよな。」

イメージ通り出来ると思い、とあるシリーズの超電磁砲をやってみる。

財布から十円玉を取り、空へと狙いを定める。



「いつけーーーー!!!」

ドーーーーン

闇夜を切り裂かんとする一条の光の槍が轟音と共に夜空を駆け抜ける。

「やっべやりすぎた!」

俺は急いでその場を後にして裏庭のほうへと回った。

その後、錬金術で全自動乾燥機付き洗濯機（バッテリー式）を練成し、バッテリーの電気を能力を使って満タンにしてルイズの服を洗濯した。

そして、明け方まで能力の確認に時間を費やした。

## 食事の確保

能力の確認をし終えた翌朝。

俺はルイズを起こそうとしていた。

「ほら起きろ！朝だぞー！！」

声を掛けながらルイズの体をゆする。

「んっん」

まだ起きそうにないルイズに俺は声を大きくして、

「いい加減・・・起きろー！！！！！！！！！！」

「きゃあ、なに？何ごと？」

大きな声を出した俺に驚いて、ルイズが飛び起きる。

「やっと起きたか。もう朝だぞ。取り合えずおはよう。」

「え、ええおはよう。ってあんた誰？」

（昨日勝手に呼び出しておいてもう忘れたか・・・）

「昨日お前に呼び出された、神代護。自己紹介しただろ？もう忘れたのか？」

そう言いながら俺はルイズに着替えを渡す。

「ほら着替えだ。これで良いだろ？俺は外で待つてるからちゃんと着替えるよ。」

そう言っただ俺はドアに向かう。

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！あんたが着替えさせなさい！」

いきなり無理な命令をするルイズに呆れ果てる。

「はあ？馬鹿かお前？俺はこれでも男だぞ？恥ずかしくねーのかよ・  
・・」

「おとこ？使い魔に性別も何もないじゃない。」

至極当然のように言うルイズにカチンときた。

「ほう、お前は男の俺に着替えをさせても恥ずかしくないのか。」

「お前って言わないで！時間がないんだから早くなさい！」

「わかった。」

そう言っただルイズの着替えを受け取る。

「ああそうそうご主人様。着替えの途中手が滑って胸に手が当たっても問題ないよな？それで弾みで胸を揉んでもこれは事故になるよな？」

絶対にしない事故なのだが、あえて言う。極力意識せずに言うのも忘れない。

そして一歩、また一歩とゆっくりとルイズに近づいていく。

「ななな何言ってるのよ！あんた何考えてるの？ごっこ、ご主人様に欲情するわけ？」

「さあどうだろうね？少なくとも俺は君に女性の魅力を感じているのは事実かな？」

そう言いながらさらに近づいていく。

このときのルイズ嬢、顔を真っ赤にしていたとだけ記しておこう。

「そそそ、そうだ。やっぱり自分で着替えるわ。貴族たる者、甘えてばかりじゃいけないわね。」

テンパリながらルイズは言う。

「そうか。なら早く着替えろ。」

その言葉を聞いて、ルイズに持っていた着替えを渡し部屋を出る。

「ああそうだルイズ。さっきの言葉だが・・・」

部屋を出る際にルイズに問いかける。

「な、なによ？」

「アレは嘘だ。だから気にするな。」

そういつた瞬間、ドア目掛けてベットに置いてあったルイズの枕が投げられた。

（おお、こわ〜）

部屋の外でルイズの着替えを待っていると、赤髪の女の子に声を掛けられた。

「あら、その貴方。何をしてらっしゃるの？そこはルイズの部屋よ？」

声のするほうを見ると、褐色の背の高い女性が立っていた。

（こいつ・・・もしかしてキュルケか？）

「ああ私は、ルイズの使い魔をやっている者で、マメル・カミシロといいます。

失礼ですが貴方は？」

予想は出来ているが、確認の為自己紹介をする。

「私はキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツェルプストーよ。キュルケで良いわ。

貴方本当に平民なのね。ルイズが主人じゃ大変じゃない？」

当たり触りのない自己紹介。ギーシュとは違い好感の持てる挨拶だった。

「ええまあ。いきなり（この世界に）連れて来られて、半ば強制的に主従関係を結ばされたんじゃないやっつてられませんね。」

思いついたことを言う。

するとキュルケは腹を抱えて笑った。

「あはは、貴方言うじゃない。気に入ったわ。ルイズに嫌気が差したら私の所にいらっしやいな。」

「分かりました。気が向いたら行きますね。」

「ホント言うじゃない。」

そんな会話をしていたら、ふいにドアが開いた。

どうやらルイズの着替えが終わったようだ。

「うるさいわね！何騒いでんのよ。ってツエルプストー！こんな所で何やってんのよ！」

「あらルイズ。朝からずいぶんなご挨拶ね。ちょっと貴方のとこの平民とお喋りしてただけじゃない。」

「うつうるさいわね。私の使い魔にちょっかい掛けないで！」

「もう相変わらずね。それより本当に変なもの呼び出したわね。『サモン・サーヴァント』で平民を呼び出すなんて本当に規格外ね『ゼロのルイズ』?」

「うっさい。ほっというて頂戴。」

キュルケの言葉にムスツとした表情になるルイズ。

(っーが変なものって・・・)

「私はあんななんかと違って、一発で成功よ。せつかくだから私の使い魔を見せてあげる。おいで『フレイム』。」

キュルケが自慢そうに使い魔を呼ぶ。

すると、奥から尻尾に火が付いた赤い大蜥蜴がのそりと顔を出す。

「見て?この尻尾。ここまで鮮やかで大きい炎の尻尾は、間違いなく火竜山脈のサラマンダーよ?ブランドものよ。好事家に見せたら値段なんか付かないわよ?」

そう自慢げにサラマンダーに手をやるキュルケ。

その様子を見ていたルイズは苦虫を噛み潰したような顔をしていた。

「ふふ、じゃあ挨拶もすんだし私は先に行くわ。お先に失礼。ごめんあそばせ。おゝほほほ・・・」

高笑いしながら去っていくキュルケに対し、ルイズは悔しいのか体

全体を震わせている。

「くくく、悔しいー！！！！なんなのあの女！自分が火竜山脈のサラマンドーを召喚したからってこれ見よがしに見せびらかして！ああもう！

大体なんであんたが出てきたのよ！こんなの理不尽だわ！！！」

理不尽なのはこっちです。

「んなのしらねーよ。それより早く行こうぜ。」

ルイズは機嫌が直るまでその場を動かなかった。子供かよ・・・

ルイズの機嫌が直り、俺達は今、トリスティン魔法学院の大食堂にいる。

ルイズが言うにはここは『アルヴィーズの食堂』と言っらしい。

巨大なホールには長いテーブルが三つ。まるでハリポタの食堂の風景のようだ。

「はあゝ、無駄に豪華だなここ。」



あまりの煌びやかな部屋に呆れる。

「この学院のモットーは『貴族は魔法をもってしてその精神と成すよ。』

だから私たちは、貴族たるべき教育を充分に受けるのよ。

それにより食堂も貴族の食卓にふさわしいものでなければならぬの。」

「へえ……」

俺の気のない返事をよそにルイズは続ける。

「ホントなら、平民のあんたはこの『アルヴィーズの食堂』には一生入れないんだけど、あんたはあたしの使い魔だから特別よ。感謝しなさいよね。」

そう言つて威張り散らす。そして、自分の席に着いたのかルイズは立ち止まる。

「何やってんの？早く椅子を引きなさい。本当に気が利かない使い魔ね。」

「へいへい。畏まりました。」

そう俺に言ってくるので渋々椅子を引く。

チラッとテーブルを見ると、朝だというのに高カロリーの料理がたくさん並んでいた。

（うわゝ、こんなに朝から食べると絶対に将来、デブ確定じゃん・

・  
)

「それで、ルイズ。俺の席とご飯はどこだ？」

そう言つとルイズは無言で地面を指差す。

「ここは貴族しか座れないの。平民のあんたは床よ。」

そついうルイズに対し、俺はルイズの指の先を見る。

そこには古い皿と、固そうなパンが一つあつた。

「あゝ、ルイズ。もしかしてこれが俺の朝ご飯？」

そう言つて俺はパンを指差す。

するとルイズは頷いた。

（分かつてはいたけど、マジでここまでされると腹立つな・・・  
こうなつたらさつさとマルトーさんとシエスタ探して飯の確保をし  
たほうが良いな。）

そう思い立つて俺は行動に移す。

「ルイズ、悪いがこれじゃあやつてられない。飯確保してくるから  
また後でな。」

俺はパンを手に取り、ルイズの返事を聞かずにその場を後にした。

ご飯をもらう為に厨房を目指していると、途中でメイドさんを見かけたので、厨房に案内してもらおうと思い声を掛ける。

「あの、お忙しい時にすいません。少々場所を尋ねたいのですが・・」

なるべく丁寧な口調を心がけてメイドさんに話しかける。

「はい？何でしょう？」

黒髪のメイドさんが振り返る。

「私、マモル・カミシロと言う貴族の使い魔をしている者です、今厨房を探しているのですがどちらに行けばいいのでしょうか？」

「平民の使い魔さん？ああ！貴方が噂の使い魔さんですか？」

メイドさんは酷く驚いて言う。そんなに噂になっているのだろうか・・

「どの噂か知りませんが、『平民の使い魔』と貴族から呼ばれているのは自分ですね。」

「やっぱり！それで、使い魔さんがどうしたんですか？あっ私、シエスタって言います。平民同士よろしくお願いしますね。」

メイドさんはシエスタでした。

「あ、はい。こちらこそよろしく願います。自分のことはマモルと呼んでください。」

それですね、今厨房を探しているのですがどこにあるんですか？」

「厨房ですか？あの・・・何か不手際でもありましたか？」

不安そうに聞いてくるシエスタに俺は慌てて言う。

「いえ！違います。不手際とかじゃなくてですね、恥ずかしながらご主人にちゃんとご飯を貰えなくておなか空いちゃって・・・賄いでいいからご飯貰えないかなあゝ、なんて・・・」

おそらく今の俺の顔は真っ赤になっているだろう・・・

てか、言ってる途中からだんだん自分の境遇が恥ずかしくなってきたし・・・

「まあそうなんですか。わかりました。私も丁度厨房に戻るところでしたので、一緒に行きましょう。こっちです。付いてきて下さい。」

そう言ってシエスタは俺を厨房に案内してくれた。

シエスタ・・・ええ娘や・・・

厨房に到着した俺は奥にあるテーブルに案内された。

「ちょっと待ってて下さいね。すぐに賄い持ってきますから。」

そう言ってシエスタは奥の調理場に消えていく。

しばらく待っていると、ガタイの良いおっさんが声を掛けてきた。

「おう。お前さんが貴族の連中に呼び出されたって言う平民か？」

豪快な声で俺に声を掛けてくる。

「ええまあ。何か色々と噂になってるみたいですね・・・」

おっと、自己紹介が遅れました。私はマモル・カミシロといいます。マモルと呼んでください。」

初対面なので笑顔で自己紹介をする。

「マモルか。変わった名前だな。俺はこの厨房でコック長をしているマルトーってもんだ。よろしくな！」

バンバンと笑いながら肩を叩くマルトーさん。痛いです・・・

「シエスタから事情は聞いてるぜ。何でも飯を貰えなかったんだって？これだから貴族って奴は生け簀かねー！」

腕を組み頷くマルトーさんに対し俺は言う。

「まあそうなんですけど、このおかげでシエスタやマルトーさんに  
出会えましたから、結果オーライです。」

「なんでえ？俺やシエスタを探してたのかい？」

「正確にはマルトーさんだけですけどね・・・

マルトーさんにこれからの食事を頼もうと思っていたんです。その  
途中にシエスタに会ってここまで連れて来てもらったんです。

いやあ、本当に運が良かったですよ。早く見つからなかったら餓  
死するところでした。」

はははっと、笑いながら恥ずかしそうに頭を掻いてみた。

するとマルトーさんは哀れんだような顔で俺を見てくる。

（まずい。『不幸だけど健気に頑張る使い魔』って設定でやってみ  
たけどを演じすぎたか・・・？）

「お前さんも苦勞してんだな。よし分かった。いつでもここに来な  
！賄いで良いならいつでも飯を食わしてやる！」

そう言っただけで泣きながら俺の肩を掴むマルトーさん。

（何か色々誤解してるようだけど・・・まっいいか。）

「ありがとうございます。貰ってばかりじゃ悪いので、自分の時間  
が許される限りここの仕事を手伝います。いや、手伝わせて下さい。」

「おお！良い奴だなお前！ホント良い奴だ！！」

そう言っつて男泣きするマルトーさん。

何か色々間違っつて覚えられている気がしなくもないが、まあ概ね気に入ってもらったので良しとしよう。

そう思っつていたら奥からシエスタがやってきた。

「マモルさん、お待たせしました。残り物で悪いんですがこれをどうぞ。」

そう言っつてシエスタはテーブルに料理を並べてくれた。

「おお！ありがとうございます！じゃあ、頂きます！」

そう言っつて俺は目の前の料理に手を付けていく。

「ご馳走様でした！」

俺は手を合わせて挨拶をする。

「美味しかったよシエスタ。マジで助かった。ホントありがとな。」

すっかり腹が満たされた俺は、改めてシエスタにお礼を言う。

「いえそんな・・・私は貴族様が手をつけていなかった料理をお出しただけです。お礼なんて言わないで下さい。」

「それでもだよ。ここまで料理を運んできてくれたのはシエスタだし、それだけでも俺は嬉しかったんだ。」

「そんな・・・マモルさん・・・」

謙遜するシエスタを俺は褒めたが、その途端に顔を赤くして恥ずかしそうにしていた。

「それにしても、こんな豪勢な食事を残すなんて貴族って贅沢だな。」

「おう。分かっているじゃねえか坊主。ここの貴族連中はいつも俺の料理を残しやがる。魔法が使えるからって威張りやがって・・・」

そうマルトーさんが愚痴る。

「そうなんだよね・・・魔法なんて俺も使えるけど、たかがそれだけで威張り散らすなんて考えられねーよ・・・」

俺も賛同してそう言うと、厨房にいる全員が驚いた顔をする。

「ど、どうゆうことだ坊主！」

「そうですよ。魔法が使えるって、マモルさんは貴族なんですか？」

慌てて俺に確認を取るマルトーさんとシエスタ。



「は？何言ってるの？俺貴族じゃないよ？それに魔法が使えるから貴族ってどう考えてもおかしいでしょ？」

「おかしいのはオメエの方だ！」

「そうですね！そもそも……」

さらに慌てるマルトーさんと、若干テンパっているシエスタからの世界の平民でも知っている一般常識を聞いた。

「へえ、そうだったんだ。知らなかった。」

「知らなかったって……マモル様はメイジなんですから知っているものだとばかり……」

「そうですね。こんなの俺達でも知っている一般常識なのに……」  
そう言っただけなりした様子で俺を見る二人。

「まあしょうがないですよ。昨日この世界に召喚されたばかりなんですから。」

「それはまあ……」

「そうですねが……」

二人は顔を見合わせて困り果てる。

「それより、その敬語やめてもらえませんか？メイジと聞いた途端態度が変わったのでびっくりしました。」

「いや、しかし・・・」

そう言うともルトーさんがさらに困った表情になる。

「仕方ありませんよマモル様。この世界ではメイジは魔法が使えて、その力で力のない平民を虐げるのが現状なんです。だから私たち平民は、メイジである貴族に逆らえないんです。」

そう言うてシエスタの表情が曇る。

「なるほどね・・・そういつた事情なら仕方ないか。でもだからって俺にまで媚を売る必要はないですよ？」

俺は絶対に貴方達に強要なんかしません。お世話をしてくれる皆さんに感謝こそすれ、それを仇で返すような真似は絶対に出来ません。だから皆さんも、俺に媚なんか売らずに普通に接して下さい。」

「マモルさん・・・」

「坊主、オメエ・・・」

俺の言葉を聞いて、皆感動しているようだ。何故に？

「わかった。オメエがそこまで言うんなら、俺はお前さんを認める。皆もそれで良いよな？」

「「「「はい！！！」」」」」

そう言ってみんなマルトーさんの考えに賛同してくれた。

こうして俺は難なく認めてもらえたようだ。

## 決闘フラグ、ゲットだぜ（笑）

「あんだ、こんなところにいたのね。」

朝食を食べ終えてしばらくマルトーさんたちと談笑していたら、ルイズがやってきた。

「よう、ルイズ。どうしたんだ？」

「どうしたんだ。じゃないわよ。さっさと来なさい。中庭に行くわよ！」

いきなり現れて命令を下すルイズ。

反抗しようと思ったけど、ここで反抗したらマルトーさんたちにも迷惑がかかると思い、仕方なく指示に従う。

「あゝはいはい。わかりましたよ。行けばいいんだろ行けば・・・じゃあマルトーさん。これで失礼しますね。またお昼ごろにでも伺います。」

「あ。ああ分かった。」

「シエスタもまた後でね。ごちそうさま。」

「い、いえ、またいらして下さい。」

マルトーさんたちにお礼を言って、俺とルイズは中庭に向かう。

「あんたねえ、ご主人様を放って置いてなにやってんのよ！」

「何って・・・ご飯食べに行ってただけじゃん。それに俺は一応お前に行き先を言ったぞ。」

何故かは知らないが、怒っているルイズに対し反論する。

「うるさい！使い魔の癖に反論するな！」

（うわゝ、むちゃくちゃだこの女・・・）

「ucci、あゝはいはい。わたくしが悪うござんした。んで、これからどこに行くんだ？」

これ以上やつても埒が明かないので、先に折れることにした。

うん。俺大人だ・・・

「さつきも言っただでしょ。ご主人様の言うことはちゃんと聞いてなさい。中庭よ、な・か・に・わ！」

「中庭だあゝ？ここ学校だろ？授業はどうした？」

「2年生は今日は授業がないわ。今日は召喚したばかりの使い魔とコミュニケーションをとるのよ。」

そのため、本来は授業中には開放されないんだけど、2年生だけ特

別に授業中でも中庭の使用の許可が出ているの。」

「ふん。つまり皆、中庭でコミュニケーションをとってるってわけか・・・」

「あら、平民の癖に頭の回転は速いのね。」

ルイズが小馬鹿にしたように言う。

（正直こんな奴とコミュニケーションなんかとりたかねーよ。）

そうこうしている内に、俺たちは中庭に着いた。

「何ぼさつとしてるのよ。早く座れる場所を用意しなさい。」

「はあ？何で俺が。」

「あんたまだ分かってないようね・・・」

「そんなのあんたが私の使い魔だからに決まってるでしょ！」

「はい。理不尽出ました！マジム力つきます。」

「どんな横暴だよそれ。ったく、わったよ。そこで待ってるクソご主人！」

俺はそう吐き捨てるように言って、テーブルと椅子を確保するため

に動き出す。

（何で言うこと聞いちまってるんだろっ？やっぱルーンの影響かな？）

自分の思い通りにならないことに苛立ちながら、そう解釈して自己完結する。

しばらくテーブルと椅子を探していたら、先ほど別れたシエスタを見つけたので声を掛ける。

「おい、シエスタ。こんな所で何をやっているんだ？」

俺の呼びかけが聞こえたのか、シエスタはあたりを見渡して俺を見つけた。

「マモルさん。こんな所で何してるんですか？」

「俺？俺はルイズに頼まれて座れる場所を探していたんだ。シエスタは？」

「そうなんですか？私は、2年生の皆さんのご奉仕をさせていただいてます。」

よく見ると、シエスタはお茶のセットをトレイに乗せていた。おそらくお茶会のためのものだろう。

「そうなんだ。俺も手伝うよ。」

「そんな、悪いです。それにミス・ヴァリエールに座れる場所の確保を頼まれていたんでしょ？あそこの席はまだ誰も座っていないので案内してあげて下さい。」

そう言つて一つのテーブル席を教えてもらった。

「そうなんだ。ありがとうシエスタ。早速教えてくるよ。」

俺はシエスタにお礼を言つてルイズの元に急ぐ。

俺はルイズに座れる場所を教えると、ルイズから次の指示が下された。

「はぁ・・・席用意したらお茶を持ってこいねえ・・・  
つくづく人使い荒いなぁ貴族って・・・」

落ち込みながらお茶の用意をして、ルイズの席に向かっていると、数人の男子学生の会話が聞こえてきた。

~~~~~ギーシュside~~~~~


金色の巻き髪に、フリルの付いたシャツを着て、そのシャツのポケットに薔薇を挿したメイジの少年、ギーシュ・ド・グラモンは先程からの質問攻めにウンザリしていた。

彼としてはケーキを摘み、紅茶を飲みながらアンニユイに浸った風かのように過ごし、女性の目を釘付けにする計画があつたのにも関わらず、何故か自分の周りにいるのは女性ではなく男友達ばかりだった。

正直、むさくるしい。そしてその男友達は先程から、

「なあ、ギーシュ。お前、今は誰と付き合っているんだ？うん？怒らないから言つてごらん？」

「誰が恋人なんだ？うん？」

などと尋ねてくるばかりである。まるで尋問だ。ギーシュはあ・・・と溜息をつきたい気持ちを押さえて言つた。

「だから、言っているではないか。つきあうとか、僕にそういった特定の女性はいないんだ。僕は薔薇なんだよ。薔薇は多くの人を楽しませるために咲く。僕が多くの女性を楽しませるために存在するようにだ。」

女性に不自由した事はないという自負はある。だからこそギーシュは自らを薔薇に例えた。しかし、そのような発言は彼の友人達の反感を買っただけだった。

「ほう、そうかそうか。それはつまり何か？『僕は何もしなくても女の子の方から寄ってくるんだ！仕方ないじゃん』とでも言いたい

のか？」

「いや、そこまで露骨な事は・・・」

「お前、アレだろ。人に女性を紹介しておきながら、自分がその女性を搔つ攫つていくタイプだろ」

「何でそうなる！？僕にだってその辺の良識はあるから！？」

そうして熱くなってしまったのがいけなかったのか、ポケットから小壘が落ちたのに気づいた。この友人たちに拾われれば、また何か言われるかもしれない。ギーシュがすぐ拾おうとした時、彼より先に小壘を拾ったものが現れた。

「落し物ですよ？貴族さん？」

小壘を拾った人物は昨日クラスメートが呼び出した使い魔だった。

~~~~ギーシュside end~~~~

（いっえい！ギーシュとの決闘フラグゲットだぜ！）

ギーシュが小壘を落としたので、決闘フラグを回収するために面白半分で拾ったが、結構後悔している俺・・・

（ああ・・・なんで俺はこう厄介ごとに首を突っ込みたくなるんだ

ろっ……)

「な、何を勘違いしているんだね？こ、これは僕のじゃない。いい、一体君は何を言ってるんだね？平民君？」

俺はその言葉を聞き「へえ……」といって再び香水を手取る。

「なら、私が本来の持ち主に返しておきますね。」

そう言つて、これ見よがしに香水を他の男子生徒に見せ付ける。

それを見ていた生徒が、小壇をじつと観察していた。そしてギーシュの友人らしき二人のうち、一人が何かに気づいたように口を開いた。

「おやおや、よく見たらこの香水は、モンモンことモンモランシーの香水ではないのかね、ギーシュ君」

「本当だねえ、この鮮やかな紫色はまさしくモンモランシーが自らのためだけに調合している香水に見えるねえ。ということはギーシュはモンモランシーと付き合っていたのか。」

ギーシュは一瞬うつと呻くと、すぐ呼吸を整えた様子で指を立てて反論する。

「ち、違う！いいかい君たち？彼女の名誉のために言うが……」  
言い訳をするギーシュに俺は追い討ちをかける。

「あのーちよつといいか？」

「ん？何だね平民！メイジの僕に恐れ多くも・・・」

「いや、ちよつと気になったんだが、さっきからさ、後ろのテーブルの女の子がずーっとこっち見てんだけど」

「え？」

ギーシュやその友人達が俺の指し示すテーブルの方向を見る。

そこには、茶色のマントの少女が一人、ぽつんと立っていた。

俺たちの視線が一齐に向けられたことに気づいたのか、茶色のマントの少女は、ギーシュに向かってコツコツと歩いてきた。

栗色の髪をした、可愛い少女だった。着ているマントは茶色。

可愛らしい顔立ちにはまだ若干の幼さが残っていた。おそらくギーシュたちより年下で一年生だろうと思った。

こういうのもなんだが、俺の好みのタイプである。

「や、やあ・・・ケティじゃないか・・・」

「ギーシュさま。私、昨夜言っていたようにスフレを作ってきて参りましたの。」

ケティと呼ばれた少女は笑顔である。

しかしよく見ると額に青筋が浮かんでいた・・・

「ああ、これはこれは。貴方は昨日、夜遅くにギーシュさまと二人つきりでお会いしていた方ですね。昨日はどうも。良かったですね、色男<sup>ギーシュさま</sup>。『ぜひ食べてみたいなあ』なんて言っただけでしたね。」

ここぞとばかりに、『夜遅くに』や『二人つきり』を思いつきり強調して言った。勿論彼女に聞こえる様に声を大きくして。

「きつきみ！」

俺の言葉にうろたえるギーシュ。

「ですが、あの噂は本当でしたのね。やっぱり、ミス・モンモランシーと・・・」

途端に、ケティの目には大粒の涙が溢れ出す。

「い、いや、いいかいケティ？彼らは馬鹿な誤解をしているんだ。僕の心の中にはいつだって君だけが・・・」

「最低っ！！」

ケティはそう言って思い切りギーシュの頬をひっぱたき、「さようならっ！」と言って泣きながら走り去っていった。

ギーシュは呆然とした様子で頬をさすっていた。

だが、しかしながら、彼の不幸は連鎖はこれだけでは終わらない。

「うふ、うふふふふふふ．．．．．」

地獄の底から湧き出るような恐ろしい声が、俺達の耳に入った。

振り返ると、鬼の形相をした金髪ロールが立っていた。

ギーシュは世界の終わりのような絶望的な表情になり、声の主に声を掛けた。

「や、やあ、モンモランシー」

見事な巻き髪の女の子、モンモンことモンモランシーがいかめしい顔つきと単色の瞳でギーシュを睨みつけていた。

「モンモランシー、僕には君が何を言いたいのがよく分かる。だが、これは誤解だ！彼女とはただ一緒に、ラ・ロシエールの森へ遠乗りをして話をしただけで．．．」

言い訳はよくない。というかそれでは積みだぞ。ギーシュよ．．．

「おかしいな．．．おかしいわよ．．．おかしくない．．．？」

「え？」

「ギーシュ？ねえギーシュ？私はあなたとそのような場所、一緒に行った覚えはないわ？この前行つてみたいとあなたに言ったのに連れて行ってくれなかったのは．．．」

そう、他の女と一緒に行ったからなのよねえ．．．

私は悲しいわよ、悲しいわ。

ねえ、ギーシュ？裏切らないって言ったわよね？あなたが私に。な

のにあなたはあの一年生に手を出していた・・・」

「ちょ、ちよつと待て。落ち着けモンモランシー!?  
お願いだよ『香水』のモンモランシー。咲き誇る薔薇のような顔を、  
美しいその顔を、怒りに歪ませないでくれ!僕まで悲しくなるじゃないか!」

モンモランシーはゆらり・・・と動いてギーシュたちのテーブルに置かれた自作の香水の小壺を取ると、にっこりと微笑んだ。

その微笑みは薔薇のように美しいはずが、俺にはその後ろに夜叉が見える気がした。

そしてモンモランシーはギーシュとびきりの笑顔でこう言った。

「夜中、背後には気をつけてね・・・フフ、フフフフ」

と言って、モンモランシーはそのまま去っていった。

「」「」「・・・」「」「」

長い・・・長い沈黙が流れた。俺たちは今修羅場を見てドン引きしている。

ギーシュに至っては滝のように汗を流し、固まっている。

やがて、ギーシュはこちらを振り返り、首を振ってこう言った。

「何が・・・いけなかったんだろう・・・?」

（（なぜ・・・こいつはわからないのだろう・・・？））

ギーシュの目が死んでいた。

「そんなの、二股を上手く乗り切るほどの器も碌に無いくせに、二股と言う行為に踏み切った無謀なお前が悪いんじゃない。」

つい、口が滑ってしまった。

しかし俺の発言にギーシュの友人たちも同調し、

「その通りだギーシュ君。己の器量を信じすぎた君が悪いぞ。はっはっはっは」

「ギーシュ君、例えその平民が小壘を拾わなくても、君の立ち回りではもっと酷い事になったかもしれない。つまりここであればよかったのさ、ははははは！」

思いつきり笑われるギーシュが哀れになり、俺はこの場から立ち去ることにした。

「じゃ、じゃあ俺はこれで・・・」

「待ちたまえ。元はと言えば君が香水なんか拾わなければこんな事にはならなかったんだ。」

いや、それは洒落にならんぞギーシュ君・・・

「何ですか？そもそも二股掛けていたアンタが悪いのに、今更になつてその責任を俺に押し付ける気ですか？どう考えたって貴族様の



自業自得でしょ?」

俺の反論に周りが笑う。

「そつだぞギーシュ。言い訳は見苦しいぞ。」

そう言われて真っ赤になっていったギーシュは、俺を見下したような顔で言う。

「どうやら君は、貴族に対しての礼を知らないようだ。」

「あいにく、そんな世界とな無縁の所からやってきたもので・・・それに格下の、しかも礼儀知らずの奴に持ち合わせる礼なんぞ持つてねーよ。」

んべつと舌を出して挑発する。

「よかるう。ならば決闘だ!」

「決闘?」

「その通り。君に決闘を申し込む。」

君は平民の、それも使い間の分際でこの僕を侮辱し、あまつさえ二人のレディを・・・泣かした!」

「泣く所か、一人は思いつきり怒ってたじゃん。」

俺の言葉を聞き、野次馬に来ていた人たちが一斉に笑い出す。

「~~~~! 覚悟は良いな! ヴェストリの広場で待っている!」

そう言つて、ギーシュは中庭を後にした。

「マモルさん！」

シエスタだ。

なにやら血相を変えてこつちに来る。俺達の会話を聞いていたのだろつ。

「マモルさん殺されちゃいます。貴族にたて突いたら殺されてしまうんです！」

蒼白な顔をして俺に叫ぶ。

「大丈夫だよ。俺は死なねーから。安心して決闘見てな。」

「でも・・・」

俺の言葉を聞いても不安そうにしているシエスタに、俺は笑みを浮かべる。

「さっき言つたろ？俺も魔法使いだつて。条件は対等だよ。」

それでもまだ不安そうな顔をするシエスタ。

そんな会話をしていたら後ろからルイズに声を掛けられる。

「あんた！何勝手なことしてんのよ！！」

「よう、ルイズ。」

「「よう、ルイズ。」じゃないわよ。いいから来なさい。ギーシュに謝るわよ!」

「謝る? 何で?」

「貴族は平民に勝てないの! あんた殺されるかもしれないのよ。」

「殺されねーよ! つーかもしかしてルイズ。お前俺の事弱いつて思ってるのか?」

「当たり前じゃない。アンタ犬にも勝てなさそうな顔してるじゃない。」

(いぬって・・・)

「はぁ・・・認識の違いがここに来るとは・・・  
いいかルイズ。俺は使い魔のルーンを刻まれて、間違いなく『最強の存在』になった。昨日の夜、能力を確認したから間違いない。」

「はぁ? 何言ってるのよ? そんな訳ないじゃない! いいから来なさい。」

「だから行かないって言ってるんだろうが!・・・はぁもうそこまで疑うんなら今から見せてやる。」

今年の使い魔の大当たりは俺だつてことをな。」

そう宣言し、俺は先ほどの男子生徒に決闘の場所を聞く。

「なあ、ヴェストリの広場ってどこだ？」

「ああ、あっちだよ。」

「わかった。サンキュな！」

そう言って指を指された方向に歩いていく。

時は少し遡る。

ここはトリステイン魔法学院の学院長室。その中の会話である。

「今年度の2年生による、使い魔の召喚の儀式も無事終わったの。」

「ええ、何よりです。」

この魔法学院の学院長、オスマンは秘書のロングビルに言う。

そして、魔道具製のパイプタバコを口にしようとするが、ロングビルに魔法で取り上げられる。

「はあ、やれやれ・・・」

「健康管理も秘書の勤めでしてよ。オールド・オスマン。」

「年寄りの数少ない楽しみを奪おうとするのかね、ミス・ロングビル」

そう言ってロングビルに近寄り、お尻を撫で回す。

「お尻を触るのはやめて下さい。」

ロングビルはオスマンに冷たく言う。

「うつ・・・はて？何でわしはこんなところにいるんじやる？」

「都合が悪くなると呆けた振りをするのも、やめてください！」

そんな会話をしていたら、ロングビルの机から一匹のねずみが出てきた。

「おおそうであった。使い魔の話じゃったな。」

「うち、くそじじい・・・」

突然思い出したように言うオスマンに、ロングビルは悪態をつく。

「使い魔は一生の友であり、目であり、耳である。我が友モートソグニル。お前とも長い付き合いじゃったの・・・」

そう言うてオスマンは、モートソグニルにナッツを与える。

「ちゅっちゅちゅ。ちゅっちゅっちゅ。」

ナッツを食べながらモートソグニルは鳴く。

「うむ。白とな・・・純白とな。」

「っ！」

モートソグニルの鳴き声を聞いて、その言葉を声に出していたオスマンに対し、ロングビルはその言葉を聞いて真っ赤になった。

「うむうむ。ミス・ロングビルは白より黒が似合うと思うのじゃが、そうは思わぬか・・・」

「オールド・オスマン。今度やったら王室に報告します。」

さすがにこのセクハラには耐えられなかったのか、ロングビルは警告を出す。

「んん！カーーー！！たかが下着を覗かれたぐらいでカッコしなさんな。」

そんな風じゃから、婚期を逃すのじゃ！」

その発言に、ロングビルは切れた。

ゲシッゲシッ

オスマンを組み伏せ、ロングビルは蹴りを放つ。

「あた、痛い、もうしない、許して・・・」

蹴られながら許しを請うオスマン氏。

そんな中、学院長室にひとりの男性職員が入ってきた。

「オールド・オスマン。大変ですぞ。」

「なんじゃ。騒々しいぞコツパゲール先生。」

「コルベールです！それよりこれを見てください。」

コルベールはオスマンの机にある本を広げる。

「これは？」

本を見た途端、オスマンの表情が変わる。

「昨日、ミス・ヴァリエールが呼び出した平民の使い魔のルーンです。見覚えがなかったので調べました所、この本の内容と酷似しております・・・」

「うーん。平民の使い魔なんぞ聞いたことがないぞ。すまぬが、ミ

ス・ロングビル。席を外してくれんかの。」

「畏まりました。」

そう言つて、ロングビルは席を外す。

その際に、しっかりと本の内容を見ていた彼女に二人はまだ気が付いていない。

「これは伝説にのみ存在する使い魔のルーンじゃぞ。

ましてあのヴァリエール家の三女が召喚するなど・・・

これは失われしペンタゴンの一角にかかわることじゃ。」

「ま、まさか・・・」

「この真実はどうあれ、このことは一切口外してはならん。」

「わ、わかりました。」

重苦しい雰囲気、学院長室に漂っていた・・・



決闘・・・死闘？いえ、一方的なフルボッコです。

「諸君！決闘だ！」

ギーシュの言葉に噂を聞きつけた観客が一斉に盛り上がる。

「いいぞ。ギーシュ！平民なんかやつつけちゃえ。」

「「「キヤー、ギーシュさまー！！」」」

ここはヴェストリの広場。決闘が決まって、たった数十分だったというのに、この盛り上がりよう・・・

しかもほとんど貴族がギーシュの味方。まあ分かつてはいたけど、少しくらい俺の方を応援してくれてもいいと思う。

そうやってあたりを見渡すと、シエスタの姿を見つけた。しかもその隣にはマルトーさんがいた。

（アンタ何やってんすか？つーか仕事はどうした仕事は・・・）

そうやって呆れていたら、ルイズがギーシュに突っかかっていた。

「ギーシュ！いい加減にして！決闘は禁止されているじゃない。」

「禁止されているのは貴族同士の決闘だよ。彼は平民。問題はない。」

「それは・・・そんな事今までなかったから・・・」

「ん？ルイズ、もしや君はこの平民にその乙女心を動かしているとか？」

「ば、馬鹿にや事言わないで！自分の使い魔が見す見すボロクソにやられる所を、黙って見てられる訳ないじゃない！」

（ボロクソって・・・まだ信じてないのかこいつは・・・）

「君が何を言おうと、もう決闘は始まっているんだ！」

そう言っただけ、手を持っていた薔薇を振るうと一枚の花びらが舞う。

その花びらが地面に触れると、光と共に女性の形をした鎧が出てきた。

「決闘の作法として名乗っておくよ。

僕の名はギーシュ・ド・グラモン。二つ名は『青銅』。したがって、青銅のゴーレム『ワルキューレ』がお相手するよ。」

「別に良いけど・・・それより俺にも武器くれよ。自分だけ武器を持ってるゴーレムで戦うんだから、それくらいしてくれても良いっしょ？」

「ふん。よからう。」

そう言っただけ、俺の目の前に一本の剣を錬金するギーシュ。

（ホント乗せやすいなこいつ・・・）

そして俺は剣を掴もうとしたらルイズから待ったがかかった。

「だめ！だめよ。この剣を取ったら本当に決闘が始まっちゃう。そうなったらあんた殺されるのよ。」

「だから負けねーよ。何度言わせたら気が済むんだ。」

「何でそんなに意地になるのよ！謝って許してもらえば良いじゃない！」

「あほか。俺は一度向き合ったら、決して逃げないと決めている！それに理不尽な力の前に屈したら、男に生まれた意味がねーだろ！大体、お前等魔法が使えるだの、貴族だのって無駄に威張りやがって・・・いい加減こつちも我慢の限界なんだよ！」

「それでも！平民が貴族に勝てるわけじゃないじゃない！」

「そんなのやってみなくちゃわからねーだろ！そもそも、格下相手に下げたくもねー頭なんか下げられるか！」

そう言っただけ俺は剣を引き抜く。

その瞬間、左手のガンダールヴのルーンが光りだした。

「待たせたな。さあ、決闘のルールを教えてくださいゃねーか。」

「バカーー！！！！もう知らない！！！！」

そう言っただけルイズは野次馬のところに戻っていく。

「君は決闘は初めてなのかい？」

「ああ。それがどうした。」

「やれやれ、とんだ素人に決闘を申し込んだものだよ・・・  
決闘のルールは、相手を戦闘不能に追いやるか、参ったと言わせる。  
もしくは相手の杖を取ることで勝敗が決まる。分かったかな平民君  
？」

「ああわかった。合図は？」

「そうだな・・・マリコルヌ。合図をお願いしてもいいかな。」

「いいぞギーシュ。では・・・始め！！」

そうして、俺達の決闘は始まった。

始まった瞬間、ギーシュのゴーレムが突っ込んでくる。

ザンッ

それを俺は手に持っていた剣で一閃した。  
するとゴーレムは真っ二つになり倒れた。

（よわ！！！！）

「「「「「.....」」」」」

突然の出来事に一同騒然とする。

誰もがギーシュが勝つと思っていたのに、俺がゴーレムを倒してしまったからだ・・・

「なあ？もうお終いか？」

あまりにもあつけない結果だったので、俺はギーシュに尋ねる。

「そ、そんなわけないだろう！今は小手調べさ。」

そう言つてギーシュは薔薇を振るう。すると今度は6体のゴーレムが現れた。

「はん。小手調べねえ・・・数増やしても同じ結果になると思うけど、こつちもちよつとだけ本気出してやるよ。」

そう言つて俺はゴーレムに突っ込む。

（さあ、一方的なフルボツコの始まりだぜ！）

「行くぞ！粉塵裂波衝！！さらに崩龍斬光剣！！！！」

ガガン！スパパパッ！

俺の剣技で、4体のゴーレムが一気に葬り去られる。そして・・・

「見切れるか！喰らえ！翔破裂光閃！！」

俺は残りのゴーレムに秘奥義である『翔破裂光閃』を喰らわせる。

「貴様等に見切れる、筋もない・・・」

勿論、ちゃんと最後の台詞も忘れない。

そして俺はギーシュ目掛けて駆け出す。

「塵も残さん！いくぞギーシュ、浄破、滅焼闇！！」

「ちょ、ま・・・」

ゴウッ！！

闇の炎と剣の斬撃がギーシュを襲う。

そして、ボロボロになり目を回しているギーシュに対し

「闇の炎に抱かれて消えろっ！！」

と最後の決め台詞を言った。

（やっぱー超楽しい。この台詞超カッコー！）

初めての戦闘ですっかり舞い上がった俺は初めの立ち位置に戻る。

そして、一部始終を見ていた観客はこの決闘が終わると、一斉に盛り上がった。

ちなみにギーシュが作った剣は、さっきの戦闘ですっかり壊れてしまっていた。

「ちょっと、大丈夫？怪我してない？」

決闘が終わって、一番にルイズが心配してくれた。

「今の見てたろ？怪我なんか一つもしてねーよ。」

「そう良かった。でもアンタ本当に強かったのね。」

「だからそう」

俺がルイズに話しかけている時に、不意に殺気を感じたのでルイズを突き飛ばす。

「危ない！！！」

ルイズがさっきまでいた場所に、氷の刃が通り過ぎた。

しかし、それは俺を狙っていたらしく、俺は無防備になった体をその氷の前にさらけ出す形になった。

「ぐああああ！！！」

無数の氷の刃が俺の体を突き立てる。

「マモル！！！」

ルイズが叫ぶ。

「っち、誰だよ。こんな事しやがったクソは!!」

俺が魔法が飛んできた方向を見ると、そこには杖を構えた男子生徒がいた。

「ギーシュの奴。平民になんか負けてんじゃねーよ! 平民は僕達貴族にひれ伏していれば良いんだ。」

そこにいたのは、典型的な自己中野郎だった。

「おまえか? さっき俺に攻撃してきた奴は?」

「そうだよ。貴族を打ち負かした平民にお仕置きをしたんだ。」

「お仕置きだと? 貴様、この結果に不満があるのか?」

「あああるね。大体平民に貴族が負けていいなんてあつてはならないんだ! ゴーシュは貴族の面汚しなんだよ!」

(よしわかった。こいつ殺<sup>や</sup>ろう。)

「それでいきなり有無を言わずに攻撃か・・・貴族って奴はよっぽど賤<sup>しや</sup>がなつてないんだな。」

俺の挑発に真っ赤にする貴族A。

「うっ、うるさい! ダマレ!!!」



そう言つて貴族Aは杖を振るう。

すると貴族Aを中心に突風が吹き荒れる。

その突風に真空波があつたのか、俺を含め周囲の人間まで危害を与えた。

「このやろつ・・・やって良いことと悪いことの区別もつかねーのか!？」

貴族Aを中心に回りにいた生徒は大混乱。男女問わず何人が負傷していた。

「だまれ!平民風情が貴族に口答えするな!!」

そう言つて貴族Aは俺に向けて杖を構える。

「クソツたれが!もういい。お前は死刑決定だ!!」

俺はそう言つて、構えを取る。

「ルイズ!!!」

戦闘に入る前に俺はルイズを呼ぶ。

「な、なによ?」

近くで俺が切れていたのを見ていたルイズは、若干怯えながら言つ。

「あいつ殺しても良いよな?」

それは質問ではなく確認だった。

「だ、だめに決まってるでしょ！大体アンタ武器持ってないじゃない！」

「大丈夫だ、魔法を使う。」

「は？」

俺は呆けているルイズをよそに、両腕を広げて詠唱に入る。

「紡ぎしは抱擁、莊嚴なる大地、今ここにもたらされん。万物に宿りし生命の息吹をここに！『リザレクシオン』」

唱えるのは高い回復力を持った広範囲型回復魔法、『リザレクシオン』。

そして、詠唱が終わり魔法を唱えると、俺を中心に巨大な魔方陣が浮かび上がり生徒達全員を覆いつくす。

パァー――！

そして青白い光と共に、俺を含めた生徒達全員の傷が癒えていく。

「す、凄い。何だこの魔法。こんなのスクエアクラスでも出来ねーぞ。」

「あんなに傷だらけだったのに、もう治っちゃった。」

俺の魔法に生徒達全員が驚いている。

「な、なんだよそれ！お前メイジだったのかよ！？」

先ほどの貴族Aが慌てて俺に言う。

「魔法使いの事をメイジというなら俺はそつだ。だが、たとえ魔法使いでなくとも貴様だけは許さん！！！」

「ひい！！！」

俺の形相に怯える貴族A。

そして俺は手を前にかざし、再び詠唱をする。

「氷結は終焉、せめて刹那にて砕けよ！『インブレイスエンド』」

瞬間、貴族Aの足元に魔法陣が現れる。

そして、魔方陣から絶対零度の氷の塊が出てきて、貴族Aを凍り付けにする。

「ちょ、ちよつと。いくらなんでもやりすぎよ。こいつ死んじやったの？」

ルイズが慌てて俺に言ってきた。

「お前に殺すなって言われてたから、殺してはいない。でも、ずっとこのままだったら確実に死ぬな、こいつ・・・」

俺の発言にルイズの顔が蒼白になる。

「い、今すぐ解除しなさい。とにかく殺しちゃだめ！」

「わゝたよ。おーい、みんな！その氷から離れてくれ。巻き添え食らうぞ。」

そう注意すると氷の中の貴族を見ていた生徒達が、一斉に離れ始める。

全員が離れたことを確認して、俺は魔法を詠唱する。

「古より伝わりし浄化の炎・・・落ちよ！『エンシェントノヴァ』」

詠唱を終えると、上空から巨大な炎の塊が降ってきた。

カツ！ドカーン！！！！

その炎の塊は、氷付けにされている貴族Aに向かって振ってきて、氷と炎が接触した瞬間、凄まじい爆発が起こった。

「ばか！！！！アレじゃ死んじゃうじゃない！！！」

ルイズが怒る。まああの光景を目の当たりにしたら当然か・・・

「よく見る。生きてるよ。さすがに手加減ぐらいするさ・・・」

俺はそう言って爆発の中心を見る。

するとその先には、黒焦げになって目を回している貴族の姿があっ

た。

その姿を見て、その場にいた全員が歓声を上げた。

「行くぞルイズ。聞きたいことがあるんだろ？」

そう言っただけは、さっきから何か聞きたそうにしているルイズに催促した。

場所は移り変わり、俺達はルイズの部屋で話をしていた。

「アンタ、メイジだったのね。」

「ああ、昨日使い魔のルーンでメイジになった。」

不満そうに言ってくるルイズに対し俺は淡々と答える。

「何でそんな大事な事言わないのよ！もっと早く教えなさいよ！」

ダンッとテーブルを叩くルイズ。

「しょうがないだろ？昨日はお前早く寝ちまつたし、今日だって言う暇なかったじゃん。」

「うるさいうるさいうるさい！口答えするな！」

ぶんぶんと手を振り回すルイズ。

「ったく、子供かよ・・・相手にしてられっか。もう寝ようぜ。」

「だめ。まだ話し終わってない！あんたの事を聞き出すまで寝させない！」

「あつそ。じゃあ早く聞いてくれよ。全部の質問に答えるから・・・」

俺は面倒くさそうに言う。

「じゃあ最初の質問。さっきの魔法は何？あんな魔法見たことない。」

「

「アレは俺の世界の魔法。はるか昔に失われた古代魔法だ。」

嘘は言っていないはず・・・

「俺の世界？アンタこの世界の住人じゃないの？」

あれ？まだ説明してなかったっけ・・・？

「あゝ・・・そこから説明するのか・・・」

ああそうだよ。実は俺は

「

そう言っただけ俺はルイズに説明する。

地球の事、ルーンの事、そして使える魔法について・・・

（まあだけど、全部正直に喋ってないんだけどね・・・）

「なるほど・・・大体の事情は理解したわ・・・  
あんたは、その・・・元の世界に帰りたいと思わないの？」

「そりゃ帰れるなら帰りたいよ。いきなりこんな世界につれてこられたし・・・」

「わ、悪かったわね・・・」

（ルイズが謝った？何か変な感じ・・・）

「いって別に。嘆いたって仕方ないし、それに帰る当てはある。」

「そうなの？」

「ああ、だけど今はまだ言えない。時が来たら教えるよ。  
大丈夫。勝手に帰るような真似はしないから。」

「あ、当たり前よ。ご、ご主人様をさし終えて帰るだなんて・・・  
そう言ってだんだんルイズの声が小さくなっていく。

「ま、しばらくは一緒にいてやるから安心しな。それよりもいいか？」

「ま、待つて。アンタ魔法使えるのよね？最初に使った、あの凄い回復魔法で見てほしい人がいるの？」

「はあ？どういうことだ？」

「実は」

そう言われて、俺はルイズの姉、カトレアの事を聞かされていった。

「　　って事なの。あんたの魔法で治せない？」

ルイズが不安そうに言う。

「うゝん・・・結論から言ったら、あの魔法でカトレアさんって人を治すのは無理だ。」

「どうして!!」

俺の言葉にルイズは驚く。

「あの魔法『リザレクション』は、どちらかというと、怪我を・・・つまり、外部的な損傷を治すための魔法なんだ。だから、内部的な損傷である病気の類は治せない。」

「そう・・・なんだ。」

見るからに落ち込んでいるルイズ。何か可哀相になってきた。

「あゝまあ、なんだ。だからと言って、カトレアさんを治せないっ



てことはないぞ?」

その言葉を聞いた瞬間、ルイズの目がパアッと輝く。

「ほ、ほんとう?」

「いや、そこまで期待されても困るんだが・・・」

「本当よね?嘘ついてないわよね?絶対ちい姉様を治してくれるのよね?」

「絶対には言えない。取り合えず病気を見てみないと・・・」

「わかったわ!今すぐ行くわよ!」

ルイズは急いで帰宅の準備をする。

「待て待て待て!学校はどうする!それに、何の連絡もせずに帰るつもりか?」

「うっ!だ、大丈夫よ。」

「大丈夫な訳ないだろ?ほら、行くんならまず、実家に手紙を書け。それと、学校の人に休むことを許可して貰ってこい。」

「わかったわよ!少し待ってて。」

「あゝ、そうだルイズ。実家に書く手紙に『絶対に治せる』なんて書くなよ。『もしかしたら』って位で書いとけ。」

「わかった。早速学院長に許可を取ってくる。」

そう言ってルイズは、バタバタと忙しなく自分の部屋を出て行った。

## カトレアさんとご対面

「起きなさいマモル！早く屋敷に行くわよ！」

朝一番、俺はルイズに起こされた。

「何だよ……てかやけに早いな……」

俺はまだ眠っている頭で反論する。

「いいじゃない。それより早く準備しなさい。急いで屋敷に行くわよ。」

そう言っただけでルイズはすでに準備万端だった様子で俺に言う。

「あゝ分かったよ。ちょっと待ってろ。」

俺はそう言っただけで準備をする。まあ準備するといっても身支度だけなのだが……

さて、みんなおはよう。マモルだ。

いきなり冒頭でこんな会話をしたのは、結論から言つたルイズの休学の許可が下りたからだ。

なに？何を言っているのかわからない？なら、前の話を呼んでくれ。

・・・と、話が逸れたな。ルイズが待っているんで俺はもう行くよ。

「待たせたな。んじゃ、正門まで行くか。」

そう言っただけ俺達は正門へと向かう。

正門に付いた俺達は、早速ルイズの屋敷に向かう。

「よし、行くぞルイズ。」

「ちょっと待って！行くって徒歩で？無茶言わないでよ。徒歩なんて一週間はかかるわよ！私そんなに歩きたくない。」

「誰が徒歩で行くなんて言った。俺の能力で行くに決まってるだろ？」

我儕を言うルイズに俺は言う。

「へ？能力って？」

「まあ見てな？ルイズ、家の方角はどっちだ？」

「え？あっちの方だけど・・・」

ルイズが指を指した方角を確認してから、俺はルイズを抱える。

「ちょ、ちよつとなにするのよ。」

突然お姫様抱っこをされたルイズが慌てて俺に言う。

「黙ってる。行くぞ!!」

シュンッ!

そして俺達はその場から消え去った。

シュンッ

俺はとあるシリーズの『ムーブポイント座標移動』を使い、魔法学院を離れた。

「な、何なのよ今の・・・」

「え?俺の能力の一つで『ムーブポイント座標移動』。簡単に説明すると瞬間移動だな。他にも使い道はあるけど、まあ今はその話はいいだろ?」

俺の説明に啞然とするルイズ。

「この能力は1〜2キロしか進めないけど、馬よりかは断然早いだろ?」

そう言って俺は学院のほうを指差す。

すると指の先には小さくなった学院の姿があった。

「まあそういう訳だから道案内頼んだぜ？」

「う、うん・・・」

まだ状況に頭がついて来ないのか、ルイズは気のない返事をした。

「あつ、そうだルイズ。屋敷に行く前に幾つか約束してくれないか？」

俺の言葉にようやくまともな反応を示すルイズ。

「なによ？」

「もし、カトレアさんの治療がうまくいったら、俺に剣を買ってくれ。」

「剣？何で？アンタ魔法使えるじゃない。」

俺の言葉にルイズは不思議そうに聞く。

「俺の本領は魔法剣士だ。ギーシュとの戦い見てただろ？」

実際には嘘だが、デルフリンガーに会うために嘘をつく。

「アレは確かに凄かったわね。わかったわ。それよりちゃんと治してよね？」

「ああ、確約は出来んが最善を尽くそう。後だな、これは約束とい

「うよりお願いなんだが・・・」

「何よ？早く言いなさい。」

躊躇っている俺にルイズは急かす。

「もう少しマシな待遇にしてくれないか？俺、これでも人間だし・・・  
あと、今後は少しばかり自由行動の時間がほしい。どうも束縛されるのは性に合わん。」

「うっ・・・わかったわよ。これからはちゃんと面倒見るわ！」

「よっしゃ！ありがとなルイズ！」

俺は嬉しくなりルイズにお礼を言った。

「ふ、ふん！」

お礼を言われたルイズは真っ赤になりそっぱを向く。

そして俺達は再び屋敷に向かって、移動を開始したのだった。

「あそこよ。あそこが私の家よ。」

移動すること十数回。途中で休憩と昼食を取る為に街に寄ったので、ルイズの実家に着いたのは昼過ぎだった。

「はあ、はあ、さすがに・・・能力の連続使用は疲れるな・・・」

「ちょっと、大丈夫？」

「ああ、少し休めば平気だ。それより・・・」

俺はルイズの実家を改めて見る。

（おいおい、これ家と言うより城じゃねーか・・・）

「ルイズってほんとに、良いとこのお嬢だったんだな。」

「なによ？疑ってたの？」

「いや、疑ってはいないけど、こうやって改めて見ると・・・な？」

そう言っただけ俺が驚いていると、屋敷のほうからフクロウが出てきた。

「お帰りなさいませ。ルイズお嬢様。」

（フクロウが喋った？）

俺が驚いているとルイズがフクロウに話しかける。

「ただいま。トゥルーカス。お父様とお母様は？」

「謁見の間にいらっしゃいます。」

「わかったわ。私が帰ってきたことを伝えて頂戴。私達もすぐに向



かうから。」

「畏まりました。」

そして、トゥルーカスと呼ばれたフクロウはバッサバッサと羽を羽ばたかせて屋敷に消えていった。

それを見送っていた俺にルイズは言う。

「何ボサツとしているの？早く行きましょ？」

「ああはいはい・・・」

もやは何でもありか・・・と自己完結しルイズの両親に会うため屋敷に向かう。

「お父様！お母様！」

そして謁見の間。

そこには、かの有名なヴァリエール夫妻がいた。

（うわゝ、さすが公爵家。威厳がある人たちだな・・・  
ルイズのお父さんもさることながら、かの有名な『烈風の力リン』

様も負けてないな・・・）

そう観察していると、娘の突然の帰省にもかかわらず夫妻は笑顔で迎えていた。

「おお、私の小さなルイズ、よく帰ってきた」

「お帰りなさい、ルイズ」

「ただいま帰りました。お父様、お母様。それで、手紙で書いていた件なのですが・・・」

「うむ。昨日の手紙は見ておるぞ。して、本当にこの者がカトレアの病を治すことが出来るのか？」

そう言つて、ヴァリエール公爵は俺を睨み付ける。

「お初にお目にかかります。自分は公爵様の娘。ルイズ嬢に召喚された使い魔でマモル・カミシロでございます。」

そう言つて片膝をつき自己紹介をする。

「うゝむ、人間を召喚するとは……流石は私の小さなルイズやる事が違うな！」

（なんつーか、寛大な人だな・・・）

「それで、お前が本当に我が娘、カトレアを治療できると？」

「はい。しかし、カトレア嬢を診断してみないと・・・」

絶対にとはまいりませんが、全力を持って治療をさせていただきたく存じます。」

「よかるう。カトレアの治療を許可する。ついてまいれ。」

「はっ。」

そう言って俺達はカトレアの部屋に移動する。

「ちょっとアンタ。私の時とは態度が違うじゃない。どういうことよ？」

「俺は初対面の人にはああいう喋り方だ。ましてやルイズのお父さんは公爵家の当主だろ？下手に反感かって殺される、何てしたら笑えんだろ？」

「それは・・・そうだけど・・・」

納得がいけないといった顔で言うルイズ。

「まああれだ、俺がルイズに対してこんな言葉なのは、少なからずお前を信頼してるからだよ。」

「むっ・・・分かった。それで納得してあげる。」

まだ不満そうにしていたが、納得してくれたので良しとする。

しばらく歩くとヴァリエール公爵はある部屋の前で立ち止まった。

「ここだ。カトレア、私だ。入っても良いか？」

コンコンとドアをノックするヴァリエール公爵。

「お父様ですか？どうぞ開いています。」

部屋の中からおっとりした優しいような声がした。

扉が開き、部屋に入るとそこにはルイズによく似た女性がいた。

（はあゝ・・・改めて生で見ると、本当に綺麗な人だなあ・・・）

カトレアのあまりの美しさに驚きを通り越し呆れてしまった。

「ちい姉様！」

真っ先にルイズがカトレアに飛びつく。何か子犬みたいだ。

きつと尻尾があるのならめっちゃ尻尾を振っているんだろう。

「まあ！私の小さなルイズ！お帰りなさい。帰ってきていたのね。」

「はい。ただいま帰りました。ちい姉様！ちい姉様もお元気そうで何よりです！」

おーおー、嬉しそうにはしゃいじゃって・・・

そんなことを考えて二人を見ていると、ふとカトレアと目があつた。

「あら？あらあら、まあまあ！私の小さなルイズ、貴方恋人を連れてきたのね。嬉しいわ！」

ギロツ

カトレアの発言を真に受けたのか、ルイズのお父さんがめっちゃ睨んできてます。

「ちつ、違うわちい姉様！こいつは私の使い魔で、こ・・・恋人にやんかじゃないんだもん！」

真つ赤になって否定するルイズ。噛むなよ・・・そして「もん」つて・・・

俺はルイズの慌てぶりに呆れると、早速本題に入る。正直この人には勝てそうにない・・・

「あゝと・・・初めまして、先ほどご紹介に預かりましたルイズ嬢の使い魔で、マモル・カミシロと申します。」

「あら、そうなの？残念ね・・・」

ころころと嬉しそうに笑うカトレアさん。こっちはちつとも嬉しくありません・・・

「残念つて・・・えつとですね、早速ですが今日こちらに伺った本題に入りたいと思います。失礼ですが、ミス・カトレアは病気を患っているとか・・・」

俺は少し強引に話しを進める。

「ええ、お医者様の話では不治の病を患っているとか。」

笑顔で言うカトレア。しかしその笑顔の奥には一種の諦めが入っていた。

「実は、今日私がミス・カトレアの病気を診断したいと思いつたのです。そして原因が私の力で治療できるものなら、治療をしたいと思うのですがよろしいですか？」

「はい。構いませんけど、マモルさんはお医者様なのですか？」

「いえ、ただの使い魔です。さあ、ベットに腰掛けて楽にして下さい。」

そう言う俺はカトレアをベットに座らせて、病気の診断をする。

「行きます。『インスペクトマジック』」

『インスペクトマジック』、これは対象のあらゆる状態を読みとる魔法である。

魔法が完成すると、カトレアの体内情報が一気に流れ込んでくる。

（なるほど・・・白血病に各種の癌。癌の方は体中に転移しはじめている。こんな状況でよく生きてたな・・・）

俺が診断しているのを公爵夫妻とルイズは固唾を吞んで見守っていた。

「原因が分かりました。これから説明したいのですが、ミス・カトレアも一緒に聞きますか？」

こういう場合は聞かせない方が良いでしょうが、どうせ治せるので確認のために聞いてみる。

「はい、お聞きますわ。」

強い人だと思う。どんな診断をされるのか分からないのに、強い意思を持って聞いてくる。

「ではお話します。皆さんもそれでよろしいですか？」

「構わん。」

「ええ。」

「大丈夫よ。」

俺の言葉に公爵夫妻とルイズが頷く。

「結構。ではお話します。先ほど魔法で診断した結果。カトレア嬢は『白血病』と『各種の癌』であることが判明いたしました。」

「それはどういう病気なのだ？」

「はい。まず、『癌』という病は人間の体に出来る悪性の腫瘍の事です。こちらはカトレア嬢の体の至る所にあり、さらに体の全身に転移し始めています。」

『白血病』の方は簡単には言いますと「血液の癌」と言われており、異常な造血細胞（白血病細胞）の一群が、骨髄で異常に増殖して正常な造血を阻害し、多くは骨髄のみにとどまらず血液中にも白血病細胞があふれ出てくる疾患の事です。

正直に申し上げますと、医者から見たら絶望的な状態であり、今のこの世界の医療技術ではまず間違いなく治せないでしょう。」

俺の説明に皆絶望する。

「そんな、じゃあちい姉様は治らないの？」

ルイズがつぶやく。

「大丈夫だよルイズ。これなら治せる。」

俺の言葉に皆希望を取り戻した。

「本当？本当にちい姉様は治るの？」

「ああ。だけど、これから行う事を一切口外しないと誓えるなら、だけどな？」

俺はそう言つと皆承諾してくれた。

「わかった。始祖ブリミルに誓って一切口外しない事を誓おう。」

そう言つてヴァリエール公爵は誓う。

「分かりました。では今から治療を行います。ミス・カトレアはベツトに横になってください。」



そう言つて俺はカトレアをベットに寝かせる。

そして俺は『ゲイトオブバビロン王の財宝』に眠っているあるモノを探すため、空間に手をつ込む。

「ちょ、ちよつとあんた。何やってるのよ。」

突然の出来事にルイズが慌てる。

「少し静かにしてくれ・・・お？あつたあつた。」

俺は目的のモノを手取る。

「それは？」

俺の手には蛇のモチーフが巻き付いている大きな杖があつた。

「俺の世界の伝説にある杖。名を『アスクレーピオスの杖』と言つて、医療の神にまで登り詰めた名医『アスクレーピオス』が持つていたとされる杖さ。」

この杖は、ありとあらゆる病気を治し、死者でさえ蘇らせる事が出来ると言つ。まあ実際は死者なんて蘇らせる事は出来なかつたんだけど、あらゆる病気を治せるつてのは本当だ。」

そう言つて俺は杖を振るう。

「医療の神が持ちしアスクレーピオスの杖よ。全治の輝きを持ちて、か彼の者に救いの光を与えたまえ！」

ピカーッ！！

その瞬間、アスクレーピオスの杖が光出し、その光がゆっくりとカトレアに降り注ぐ。

その青く輝く光はとても幻想的で、見るもの全てを魅了した。

「よし。これで大丈夫です。念の為にもう一度診断しておきましょう。『インスペクトマジック』」

そして俺は、再びカトレアを診断し、本当に治っているのかを確かめる。

「大丈夫ですね。ミス・カトレア？お加減はどうですか？」

「ええ。なんだかとても体が軽いわ。ありがとう。マモルさん。」

「いえ、無事に治って何よりでした。あとは、病気で失われた体力を戻す事が出来れば完全に回復いたします。」

ボタンッ

そこまで言って俺は倒れた。

「マモル！どうしたの？」

突然倒れた俺にルイズが駆け寄る。

「心配りません。ちょっと魔力を使いすぎただけだから・・・」

そう言って俺は意識を手放した。

この婚約ってもはやテンプレだよね？

「う、ん・・・ここは？」

（知らない天井だ・・・）

俺は目を覚ますと見慣れない部屋にいた。

視線だけを動かし、どうして倒れてしまったのかを考えていた。

（ルイズに呼び出された夜から、ろくに眠らずに能力の確認と言う名目での多用使用。

次の日はそのまま、ギーシュとの決闘で慣れない剣技に秘奥義が二つ、さらにイレギュラーで入ってきた貴族に対して上級魔法3連発。今日に限っては、休んだとはいえカトレアに対して宝具級の魔法使っちゃったからなあ・・・倒れるのも無理ないか。）

「あら、目が覚めましたの？」

考え事をしていたら声がかかった。

「あ、カトレア様。おはようございます。ここは？」

体を起こし、テーブルに座っているカトレアを見る。

「様だ何てやめて下さい。貴方は命の恩人なのです。カトレアで良いですよ。」

「はあ？ではカトレアさんで・・・」

「カトレアで良いですよ。」

さん付けで読んだら何故か笑顔でもう一度言われた。

「え、え〜と・・・」

「カ・ト・レ・アです。」

言い淀んでいたら、さらに笑顔が深まり名前を強調された。

しかしその笑顔には、有無を言わせない迫力があつた。

（こ、怖え〜・・・カトレアってこんな人だったっけ？）

「は、はい！では僭越ながらカトレアと呼ばさせていただきます！」

「はい。よく出来ました。」

素敵な笑顔で言われました。

「それで、ここはどこですか？」

「ここはヴァリエール家の客室です。貴方は私を治療した後、倒れたんですよ？覚えていませんか？」

「あつ、そうか・・・思い出しました。ご心配をお掛けしましたね？」

「そんな事はありませんが、あの後ルイズが慌てちゃって、「マモ

ルが死んじゃう。」「って大泣きだったんですから、後でこの娘にも事情を説明してあげて下さいね？」

そう言っただけカトレアはベットを見る。

カトレアの視線を追ったら、ベットの横でルイズが寝息を立てていた。

「きっと泣き疲れたんでしょうね。貴方をベットに運んでからずっと傍にいたんですもの……」

「そう、だったんですか……」

俺はそう言いながら、寝ているルイズの髪を撫でた。

「ん……うん……」

ルイズの髪を撫でていたら、もぞもぞとルイズが動き出し、やがて起き出した。

「あんた……目が覚めたのね。」

「ああ、心配掛けて悪かったな。」

「別に、心配なんかしてないもん。ふああ」

そっぽを向きながら欠伸をするルイズ。

そのやり取りを見て、カトレアはくすくすと笑っていた。

「ん・・・それでアンタ、もう体は大丈夫なの？」

「ああ、少し体がだるい気がするが問題ない。魔力の方は十分溜まってるし、体の調子も健康そのものだ。」

俺は笑顔で答える。

「そう良かった。いきなり倒れるからびっくりしたわ。」

「悪かったな。カトレアを治すために、とびつきり強力な魔法を使っただけ。」

「強力な魔法ってあの杖の事？」

「ああ。さすがに神様の持つ物を使うには結構大量の魔力を消費するから・・・」

「そうなんだ。でも、あの杖はどこに行ったの？あんたが倒れた時にはもう消えてなくなっちゃってたわ。」

「そりゃ元の場所に帰ったんだよ。まあその事は追々説明する。そんな事より、今はカトレアが無事良くなった事を祝おうぜ。」

そう言ってカトレアを指差す。

「ちい姉様！もうお加減は大丈夫なんですか？」

「ええ、もうすっかり良くなったわルイズ。これも貴方の使い魔さんのおかげね。」

カトレアに気が付いたルイズは真っ先に飛びつく。

そして、カトレアとルイズが抱き合っていたら部屋に公爵夫妻が入ってきた。

「入るぞ、カトレア。おお婿殿、目が覚めたのか。体はもう大丈夫なのか？」

「はい。おかげさまで。ご心配をお掛けしました。」

「良い良い。それで、婿殿にはちと話がある。ルイズとカトレアも後で謁見の間に来なさい。」

「はい。お父様。」

「分かりましたわ。お父様。」

ルイズとカトレアが返事をする。

「あの、さっきから気になっていたんですが・・・その、『婿殿』って？」

「うむ。その事については謁見の間で説明する。もう動けるのならすぐに用意をしなさい。」

「はあ？分かりました。」

俺はそう言われ、理解できないまま謁見の間に移動した。



「婿殿。まずはカトレアを救ってくれてありがとう。礼を言っぞ。」

「私も母としてお礼を言いますわ。本当にありがとうございます。」

謁見の間に付いた俺達は、まず初めに公爵夫妻からお礼を言われた。

「いえ、私はルイズ嬢に言われて治療を行ったに過ぎません。お礼を言っならルイズ嬢に言って上げて下さい。」

そう言っ俺はルイズを推す。

「それでも、結果はどうあれカトレアを治療したのは婿殿だ。これは曲げられない事実なのだからな。」

「はあ？そうですか？あの、それでその・・・さっきから仰っっている『婿殿』って・・・」

「おお、そうであった。実はな、カトレアの治療を完遂した者にカトレアを嫁がせようとしているのだ。」

「「はあ！？」「」

公爵の言葉に俺とルイズの声が被った。

「ちい姉様はその事を承諾しているのですか？」

ルイズが確認する。

「ええ、わたしはルイズの使い魔さんとなら結婚しても良いと思っているわ。」

「「な、なんだってー!!」」

（あ、また被った・・・と言うかルイズ、このネタ知っているのか？いや、偶然か？）

「そんな！だめですちい姉様。こんな奴と結婚だなんて・・・」

「まあ、結婚に反対だなんて・・・やっぱルイズも使い魔さんのことが好きなのね。」

出た、カトレアの天然トーク・・・

「ち、違います!!!」

その言葉を聞いたルイズは顔を真っ赤にしていた。

「こら、落ち着かんか二人とも。話が進まんではないか。」

そう言っただけで暴走するルイズとカトレアを公爵が嗜める。

「「すみません、お父様。」」

「よい。それで婿殿、カトレアとの結婚。承諾してくれるな？」

勿論するよねって顔で公爵は言ってきた。

そして、公爵夫人とカトレア、そしてルイズが俺に注目する。

「ムリ!!!!!!!!!!」

俺は真っ先に否定した。

「何故かの婿殿？」

「そうよ！ちい姉様と結婚したくないの？」

公爵とルイズが聞いてくる。

と言うかルイズよ・・・お前結婚反対してたんじゃないのか？

「え？だつていくらカトレア様が承諾しているからと言って、こんな政略結婚よろしくみたいな婚約はお受けする事は出来ません。それに好きでもない人と結婚しても絶対に続かないと思うし、そんなし崩しで結婚しても、お互い不幸になるだけでしょ？」

「あら、私はマモルさんの事は好きですよ？」

「はい？」

突然カトレアさんから告白された。

「マモルさんを好きと言ったのです。私との結婚に不満があるんですか？」

カトレアさんが涙を溜めて上目使いで言う。

「いや、そんなことはありません！カトレアさんとの結婚は正直言っ

て俺も嬉しいですし、こんな綺麗な人に好きって言われて男冥利に  
尽きるって言うか・・・」

俺は突然の出来事で気が動転して、つい本音が出た。こう、ポロつ  
と・・・

「そんな綺麗だなんて・・・でも良かった。これでなら婚約しても  
大丈夫ですね。」

とびきりの笑顔でカトレアさんが言う。

「って、ちょっと待って下さい！私はルイズに呼び出されたしがな  
い平民です。やっぱり貴族と平民との結婚って言うのは如何なもの  
かと・・・」

そう言っつて公爵様に聞いてみる。

「うむ。まあ何とかなるじやろ？そこら辺はわし等が何とかする。  
のうカーリーヌ？」

そう言っつて、今まで喋らなかった公爵夫人に声を掛ける。

「ええ、娘の為ですもの。他の貴族が何か言ってきたら、力尽くで  
も説得してあげますから安心なさい。」

「ちょ！そこは穩便にお願いします！」

（力尽くつてアンタ・・・そんな事したらたて突いてきた貴族なん  
か生きてないだろうに・・・）

「そうですか？まあ貴族なんて私が王宮に説得・・・もとい、お願いに行けば大丈夫でしょう。」

（いま、説得の言葉がカチコミって聞こえたような・・・）

「え〜っですネ・・・」

（不味い。このままでは外堀が完全に埋められてしまう・・・  
何か、何かこの状況を打開できる一発逆転の策はないのか？）

そう言ってキョロキョロしていると、ふとルイズと目があつた。

「そ、そうだ！ルイズ！お前はどうかんだ？やっぱり、自分の使い魔が大好きなお姉さんと結婚だなんて嫌だろ？」

そうして俺はルイズを巻き込む。

「わ、わたし！？えと。え〜と・・・」

いきなり話を振られたルイズは、慌てて公爵夫妻とカトレアを見る。

「ふむ、そうだな。ルイズ、お前は今回の婚約、どう思っておるのだ？」

そう言っただけ公爵夫妻はルイズの意見を聞く。

「私は・・・」

答えが決まらないルイズにカトレアが声を掛ける。

「ルイズ。」

「はい。ちい姉様・・・」

声を掛けられたルイズはカトレアを見る。

「わかってるわよね・・・？」

ゴツゴツゴツ

その瞬間、カトレアが放つ威圧感で室内の気温はきつと5　は下が  
っただろう・・・

「ひっ！わかってまするいずはこのこんやくはだいかんげいですわ。」

「

あまりの威圧感に耐えられなくなったのか、ルイズは目を回しながら  
早口で言った。

（脅しは無しだってカトレアさん・・・）

「良かった。ルイズならきつとわかってくれると信じていたわ。」

パンつと手を合わせ、本日最高の笑顔で言うカトレア。

「はあ・・・もうなんでもいいです・・・」

この家族には何をしても絶対に勝てないと思い、俺は折れる事にし  
婚約を承諾した。

「うむ。婿殿はこれからわし達の家族じゃ。わしの事は義父さんと呼びなさい。」

「私も義母さんでいいですからね？」

「あゝ、はい。これからよろしく願います。義父さん、義母さん。」

こうして、俺はヴァリエール家の家族になった。

「では食事にしよう。今日はカトレアの病気が治って、さらに婚約まで決まったためでたい日。今日は無礼講だ。存分に騒ぐが良い。」

そして始まる宴。ヴァリエール夫妻も、ルイズやカトレアも、そして使用人の人達も皆笑顔で目いっぱい騒いだ。

そして宴は深夜まで続き、夜がふけていく・・・

## ルイズの魔法、夕焼けの約束

カトレアの婚約祝賀会を終えた翌朝。

俺は朝早くから公爵夫妻に呼び出された。

「おはようございます。義父さん、義母さん。一体こんな朝早くからどうしたのですか？」

「ああ、おはよう婿殿。実はな、二人で話し合い、婿殿にはカトレアとの婚約とは別に褒美を取らせようと思つての。」

「そうなんですよ。娘との婚約はめですが、やはり個人的な褒美も必要と思ひまして……」

「その通りだ。さあ婿殿。褒美は何がいい？何でも申すがよい。」

「そうですね……でも、突然そんなことを言われても困るのです……」

突然の出来事に正直頭がついてこない。

「遠慮をするな！ほれ、何なりと申してみよ。」

さうて、どうすっかな……あつ、そうだ。

「では一つだけ、お願いがあるのですがよろしいですか？」

「うむ。言つて見なさい。」



「では、僭越ながらお願いいたします。  
私の願いは、ルイズのことです。」

「ルイズとな？」

「はい。実はルイズにはある秘密があります。今はまだ言えませんが、いつかルイズがその秘密を話すときにちゃんと迎えてあげてほしいのです。」

「ほう。秘密とな・・・嬪殿は、ルイズの秘密とやらを知っているのか？」

「勿論知っています。彼女の秘密は、私にも関係のある事なので・・・  
それですね、秘密を打ち明ける日が来たときに、彼女のお願いを聞いてあげて欲しいのです。」

これが、私の願いです。」

（さすがに虚無のことは話せない。でも、後々その事で、ルイズは親にも打ち明けられなくて苦しんでしまっている。  
そんな事をさせるのは、さすがに心苦しいしな・・・）

「わかった。では約束しよう。しかし、お前は欲がないな。自分が受け取るべき褒美なのに、使い魔である事を理由に主人を利用するなど・・・」

「申し訳ありません。今は、私個人の願いはないのです。また、自分ではどうしようもない状態になってしまったら、今度は私個人のお願いをしたいと思います。」

「うむ。待つておるぞ嬪殿。」

「はい。ありがとうございます。」

そうして、公爵に約束を取り付けた俺は学院へと戻った。

公爵家専用の飛竜で学院まで送って貰った俺とルイズ。

ルイズは学院長に報告に行った。

「ただいま。私は午後の授業に出るけど、アンタはどうする?」

報告から戻ったルイズは、俺に聞いてくる。

「そうだな。俺は使い魔だけど、貴族と一緒に授業を受けても平気なのか?」

「本当は平民は授業を受けられないんだけど、使い魔をつれて授業に来る子もいるから大丈夫だと思う。」

「そうか。ならルイズと一緒に行くよ。この世界の魔法の授業も興味あるし・・・」

そうして俺はルイズの教室へと向かい、午後の授業を受ける。

そして、ルイズに席を案内してもらい、先生の到着を待つ。

しばらくして、教室に紫色のローブを着たふくよかなおばさんが入ってきた。

「みなさん。今年度からこのトリスティン魔法学院に赴任してきた。ミセス・シュヴルーズです。

属性は土。二つ名は『赤土のシュヴルーズ』。

これから一年間、みなさんに土系統の授業を講義します。」

シュヴルーズ先生が入ってきて自己紹介をする。

「さて、皆さん。春の使い魔召喚は、大成功のようですね。このシュヴルーズはこうやって春の新学期に、みなさんの使い魔を見ることを楽しみにしてます。」

「平民を呼び出したメイジもいますけどね。」

一人の男子学生が野次を飛ばす。

すると、教室がどっと笑いに包まれる。

ルイズは顔を伏せ、屈辱に耐えていた。

（はぁ・・・しょうがないなこいつ。）

「ゼロのルイズ！ 召喚できないからって、その辺歩いていた平民つれてくるなよ！」

ギーシュとの決闘のときの立会い人をしていた男子生徒が言った。

（あいつは・・・確かマリコルヌだったか？よし、見てろよ貴族共・・・）

「はぁ・・・愚かな憶測で物事を決め付ける。やはり貴族は馬鹿ばかりだな・・・」

君はあの召喚の儀式に立ち会っていなかったのか？いや、俺は君の姿を覚えている。

あの時、確かにこのクラス全員がルイズの召喚に立ち会っていたのなら君達は全て証人だ。ルイズの召喚の儀を侮辱するのなら、あの場を目撃していたこのクラス全員を侮辱すると同意。

それとも君は、あの時の事は覚えていないのかね？その風邪声がたたって寝込んでいたのかい？

記憶力がなく、自分で自分を侮辱して・・・まるでDMだな。アホの極みだ。」

俺はクラス全員に聞こえるように言い、両手を広げて、ヤレヤレと大げさに首を横に振るう。

「ミ、ミセス・シュヴルーズ！ 侮辱されました！ 平民が僕を侮辱しました！」

マリコルヌがプルプルと震え、真っ赤になった顔をして先生に言う。

「訂正しろ平民！俺は風上のマリコルヌ！風邪なんて引いてなどいない！」

そう言っ杖を抜くマリコルヌ。

「これは失礼、ミスタ・マリコルヌ。

貴殿の声を聞いていたら年中風邪を引いているように聞こえてしま

いますので、私なりに心配したのですが・・・

そうですか、それは地声なのですね。フッ・・・失礼いたしました。

」

そう言っ、俺はマリコルヌを馬鹿にして謝罪する。

「き、き、貴様！もう許さん！そこになおれ！！」

そう言っ俺を睨みつけ、ブチ切れたマリコルヌ。

「僭越ながら一つ忠告を・・・

杖を抜いたら、命掛けるよ？」

「なん、だと・・・」

俺の放った殺気に怯みながら言う。

「そいつは脅しの道具じゃねえって言っただ。

それにお前、ギーシュとの決闘を見てただろ？

この俺に勝てると思ってんのか？」

そこまで言つと、マリコルヌは震えだす。どうやらあの決闘を思い出したようだ……

「そこまでです。ミスタ・マリコルヌ。使い魔君。」

シュヴルーズ先生が止めに入った。どうやら見ていられなくなったのだろう。

「ミスタ・マリコルヌ。使い魔君。お友達をゼロだの風邪引きだのと侮辱してはいけません。」

「しかし、こいつは……」

納得してないのかマリコルヌが反論しようとする。

「ええ、授業を妨害してしまい申し訳ありませんでした。我が主が侮辱されたので、つい激怒して反論してしまいました。

今は反省しておりますので、どうか授業をお続けになって下さい。

ミセス・シュヴルーズ。」

俺はこれ以上長引かせない為に先に折れて先生に謝った。

こういう場合は、引き際が肝心なのだ。

「自分の主が侮辱されたのなら仕方ありませんね。

でも、次はありませんよ？それと、ミスタ・マリコルヌ。貴方はまだわかっていないようなので罰を与えます。」

そう言つて、先生は赤土でマリコルヌの口を塞ぐ。

「授業が終わるまでそうしていなさい。さあ、授業を始めますよ。」

そして、先生は何事もなかったように授業を始めた。

「さてみなさん。魔法の四台系統は？」

そして、授業を始める先生は生徒達に質問する。

「はい先生。火、水、土、風の四系統です。そして何たる奇遇。僕の属性も、ミセスと同じ土。二つ名を『青銅のギーシュ・ド・グラモン』と申します。以後、お見知りおきを。」

ギーシュが気障ったらしく答える。あいつまだ堪えてなかったのか？

「よろしく。ミスタ・グラモン。」

土は万物の再生を司る重要な魔法。それをまず知って貰うため、みなさんには土系統の基本である『鍊金』の魔法を覚えてもらいます。

「

そうして、先生は懐から小石を出して杖を振るう。

すると、小石が金の石に変わった。

「そ、それってゴールドですか？」

鍊金の内容が凄いのか、キュルケが声を上げる。

「いいえ真鍮です。ゴールドを錬金できるのは『スクウェア』クラスのメイジです。残念ですが私はただの、『トライアングル』ですから・・・」

先生が自慢そうに言う。

「なあルイズ。『スクウェア』や『トライアングル』ってなんだ？」

俺は疑問に思い、隣にいたルイズに質問する。

「メイジのレベルの事よ。さっきギーシュが言った属性を複数組み合わせる事でメイジのレベルが決まるのよ。

例えば、さっきや先生がやった錬金の魔法。あれは『土、土、火』の属性を組み合わせで、小石を真鍮に変えているの。

それで、そのレベルの決め方なんだけど、一つしか属性が使えないのなら『ドット』、二つで『ライン』、三つで『トライアングル』、四つで『スクウェア』ね。」

「へえ、なるほどな・・・」

「ミス・ヴァリエール。お喋りをしている暇があるのなら、貴方には実践をしてもらいましょう。」

「『ええー！！』」

先生がルイズ当てると、一同騒然となった。

「あの、先生・・・止めておいたほうが・・・」

一人の男子生徒が進言する。



その発言にクラス全員で同意して頷く。

「どういうことだ？」

俺は不思議に思うとルイズが小さな声で言った。

「今にわかるわ。」

そう言つてルイズは先生の元に向かう。

「ではミス・ヴァリエール。錬金したい金属を強く思い浮かべるのです。」

先生の言葉に頷き、ルイズは杖を構えた。

「ルイズ！やめて！」

キュルケが注意したが、ルイズはやめようとしなない。

「黙つてて！気が散るから。」

そう言つてルイズは杖を振るう。

ドカーン！！

ルイズが杖を振るつた瞬間、教室が爆発した。

ルイズが起こした爆発により、先生は黒焦げになって倒れ、教室は

パニックになる。

「だ、だから言ったのよ!」

「ちよつと失敗したみたいね・・・」

キュルケの言葉を聞き、そつばを向いて頬のついた煤を落とすルイズ。

ちなみに俺はあらかじめ予想していたので、『<sup>アクセラレータ</sup>一方通行』の能力で爆風を反射したので被害はゼロだ。

「どこがちよつとだよ!『ゼロのルイズ』!」

「そうだそうだ。今まで魔法の成功確立ゼロの『ゼロのルイズ』!」  
いつもの事なのか、揃って全員ルイズを非難する。

バン!!

俺は飛ばされる野次に切れて机を叩く。この時、叩いた机が壊れたが、そんなの知ったこっちゃない。

「黙れ貴様等!!!お前等にルイズの何がわかる!第一、魔法は成功しているじゃないか!」

「魔法は成功しているって?錬金の魔法が爆発して失敗したじゃないか!」

「『そうだ!そうだ!!』」

生徒の反論に皆同意する。

「確かにルイズは錬金の魔法は出来なかった。だけど、爆発という魔法は唱える事が出来た！」

本当に失敗しているのなら、そもそも魔法は発動しないんじゃないのか？

「そことどうなんだよ？誰か説明する事の出来る奴はいるのか！」

1  
 2  
 3  
 4  
 5  
 6  
 7  
 8  
 9  
 10  
 11  
 12  
 13  
 14  
 15  
 16  
 17  
 18  
 19  
 20  
 21  
 22  
 23  
 24  
 25  
 26  
 27  
 28  
 29  
 30  
 31  
 32  
 33  
 34  
 35  
 36  
 37  
 38  
 39  
 40  
 41  
 42  
 43  
 44  
 45  
 46  
 47  
 48  
 49  
 50  
 51  
 52  
 53  
 54  
 55  
 56  
 57  
 58  
 59  
 60  
 61  
 62  
 63  
 64  
 65  
 66  
 67  
 68  
 69  
 70  
 71  
 72  
 73  
 74  
 75  
 76  
 77  
 78  
 79  
 80  
 81  
 82  
 83  
 84  
 85  
 86  
 87  
 88  
 89  
 90  
 91  
 92  
 93  
 94  
 95  
 96  
 97  
 98  
 99  
 100  
 101  
 102  
 103  
 104  
 105  
 106  
 107  
 108  
 109  
 110  
 111  
 112  
 113  
 114  
 115  
 116  
 117  
 118  
 119  
 120  
 121  
 122  
 123  
 124  
 125  
 126  
 127  
 128  
 129  
 130  
 131  
 132  
 133  
 134  
 135  
 136  
 137  
 138  
 139  
 140  
 141  
 142  
 143  
 144  
 145  
 146  
 147  
 148  
 149  
 150  
 151  
 152  
 153  
 154  
 155  
 156  
 157  
 158  
 159  
 160  
 161  
 162  
 163  
 164  
 165  
 166  
 167  
 168  
 169  
 170  
 171  
 172  
 173  
 174  
 175  
 176  
 177  
 178  
 179  
 180  
 181  
 182  
 183  
 184  
 185  
 186  
 187  
 188  
 189  
 190  
 191  
 192  
 193  
 194  
 195  
 196  
 197  
 198  
 199  
 200  
 201  
 202  
 203  
 204  
 205  
 206  
 207  
 208  
 209  
 210  
 211  
 212  
 213  
 214  
 215  
 216  
 217  
 218  
 219  
 220  
 221  
 222  
 223  
 224  
 225  
 226  
 227  
 228  
 229  
 230  
 231  
 232  
 233  
 234  
 235  
 236  
 237  
 238  
 239  
 240  
 241  
 242  
 243  
 244  
 245  
 246  
 247  
 248  
 249  
 250  
 251  
 252  
 253  
 254  
 255  
 256  
 257  
 258  
 259  
 260  
 261  
 262  
 263  
 264  
 265  
 266  
 267  
 268  
 269  
 270  
 271  
 272  
 273  
 274  
 275  
 276  
 277  
 278  
 279  
 280  
 281  
 282  
 283  
 284  
 285  
 286  
 287  
 288  
 289  
 290  
 291  
 292  
 293  
 294  
 295  
 296  
 297  
 298  
 299  
 300  
 301  
 302  
 303  
 304  
 305  
 306  
 307  
 308  
 309  
 310  
 311  
 312  
 313  
 314  
 315  
 316  
 317  
 318  
 319  
 320  
 321  
 322  
 323  
 324  
 325  
 326  
 327  
 328  
 329  
 330  
 331  
 332  
 333  
 334  
 335  
 336  
 337  
 338  
 339  
 340  
 341  
 342  
 343  
 344  
 345  
 346  
 347  
 348  
 349  
 350  
 351  
 352  
 353  
 354  
 355  
 356  
 357  
 358  
 359  
 360  
 361  
 362  
 363  
 364  
 365  
 366  
 367  
 368  
 369  
 370  
 371  
 372  
 373  
 374  
 375  
 376  
 377  
 378  
 379  
 380  
 381  
 382  
 383  
 384  
 385  
 386  
 387  
 388  
 389  
 390  
 391  
 392  
 393  
 394  
 395  
 396  
 397  
 398  
 399  
 400  
 401  
 402  
 403  
 404  
 405  
 406  
 407  
 408  
 409  
 410  
 411  
 412  
 413  
 414  
 415  
 416  
 417  
 418  
 419  
 420  
 421  
 422  
 423  
 424  
 425  
 426  
 427  
 428  
 429  
 430  
 431  
 432  
 433  
 434  
 435  
 436  
 437  
 438  
 439  
 440  
 441  
 442  
 443  
 444  
 445  
 446  
 447  
 448  
 449  
 450  
 451  
 452  
 453  
 454  
 455  
 456  
 457  
 458  
 459  
 460  
 461  
 462  
 463  
 464  
 465  
 466  
 467  
 468  
 469  
 470  
 471  
 472  
 473  
 474  
 475  
 476  
 477  
 478  
 479  
 480  
 481  
 482  
 483  
 484  
 485  
 486  
 487  
 488  
 489  
 490  
 491  
 492  
 493  
 494  
 495  
 496  
 497  
 498  
 499  
 500  
 501  
 502  
 503  
 504  
 505  
 506  
 507  
 508  
 509  
 510  
 511  
 512  
 513  
 514  
 515  
 516  
 517  
 518  
 519  
 520  
 521  
 522  
 523  
 524  
 525

俺の言葉を聞いて皆しくとなる。

「ほら見る！誰も答えられないじゃないか！なら、今後一切魔法の事でルイズを侮辱するのはやめてもらおう。」

俺の発言でクラスは黙り込む。

「沈黙は同意したと取るがいいよな？」

だがしかしながら、先ほどの我が主の魔法で皆に危害を与えてしまったのもまた事実。

僭越ながら使い魔である俺が、みんなの怪我の治療をしよう。

そう言っ  
て俺は魔法を詠唱する。

「紡ぎしは慈愛。母なる御手みてをかざす光の奇跡。聖なる煌き、我等を癒せ！『ナース』」

俺は広範囲対象指定型回復魔法『ナース』を使い、先生を含め生徒達全員の治療をしていく。

「ふう。これでいいな。さてルイズ。先生を運ぶぞ。学校なら医務室ぐらいあるだろ？」

そう言つて俺は倒れている先生を担いで、ルイズと共に教室を出た。

そして、俺達はシュヴルーズ先生を医務室に運び、今回の件を学院長に報告し、その件の罰、『教室の修復』に取り掛かるため再び教室にやってきた。

教室に着いたのは夕暮れに差しかかるうとしていた時間帯なので、教室には誰もいなかった。

「やっぱり、今一度見ると酷い有様だなこれ。」

「わ、悪かったわよ。でもその、あ、ありがと・・・」

「ん？なにが？」

「その、教室で私を庇ってくれて・・・」

「庇ってくれてって、どっちのこと？マリコルヌの方？それとも、あの爆発魔法の方？」

「りよ、両方・・・」

「別にいいよ。マリコルヌの方は先生にも言った通り、ついカッとなっただけだし、爆発魔法の方は事実を言っただけだ。」

「うん。それでも、私・・・嬉しかった。」

そう言っただけでルイズは恥ずかしそうにしながらも嬉しそうな笑顔を見せた。

「べ、別に、使い魔として当然のことをしただけだろ。」

ルイズの不意打ちの笑顔に、俺は不覚にもドギマギしてしまった。

（やっべ、今の笑顔はやばかった・・・やっぱあいつ可愛いよな・・・）

「そ、そんなことより、早く片付けるぞ。って言っても、この有様じゃなあ・・・」

俺はボロボロになった教室の状況に絶望した。

「じゃあない。裏技使うか・・・」

「裏技？」

「ああ。俺流の錬金魔法。」

「錬金！？アンタ錬金魔法まで使えるの？」

「ああ。俺は錬金つて言うより『錬成術』って呼んでるけどな。」

「『錬成術』？」

「そ。まあ見てな。」

俺はルイズを下がらせて、パンっと手を合わせ地面に手をつける。

バチツバチツバチツ

激しい光とスパークが教室を包み込む。

そして、光とスパークが止むと元通りになった教室の姿があった。

「な、何よこれ！凄いいじゃない！」

ルイズが元に戻った教室を見て驚く。

「まあな。でもさすがにさっき罰与えられたばかりで、もう終わりましたじゃ怪しまれるから、この教室で適当に時間潰してから報告に行こうぜ。」

「え？何でよ？早く報告に行きましょう？」

「あほか。俺のさっき使った魔法をどう説明すんだよ。それに、ルイズが魔法使ったって言うのも無理あるだろ？」

「何で？アンタが魔法使ったって言えばいいじゃない？」

「ダメだ。この魔法は切り札なんだ。なるべく秘密にしたい。」

「何で秘密なのよ？こんな魔法が使えるって知ったら、みんな私たちを見直すわよ！」

「そんな物に興味はねーよ。学院内ならまだいいが、万が一この事が国にでも知れてみる。間違いなく戦争の道具にされるぞ？」

「それこそいいじゃない。お国の為にその力が使えるなら、貴族の本望よ。」

（ダメだこいつ・・・早く何とかしないと・・・  
しかしさすが貴族だな・・・簡単に死ねるって言いやがる。）

「あほ！命を粗末にするな！大体、何がお国のためだ！死んじまったらお国も何もねーじゃねーか！」

「お国の為に死ぬのは貴族の本望よ！」

「お前馬鹿だろ？そういうけどな、お前は一度でも亡くなって後に残された人達の事を考えたことがあるのか？」

「そ、それは・・・」

俺の言葉にルイズは言いよどむ。

「考えた事がないのなら今考えろ！」

そうだな、例えばカトレアさんがお国の為と言って敵国と戦って、その後敵国に捕まり、ルイズの目の前で見せしめとして殺されたと想像しろ。

そんな出来事があっても、お前はまだ名誉だのなんなのって言えるのかよ？」

「そんな・・・そんな事ない！ちい姉様が戦争に行くだなんて、そんな事ありえない。」

「例えばって言ったろ？それに万が一そんな自体になったら、俺の全能力を持って止めるっつーの。」

「うん。」

ルイズは俺の言葉を肯定する。

「あゝつまりなんだ。もし戦争になるような事態になったら、死に急ぐんじゃないくて、惨めになっても生き延びろって言いたかったんだ。」

生きていれば、例えどんな惨めな目にあっても、いつかそれを覆す事が出来るかもしれない。

今までお前が散々馬鹿にされて悔しい思いをしても、悔しくても今日まで生きてきたから俺が否定する事が出来た。だから、お前は嬉しかったんだろ？

今までの自分が認めて貰ったって思えたんだろ？」

俺はなるべく優しい声になるように、ルイズに語り掛ける。

「うん・・・」

「なら、今日と言つ日を忘れるな。どんなに苦しくても、惨めで悔しい思いをしても、きつと救いがあるんだって思ってた毎日を生き延びろ。」



世界はいつだって、死に急ぐ奴より、泥にまみれてもなお、前を向いて生きていける奴にだけ神様は微笑むもんなんだよ。だから、決して死に急ぐな！約束・・・出来るな？」

「うん。わかった・・・約束する。」

そして俺達は夕焼けに染まる教室で指きりをした。

「さて、じゃあそろそろ学院長に報告に行くか。もういい時間帯だろ？」

「そうね。行きましょ。」

そして俺とルイズは学院長に報告するため、夕暮れの教室を後にした。

## ルイズの魔法、夕焼けの約束（後書き）

ちよつと後半は強引だったかなと思っています。

それと、初感想ありがとうございます。

これからもがんばりますのでよろしくお願いします。

## 微熱のキュルケ

教室の修復を終えた俺は、ルイズが食事に行ったので、俺も食事を取る為にマルトーさんがいる厨房へと足を運んだ。

「マルトーさん。居ますか？ご飯貰いに来ました。」

「おう！我等が剣じゃないか！昨日は姿が見えなかったんで心配してたぞ。我等が剣。」

「ああ、すいません。昨日はちょっと野暮用でして、ルイズの実家に行ってたんですよ。それより、我等が剣ってなんですか？」

俺はマルトーさんの言葉に嫌な予感がして、一応念の為に聞いてみる事にした。

「我等が剣つてのはマモルのことだ。お前はメイジだが、他の貴族とは違い偉ぶらねーし、何より俺達をあの貴族から本当に守ってくれた。それに、マモルは魔法を使わずに剣技だけで貴族を倒した。我等平民の誇り、我等の剣だ。」

「守った？何の話ですか？」

「隠すなつて我等が剣。あのいけ好かない貴族の事に決まっているじゃないか！」

「ああ、もしかしてギーシュとの決闘の後に割ってきた貴族の事で

すか？

あれ？でもあの時、皆さんを守った記憶がないんですけど？」

「確かに、あの時は俺達も貴族の魔法に巻き込まれた。

けどマモルはその後、俺達を含めあの場に居た全員の傷を治してくれたじゃねーか。

俺達はあの時、お前の姿に感動したんだ。どうしてくれる我等が剣。

」

がははと笑い、マルトーさんは俺の肩に腕を回す。

「いや、あの時は当然のことをしたまでですから・・・」

「聞いたかみんな。真の達人つてのはこんな風に偉ぶらねーもんだ！うゝん・・・さすがだ。」

そう皆に聞こえる風にマルトーさんが言うと、その場に居た全員がその言葉に賛同する。

「ますます気に入ったぜ！我等が剣！ぜひとも俺に接吻させてくれ！んゝ・・・」

「え？ちょ、ま、まった！それ勘弁！！」

必死に抵抗するが、マルトーさんのガツチリした腕の拘束からは逃れられない。

（しまった。肩に腕を回したのは、このための布石か！）

なんて馬鹿な事を考えていても、マルトーさんは俺に接近してくる

わけで・・・

気が付いたら、マルトーさんの唇が数cmまで迫っていた。

「ストッププー！！！！」

シュンッ

俺は咄嗟に『テレポート空間移動』を使い、マルトーさんを少し離れた位置に移動させた。

ドシンッ

マルトーさんは咄嗟の出来事に対応できず、そのまま地面に倒れ、床と熱いベレーゼを交わしたのだった。

「はあはあ・・・あ、あぶねー。」

俺は自分の唇が守れた事を喜んだ。

そしてマルトーさんは、ゆっくりと起き上がり

「うーん・・・奥ゆかしい。さすがだ・・・」

何て事をほざきやがった。

その後、シエスタが持ってきてくれた夕食を食べ、俺はルイズの部屋に向かった。

「はあ、食った食った。」

少し食べ過ぎ気味なお腹をさすりながら、俺は階段を上り終えると、そこに待っていたのはキュルケの使い魔『フレイム』だった。

「お？フレイム。こんな所で何してんだ？もしかしてご主人様に追いつかれたのか？」

俺はヴィンタールヴの能力を使いながら話しかけた。

『違うよ。僕は君を待ってたんだ。』

フレイムは『キュルキュル』と言いながら俺に近づく。

「俺を？何でまた？」

『ご主人様に連れて来るように言われたんだ。って、人間なのに僕の言葉がわかるの？』

フレイムは普通に会話している俺に驚いている。

「ああ、わかるよ。俺はちょっと特殊だからな。」

『そうなんだ。それで、一緒に来てくれる。てか一緒に来て！じゃないと僕、ご飯抜きになっちゃう。』

「あゝわかったわかった。行く。ついて行ってやるから、そんな泣きそうな顔で服引っ張るな。伸びるだろうが。」

『ホント？ありがとうございます！』

そう言って俺とフレイムは、キュルケの部屋に向かったのだ。

『ご主人様ただいま。マモルつれてきたよ。』

キュルケの部屋に向かう途中に自己紹介をしたら、すっかりフレイムに懐かれてしまった。

そして俺は、キュルケの部屋をノックして中に入った。

「いらっしやい。ようこそ私のスイートルームへ。」

マモル・カ・ミシ・ロ？マモ・ルカ・ミシロだったかしら？」

なんか変な名前になりそうになったので、俺はキュルケが間違ってる覚えている俺の名前を修正する。

「マモル・カミシロ！呼びづらかったらマモルでいいぞ。」

「わかったわ。マモル・・・」

そう言つて、キュルケはしなを作る。

（おい。フレイム。聞こえるか？聞こえているなら返事をしろ。）

俺は能力の一つ、『<sup>テレパス</sup>精神感應』を使いフレイムに話しかける。

正直幻獣相手に通じるか不安だったが、フレイムがびっくりした様子でキョロキョロしていたので、俺はそのまま続ける事にした。

（慌てるなフレイム。俺だ。マモルだ。わかったのなら心の中で返事をしろ。）

『また聞こえた！何これ？ってマモル！？何なのこれ？それより、僕の声が聞こえてるの？』

軽くパニックを起こしているフレイムに対し俺は説明していく。

（ああ。聞こえてる。これは俺の使い魔としての能力の一つだから安心しろ。君に危害を加えるつもりはない。

それより聞きたいんだけど、キュルケっていつもあんな感じなのか？返答は心の中で呟いてくれ。俺に聞こえてるから。）

『わ、わかった。えっと、ご主人様の事だね？うん、大体はいつもあんな感じだよ。』

まだ少し戸惑っていたが、フレイムはキュルケを見て言う。

（わかった。突然話しかけて悪かったな。）

そう言つて俺は『<sup>テレパス</sup>精神感應』を切った。



「ちょっと、マモル聞いてるの？」

フレームと会話をしていたら、キュルケが怒っていた。

「あ、ああ。悪い聞いてなかった。それで、一体今日は何のようだった？」

この先の事は予想できるが、聞いてみないと話が進まないの、キュルケの聞いてみることにした。

「もう、急にぼうつとしちゃって・・・あ、もしかして私に見とれてた？イケナイ人ね？」

「いや違うから。それで、早く話を進めてくれないか？それでも忙しい身なんだが・・・」

勘違いしているキュルケに俺は催促をする。

「もう、せっかちさんね。」

あのね、私恋をしたの。」

「ああそう。何？恋愛相談？悪いけど俺はそういつのはちょっと・・・」

やんわりと否定してみる。

「違うわ。私、貴方に恋をしたの。まったく、恋はいつでも突然ね？」

「あゝそつすね。」

あまりにも予想通りだったので少し呆れる。

「でも、私の二つ名は『微熱』。松明にみたいに燃え上がりやすいの！」

そう言いながら俺に近づいてくるキュルケ。

「貴方がギーシュを倒したときの姿、かつこよかったわ。

あの時から、『微熱のキュルケ』は『情熱のキュルケ』になってしまったの。

私も、貴方の炎に抱かれないわ！」

（炎に抱かれない？ああ・・・浄破滅焼闇の時の台詞か。上手い事言うな・・・）

そんな考えをしていたら、俺はキュルケに押し倒された。

「イケナイ事だとは思っわ。でももう、燃え上がる恋の炎は止められないの！」

そう言ってキュルケは、俺にドンドン顔を近づけていく。

「ちょっと落ち着こうか！待てキュルケ話し合おう・・・！」

「キュルケ！」

俺がキュルケの行動に慌てていたら、窓のほうからキュルケを呼ぶ声がした。

「あら、ステインクス？」

「待ち合わせに君が来ないから、来てみれば・・・」

窓の外には、男子学生が浮いていた。

（ここ、3階だよな・・・？）

「じゃあ、2時間後に変更して？」

男子学生の言葉にキュルケはさらっと言う。なんと言うか・・・慣れたる？

「話が違う！」

怒っている男子学生にキュルケは杖を振るう。

すると、キュルケの杖から出た炎が男子学生を焼き、男子学生を撃ち落とす。

「今のは？」

「ただのお友達よ。」

とにかく、今一番私が愛しているのは・・・」

「キュルケ！」

また窓のほうから声が聞こえたので見てみると、今度はさっきと違う生徒が同じように浮いていた。

「その男は誰だ！今夜は僕とはげs・・・ぐわ！」

男が台詞を言い終える前に、キュルケの魔法が男子生徒を襲う。

「今のも・・・お友達？」

俺は呆れてキュルケに言う。

「そうよ。とにかく夜は短いわ。貴方との時間を無駄に過ごしたくないの・・・」

そう言つてまた俺に顔を近づけるキュルケ。

「「「キュルケ！！！」」」

三度窓の外から声がした。

「「「何してる！！！！恋人はいないって言ったじゃないか！！！」」」  
「」

（おお、凄いシンクロ率だ・・・）

なんて馬鹿な事を考えていたら、さすがに予想外だったのか、キュルケも少し慌てた様子で言う。

「マニカン、エイジャックス、ギムリ！え〜と、じゃあ6時間後に・・・」

「「「朝じゃないか！！！」」」

(「もつともで・・・」)

「むう。フレイム。」

そう言ってフレイムにキュルケは指示を出す。

そして窓にいた三人は、フレイムの炎で撃ち落とされた。哀れだ・

「おいおい・・・」

その光景に啞然としている俺にキュルケはまた顔を近づけながら言う。

「愛しているわ・・・マモル。」

「ん」とキスの体制で迫ってくるキュルケに、俺はため息を付き  
『レポート空間移動』でキュルケだけをベットに移動させる。

「あれ？マモル？」

突然移動させられたキュルケは、キョロキョロと辺りを見回し俺を探す。

「悪いなキュルケ。俺には婚約者がいるんだ。  
もし、君が本気で俺を愛してくれるなら、その時は俺は君に全力で  
答えよう。」

そう言って俺はドアに向かう。

「え？ちよつと待つて・・・！」

「じゃあね。おやすみ。」

そう言つて俺はキュルケの誘惑から脱出した。

「ただいまルイズ。今戻つた。」

俺はルイズの部屋に戻つてきた。

「あら、おかえり。ずいぶん遅かつたわね。」

「ああ、ちよつとキュルケと会つてな。少し話をしてた。」

そう俺が言つと、ルイズは驚いていた。

「キュルケと？アンタ、キュルケに変な事はされなかつた？」

「ん？別に何もされてねーよ。」

（うん嘘は言つてない。嘘は・・・）

疑わしい目で見るルイズに、俺は話を変えて気を逸らす事にした。

「所でルイズ。カトレアさんに病気も治ったことだし、前に言っていた通り俺に剣を買って欲しいんだが・・・」

「え？ああそうだったわね。明日は丁度虚無の曜日だから、明日買いにいきましょう。」

「わかった。じゃあ俺はルイズの洗濯物を片付けてから寝るわ。ルイズは先に休んでな。おやすみ。」

「わかった。おやすみマモル。」

そう言っただけ俺は洗濯籠を持って、外に出た。

洗濯場所に付いた俺は、錬成術で洗濯機を出してルイズの洗濯物を洗う。

「しかし、昨日の夜にカトレアと二人で何か話してたみたいけど、アレからルイズも変わったな。」

思い出すのは主人<sup>ルイズ</sup>の事。

昨日の宴会で、ルイズとカトレアが話をした後から、ルイズの態度が変わったのだ。

「なんつーか、素直になったっていうか。正直になったっていうか・

・  
」

俺は、少しづつ変わっていく主人<sup>ルイス</sup>の成長に笑みを浮かべる。

（とは言っても、ようやく明日デル公とご対面か・・・）

「よっしゃ！待ってるよデルフリンガー！」

俺はまだ見ぬ相棒に向けて声を上げた。



## デルフリンガーと女の戦い

トリステイン魔法学院の『虚無の曜日』

これは学校の休日の事を指す日で、学院にいる生徒はこの日は二つに別けられる。

一つは、学院に外出の許可を取り街に遊びに行く者。

もう一つは学院内で友人と過ごす者だ。

そして俺達は前者であり、今トリステイン王国首都、トリスタニアの城下町ブルドンネ街を歩いている。

「しかし、学院から馬で三時間か。乗馬に慣れるために馬を使っただけ、結構疲れるな、これ・・・」

俺は馬で揺られて痛めた腰を擦っていた。

「もう大丈夫？やっぱり能力使ったほうが良かったんじゃない？」

アレからルイズは、すっかり俺に懐いたのか結構碎けてきて、今は兄のように慕ってくれるようになった。

「いや、大丈夫だよ。何ごととも経験だし、ヴィンダールヴの効果でそんなにキツイって訳じゃないから。」

それにしても、結構狭いなこの通り・・・」

俺はルイズが大通りだと言っていたこの街を見て感想を言う。

「これでも結構大きいほうよ？それより、人ごみが多いんだから、スリには気をつけなさいよ？」

「ああ、それなら大丈夫。ルイズから預かったお金は王の財宝倉庫に入ってるし……」

そう言っつて、俺の懷に手を伸ばしてきたもう何度目かわからないスリを組み伏せて言う。

その後、スリを適当にボコつて放置し、『ムーブポイント座標移動』でスリに気づかれない様に財布を抜き取り、ルイズの後を追う。

「そうなの？なら安心ね。えっと、こっちよ。」

そう言っつてルイズは裏通りに入っつて行く。

しかし、その通りは汚物にまみれ、お世辞にも清潔とは言えなかった。

「待てよ……つて、汚ねーなこの通り……」

「う、しょうがないじゃない。武器屋はこの先なんだから！えっと、確かピエモンの秘薬屋の隣だったから……」

そう言っつてルイズは先に進んでいく。

「あ、あつた。ここだわ。」

目的の武器屋が見つかったので、俺達の中に入る。

「うちは真つ当な商売をしてるんでさあ。貴族やお上に目を付けられるような事なんか、これっぽっちもありませんや。」

ドスのかかった声で言われた。

「つか第一声がそれか？それでも商売人かよ・・・」

「客よ。剣を見させてもらうわ。」

ルイズの言葉に驚いたように言う店主。

「貴族様が剣を？」

「違うわ。使うのは私の使い魔よ。」

「はあ？しかし最近では宮廷でも、下僕に剣を持たすのが流行って  
いましてね・・・」

早速力モにされたのか、店主がセールストークを言う。

しかし、ルイズはそれを他所に一本のサーベルを持っていた。

「あの時もつと大きな剣を持っていたわよね？」

ギーシュの時の剣の事を言っているのだろう。

「ああ、てかルイズ。危ないぞ？それでも刃物なんだから扱いには気をつける。」

そう言って、両手で剣を持ち、ヨタヨタしていたルイズから剣を取り上げる。

「もっと大きくて太いのがいいわ。」

俺が剣を取り上げたのが不満だったのか、ルイズが店主に指示を出す。

「お言葉ですが、その御仁にはその位のサイズの剣がよろしいかと・  
・」

ルイズの言葉を聞いて、俺が持っていた剣を見て店主が言う。

「大きくて太いのがいいのと言ったのよ！」

ルイズは大きな声で指示を飛ばす。

「畏まりました。」

そう言って、店主は渋々店の奥に消えていった。

「おいルイズ。あんな言い方じゃカモにされかねんぞ？」

聞きはしないと思うが一応注意する。

「大丈夫よ。アンタがいるじゃない。」

笑みを浮かべて言うルイズ。

（さやか・・・）

信頼してくれるのはいいが、厄介ことは持ち込まないで欲しい・・・

「お待たせしました。こちらでございます。」

店主が持ってきたのは、派手な装飾が施された金ぴかの剣だった。

「こちらが店一番の業物でさあ。

この剣を鍛えたのはなんと、あの高名なゲルマニアの錬金魔術師『シュペー卿』ですぜ。

鉄なんか一刀両断ですぜ。」

「おいくら？」

明らかに鈍らだったが、ルイズがその見た目の豪華さに満足したのか、剣の値段を店主に聞いた。

「新金貨なら三千でさあ」

「立派な家と、森付きの庭が買えるじゃない！」

ルイズがあまりの値段の高さに驚く。

「名剣は城に匹敵しますぜ？屋敷で済めば安いもんでさあ・・・」

「新金貨百しか持って来てないわ。」

「っは。まともな大剣なら二百が相場ですわ。なんせ、自分の命を預けるんですからねえ・・・」

その言葉を聞いて、俺は店主に同意する。

「その通りだルイズ。剣を持つと言うことは、すなわち命のやり取りをすると同意だ。だからこそ、武器って言うのは高く値段が付けられている。」

平たく言うと命の値段だな。」

『おう、ちったーわかってるじゃねーか坊主。』

そう俺が言うと、目的の人物？が現れた。

「え？なに？誰なの？」

ルイズが突然の声にキョロキョロと周りを見渡す。

俺は声のする方向、樽の中に乱雑においてある剣を漁り、目的のブツを手取る。

「よう、待たせたな。相棒。」

『相棒だ？？ってこりやおでれーた。お前さん使い手か？』

「そついうことだ。これからよろしくな。」

そう言つて、俺はルイズに話しかける。

「ルイズ、これ買つてくれ。この剣がいい。」

「え？そんなさび付いた剣がいいの？  
こつちのほうが綺麗でいいんじゃない？」

そう言つて、ルイズはさっきの剣を見る。

「いいんだよこれで。後これも頼むわ。金が足りなかったらこいつ使つてもいいから。」

そう言つて、俺は投擲用のナイフを10セットと切れ味の良い短剣を追加して、さっきスリから貰った財布をルイズに渡した。

「わかつたわ。店主、これでおいくら？」

「へ、へえ。その剣は『デルフリンガー』と言うインテリジェンスソードでして、こつちも厄介払いみたいなもんなので、短剣と投擲用のナイフを合わせまして新金貨80で構いません。」

「そう？ならこれをお願いするわ。」

そう言つて会計を済まし、俺達は外に出る。

武器屋から出た俺たちは、休憩のためにカフェに寄つた。

「しかし、アンタ本当にこんな剣でよかったの？やっぱりあの剣の方がよかったんじゃない・・・」

まだ納得が言っていないルイズに俺は種明かしをする。

「あの剣は儀礼用だよ。どう見ても実践では使えない。」

『その通りだぜ貴族の娘っ子。しかし相棒、よく分かったな。』

俺の回答にデルフが驚く。

「まあこれでも剣士だからな。一応そういうのはわかるんだ。」

まあ実際には原作を知っているから答えられたのだが・・・

「へえ、やっぱりアンタって凄いのね。見直したわ。」

「ありがとルイズ。それよりデルフ。いい加減真の姿を現せ。」

俺はデルフを引き抜いて言う。

『相棒、俺はずっとこの姿だぜ？真の姿もねーよ。』

「あっそう。なら思い出させてやるよ！」

俺はそう言ってガンダールヴの力を使い、感情を爆発させる。

『うおおおお！！キタキタキタ！思い出したぜ相棒！』

そう言ってデルフリンガーが光り出し、本来の剣の姿に戻った。



「な、何よこれ！」

ルイズがその光景を見て驚く。

「これもガンダールヴの力さ。さ、学院に戻ろう。」

そう言って俺達は学院に戻るのだった。

学院に戻った時には、もうすでに当たりは薄暗く、夜に差しかかる  
うとする時間帯だった。

「私はこれから食堂に行くわ。アンタも厨房に行つて、マルトーさ  
んからご飯を貰つてきなさい。  
食べ終わったら寄り道せず、すぐに帰ってくるのよ。」

そう言って、ルイズは食堂に向かっていった。

俺も厨房に向かい移動をする。

「あっそうだ、デルフ。」

俺はデルフに呼びかける。

『何だ相棒。』

「デルフは俺に刻まれている使い魔のルーンに気づいてるだろ？」

『ああ。ガンダールヴにヴィンダールヴにミヨズニトニルン。おまけにリーヴスラシル。相棒、一体何もんだ？』

デルフが怪訝そうな声で聞いてくる。まあそうだよな・・・

「俺はしがない高校生だよ。それより、ルイズのことも、気が付いてるだろ？」

『ああ、始祖の再来か・・・だが』

「そう。まだ虚無は完成していない。だからさ、あいつが自分で気づくまで、ルイズが虚無だって事は黙っててくんねーか？」

『そりゃかまわねーけど・・・なんでだ？』

「こついうのは自分で気づかなきゃ、そいつの為になんねーんだよ。俺は、ルイズに力に溺れて欲しくない。」

そう言うと、デルフは『わかった。』といってそのまま黙り込んだ。

そうして俺は厨房でご飯を貰い、ルイズの部屋に帰った。

そして、ルイズの部屋に戻ると、何故かルイズとキュルケが睨み合っていた。

「あ、ダーリン！待ってたのよ！私、ダーリンに似合う剣を見つけ  
たからダーリンの為に買ってきたの。」

俺に気づいたキュルケは、真っ先に俺に近づき、先ほどの武器屋で  
店主が進めていたあの儀礼用の剣を見せた。

「いやダーリンって・・・つかキュルケ、悪いけど俺にはもう自  
分の剣があるから。」

そう言っただけは鞘に納まっているデルフを見せる。

「そうよ。マモルにはもうこのインテリジェンスソードがあるんだ  
から、アンタの剣なんか要らないわ。」

そういつて、ルイズも俺に賛同する。

「でもこの剣はゲルマニア製の業物だそうよ？  
剣も女もゲルマニアに限るわね。貴方みたいなトリスティンの女が  
適うわけないわ。」

そう言っただけはルイズを挑発する。

「へ、へんだ！アンタなんかゲルマニアで男を漁りすぎたからって、わざわざ隣の国に留学してきたんでしょ？」

そうして、売り言葉に買い言葉になってしまった二人は同時に杖を抜く。

「言ってくれるじゃない？」

「本当の事じゃない？」

まさに一触即発。

しかし、二人の杖は風の魔法で取り上げられる。

「室内・・・」

そう言つて、さつきから『我れ閑せず』といった感じで、ずっと読書をしていた青髪の女の子が言う。

「さつきから気になってたけど、誰よこの子？」

「私の友達よ。」

ルイズの疑問にキュルケが答える。

（お前等本当は仲いいだろ？）

つい先ほどまで喧嘩をしそうになった二人の態度に、俺は心の中で突っ込む。

「じゃあマモルに決めてもらいましょう?」

そう言つてキュルケは俺を巻き込む。

「そんな事しなくても、マモルは私が買った剣を取るに決まつてるじゃない?」

ルイズは、馬鹿馬鹿しいといった様子でキュルケを挑発する。

「なんですつて? ねえダーリン。そんな事ないわよね?」

キュルケはルイズの挑発を真に受けて俺に尋ねる。

「マモル。構わないから、その男も剣も目利きが出来ないゲルマニア女に言つておやりなさい。」

そう言つてルイズは俺に言うので、仕方なく説明する。

「まったく、痴話喧嘩で俺を巻き込むなよ。あゝとなキュルケ。その剣は儀礼用の剣で、中味は鈍らだぞ?」

俺の言葉にショックを受け、キュルケは膝をつく。

「そ、そんな・・・この私がルイズに劣るなんて・・・」

「おゝほほほ、残念だったわねキュルケ。その剣は貴方と同じで、見た目は豪華でも中味は鈍らなのよ!」

そう言つて、ここぞとばかりにルイズが勝ち誇る。

その態度にキュルケは「キツ」とルイズを睨み、立ち上がる。

「いい機会だから教えてあげる。私ね、あなたの事が大ッ嫌いなもの。」

「気が合うわね。実は、私もよ。」

そして二人は睨み合い・・・

「「決闘よ！！！！！」」

「マジ？っーかルイズ。やめとけよ、最悪死人が出る。」

俺は呆れてルイズに注意する。

「止めないで！女にはね！やらなきゃいけない時って言うのがあるのよー！！」

俺の言葉にルイズが激怒する。

「そうよダーリン。それにちゃんと手加減はするわ。さすがに私も人を殺すのは目覚めが悪いし・・・」

ルイズの言葉を聞き、キュルケはルイズを挑発しながら言う。

「いや、俺が心配してるのはルイズの方だって・・・なあ君、何か安全に決着を付けられる方法はないか？」

俺は読書をしている青髪の少女に尋ねる。

「ある。」

そう少女は言っ、今回の決闘の対決方法を決定していった。

二人の決闘の内容は、俺にとってとてつもなくはた迷惑な内容になった。

青髪の少女、タバサが決めた内容は、塔の上からロープで縛られた俺が吊るされた状態で、先に魔法を使って吊るされたロープを切った方が勝ちと言う内容になった。

「何でこんなことになってるんだろう・・・」

俺は思ったことを口に出し、この決闘の内容を決めたタバサを見る。

しかしタバサは、「私関係ありません」と言いたげな顔で、自分のシリフィード使い魔に乗って月明かりの読書を楽しんでいた。

「ふん。『ゼロのルイズ』には、少し不利な内容になったのかしら？いいわ、ハンデとして貴方が先にやりなさいな。」

「はん。後悔しても知らないんだから。」

そう言っ杖を構えて俺を睨み付ける。

「ちょっと待てルイズ！早まるな！」

俺は必死に抵抗するが、ルイズは聞き入れようとしない。

「うるさい！黙ってて！」

そう言ってルイズは俺目掛けて杖を振るう。

ドカーン！

俺のすぐ後ろで爆発が起こり、塔の壁が破壊される。

「あはは、ダメじゃないルイズ。せつかくのチャンスだったのよ？」

そう言っけキュルケは杖を振るい、俺が縛られているロープを焼き切る。

「うわあああ！」

焼き切られるロープ。

それはつまり、縛られている状態で空中に投げ出されるわけで……

そして、この世界にも重力というのは存在するわけで……

俺は重力に従い地面に落下していく。

「クソが！ふざけんな！」

俺は地面とぶつかる瞬間に、間一髪で『テレポート空間移動』を使い、縛られ



ている状態で無事に地面に着陸した。

「アブねーだろうが！」

「「ご、ごめんなさい。」」

俺の怒りに二人は素直に謝罪する。

「でもルイズ。わかつてはいたけど私の勝ちね？」

そう言って勝ち誇るキュルケに、ルイズは悔しそうにする。

（はぁ・・・フォロー入れとくか。）

「そうだな。今回はキュルケの勝ちだ。

でも良かったなキュルケ？こんな決闘の内容で・・・」

「どついう事よダーリン？」

俺の言葉を聞き、不思議そうにキュルケは言う。

「俺とギーシュがやった時みたいな決闘だったら、最悪お前死んだぞ？」

「「どついうこと？」」

俺の発言にルイズまでもが不思議そうにする。

「それはな  
」

ガーン！！

俺がその答えを言おうとしたら、学院の方から壁を殴ったような凄まじい音がした。

「な、なんなのよあれ！！！」

ルイズが叫ぶと、そこにいたのは巨大なゴーレムだった。

そのゴーレムを見てキュルケが驚いて叫ぶ。

「見て、人が乗っているわ。」

暗闇で体格まではわからないが、ゴーレムの肩には何か箱のような物を持った人の姿があった。

そして、ゴーレムはそのまま学院の壁を跨ぎ、闇の中へと姿を消していった。

## 虚無の可能性

『破壊の杖、確かに領収いたしました。　土くれのフーケ』

土くれのフーケ。

トリスティンはじめ各国の貴族に知られるメイジの盗賊。

二つ名の「土くれ」は、盗みを働く際に錬金魔法を使い、防御魔法のかかった壁などを土くれに変えることから付けられた。

貴族が所持する秘宝、特に稀少なマジックアイテムを好んで狙い、盗んだ跡には大書された領収のサインを残してゆく。これは秘宝を盗まれた貴族たちの慌てふためく様を見たいがためである。

盗みの手段として、夜陰に紛れての手段のほか、時には身の丈30メートルにも及ぶ巨大な土ゴーレムを作り出し、大々的な破壊活動の末に強奪する場合もある。

トライアングルクラスの優秀なメイジだが、体術にも相当の心得がある。

俺は今、学院の図書室に忍び込みフーケの報告書を見ている。

・  
どうしてこんな事をしているかという、昨日の夜の件が原因だ・

昨日のルイズたちの決闘の時に現れたのは、土くれのフーケだったことが判明した。

そして俺達は今、フーケの目撃者だったので学院長に呼び出されていた。

んでもって、原作通りに先生同士で責任を押し付け合い、オスマン学院長の鶴の一声で責任を押し付けあった先生達は静かになった。

「ふむ。ではフーケを捕らえて名を上げたいと思う者はおらんか？  
我と思う者は杖を掲げよ。」

オスマンがその場に全員に尋ねたが、誰も杖を上げない。

「はい。私が行きます。」

（ですよね・・・）

杖を上げない先生達に代わって、ルイズが杖を掲げる。

「私も参りますわ。」

そしてつられるようにして、キュルケも同様に杖を掲げる

「ツエルプストー？」

「ふん。ヴァリエールには負けられませんわ。」

「あ、あんたね・・・」

対抗心むき出しで二人は睨み合っていたが、キュルケは自分の友人が杖を掲げているを見た。

「タバサ？貴方はいいのよ？これはあたし達の問題ですもの。」

「え？」

キュルケの言葉にルイズもタバサの行動に気づく。

「二人が、心配。」

「タバサ・・・」

「あ、ありがとう・・・」

タバサの言葉に、キュルケとルイズは感極まった言葉でそう言った。

「ふふ、では三人に頼むでしょう。」

三人の様子を見ていたオスマンは満足そうに言う。

「この三人はフーケの目撃者だ。その上、ミス・タバサは若くして『シュバリエ』の称号を持つ騎士ナイトでもある。」

オスマンの発言にルイズとキュルケが驚く。

「ええ！ナイト！」

「本当なのタバサ？」

二人の言葉を聞き、タバサは頷く。

「さらに、ミス・ツエルプストーはゲルマニアの優秀な軍人の家系で、彼女自身の炎の魔法もかなり強力だと聞いている。」

そう言つてオスマンが続けると、キュルケは自慢げに胸を張る。

「そして・・・オホン。その、ミス・ヴァリエールは優秀なメイジを輩出したヴァリエール家の息女で、えゝその、なんだ・・・」

ルイズの紹介の時に、ルイズは堂々と胸と張っていたが、オスマンが言い淀んだので不思議そうな顔をした。

「将来有望な・・・おお！そうであつた。」

オスマンは名案とばかりに手を叩き、急に滑舌になる。

「その使い魔は、グラモン元帥の息子であるギーシュ・ド・グラモンを圧倒するほどの剣の使い手だと聞いておるぞ。」

オスマンは俺を褒めるように言うと、その言葉を聞いたルイズは俺を睨んでくる。

「そうでした。彼は伝説の『ガンダ』」

そこまで言つてコルベールは口を押さえる。

「魔法学院は、諸君等の努力と貴族の義務に期待する。」

そう言つてオスマンは杖を掲げると、ルイズたち三人もそれに習つて杖を掲げる。

「ところで、ミス・ロングビルはどこに？朝から姿が見えませんが・・・」

そうコルベールが言うと、学院長室のドアが開いた。

「私はここにいますわ。ミスタ・コルベール。朝から学院が騒がしかったので聞いてみると、宝物庫が襲われたと聞きました。

私は急いで近隣の調査に向かい、村で聞き込みをしてフーケの居場所を突き止めましたの。」

その発言に室内が騒然となる。

（ホント、よく言うよ・・・）

「さすが、ミス・ロングビル。仕事が早いの。」

オスマンは感心した様に言う。

「それで、村の情報を頼りに私がフーケの似顔絵を作ってみました。」

そう言つてオスマンに紙を渡すロングビル。

その紙を見て、オスマンは俺達にもその男似顔絵を見せる。

「これはフーケです。間違いありません。」

ルイズの発言にキュルケとタバサが頷く。

「フーケが潜伏している場所まで、私が馬車で先導します。学院長、

よろしいですね?」

「うむ。気をつけるのだぞ。」

そう言つてオスマンは許可を出す。

デルフを持つて学院の正門に向かうと、そこにはロングビルが馬車を用意して待つていた。

そして全員が集合したので、フーケの潜伏先まで出発したのだ。

「なあルイズ。さっき学院長が言つてた、タバサが持つてる『シュバリエ』の称号つて、そんなに凄いのか?」

俺は馬車に揺られながら、さっきの学院長室でのやり取りを思い出してルイズに聞く。

「『シュバリエ』つて言うのは、国に多大な功績を残した人に送られる騎士の称号よ。これを持つ人は、平民でも貴族になれるのよ。」

「へえ、なるほどね。しかし、今から退治しにいくフーケつて言う盗賊は魔法使いなんだろ? 何で貴族が盗賊なんてやってるんだ?」

「メイジが全員貴族という訳ではありませんわ。様々な事情で、貴



族から平民になった者も多いのです。

その中には、身をやつして傭兵になったり、犯罪者になる者もおりますわ。

この私だって、貴族の名を無くした者だし・・・」

「え？」

ロングビルという言葉聞いてルイズが声を出す。

「だって、ミス・ロングビルはオールド・オスマンの秘書なのですよ？」

「オスマン氏は、貴族や平民といったことに拘らない人ですから。」

「では、こういった事情で貴族の名を？」

キュルケが好奇心でロングビルに聞く。

「やめなさいよ。キュルケ。」

その行動にルイズが注意する。

「そうだぞキュルケ。それに、少しかり秘密を持った女性のほうが、男は魅力を感じるものだぜ？」

俺の言葉を聞いて、キュルケは渋々ながら諦める。

「あら、ミス・ヴァリエールの使い魔さんはお上手ですね。」

にっこりと笑顔で言われた。

そんな会話をしていたら、ふいにタバサに服を引っ張られる。

「昨日の、話の続き。」

「昨日の？何の話だ？」

俺は突然言われたのだが、主語がわからないので話についていけない。

「あ！そうだわダーリン。結局フーケのせいで聞きそびれたけど、昨日の夜、あの時なんて言おうとしたの？」

「え？ああもしかして、キュルケがルイズに勝てない理由の事か？」

「そうよ。何で私がヴァリエールに勝てないのかちゃんと教えてよね。」

「その話なら、私も興味があるわ。」

そう言っただけ俺は三人の視線を浴びる。

「あゝわかったわかった。この話は俺の完全な推測だけど、それでいいなら話してやるよ。」

「つと、その前にタバサ、お前は騎士なんだろう？という事は少なからず実戦経験あるよな？」

俺はそうタバサに尋ねると、タバサは頷く。

「じゃあタバサに質問だ。ルイズとキュルケも一緒に考えてくれ。

ある二人が決闘することになる。

一人は優秀な火のメイジで、呪文を唱えて杖を振るい、杖の先から目に見える強力な火を操り、相手を攻撃する。

一方、もう一人のメイジは、メイジとしては落ちこぼれで、杖を振るっても失敗ばかりで、狙った空間を爆発するだけ。

さてここで問題です。

一人は強力で目に見える攻撃を、  
もう一人は、同じく強力だけど、目に見えない攻撃をするメイジです。

危険で対処がし辛いのはどっちでしょう？」

俺の質問にキュルケとルイズは考え込み、タバサは答えを口にする。

「後者。見えない攻撃はそれだけで危険。」

「正解。この質問は前者がキュルケで、後者がルイズだ。二人ともわかったか？特にルイズ、お前の魔法はさっき言ったように危ないものなんだから、扱いには気をつけろよ。」

そう説明した俺に対し、キュルケは納得がいかないのか声を上げる。

「ちょっと待ってダーリン。それだけじゃ納得できないわ。もっと詳しく説明して頂戴。」

「はあ・・・わかったよ。いいか？さっきも言ったけど、ルイズの魔法はこと戦闘においてはそれだけで危険なんだ。

キュルケ、お前戦闘において見えない攻撃にどう対処する気だよ？」

「そ、それは・・・」

俺の質問にキュルケは言いよどむ。

「俺はこの前、ルイズの爆発魔法を初めて見た時に正直焦ったよ。ただ杖を振るっただけで教室を一つ丸ごと吹き飛ばすあの威力。それに、その後確認したら、杖の先だけでなく離れた場所でも爆発を起こせる。」

これで指定した所に爆発させられる魔法制御能力と、爆発の規模を自由に操れる精密性をルイズが習得したら、間違いなく一対一なら最強の存在になるぞ？

一対多数の戦闘においてもやり方さえ覚えれば、化け物級の実力者になれる。」

キュルケも軍人の家系に生まれたらのなら、このヤバさはわかるだろう？」

俺の言葉に、キュルケは黙り込む。

「アンタ、あの時中庭で私に魔法を使わせたのはこの為だったのね。」

「ああまあな。これでお前の魔法が如何に危険になるのかがわかっただろ？」

「うん・・・」

そう言っただけでルイズは黙り込む。

「で、でもダーリン。それだけじゃ納得できないわ。」

「あのなあキュルケ。いい加減現実を直視しろ。」

確かに今はお前の方が魔法の才脳もセンスも上だろうけど、将来は確実にルイズに抜かれるぞ？

さっき俺が言ったことをルイズが習得したら、俺でも一対一じゃ勝つことは出来ないんだ。

例えばキュルケ、お前はどこから来るかも、爆発の規模もわからない攻撃にどう対処する？それに、杖を振るうという行為も重要だ。

この行為は簡単にフェイントに使えるんだ。杖を振るった瞬間、逃げるようにその場を回避したが、実はそれがフェイクで回避先を爆発させたら終わりだぞ？

そんなの、俺でもごめんこうむりたいわ！」

そこまで言っていると、キュルケはようやく納得してくれた。

「お話中失礼。フーケの潜伏先が見えてきました。」

そうして俺達は、フーケの潜伏先である炭焼き小屋に到着したのだ。

## 虚無の可能性（後書き）

実際にそう思います。

虚無には色んな説がありますが、やっぱり強力だと思う作者でした。

## 土くれのフーケ

フーケの潜伏先である炭焼き小屋に着いた俺たちは、近くの茂みに身を隠し作戦を練っていた。

「それで、誰が偵察に行きますか？」

「すばしっこいの。」

ロングビルの言葉にタバサが答える。

そして、俺に全員の視線が集まる。

「わかった。行くよ、行きますよ・・・」

（どうせこうなるんだよな。ったく・・・）

心の中で悪態をつきながら炭焼き小屋に向かう。

（どうせ人はいないし、さっさと破壊の杖を回収してゴーレム戦と洒落込みますか・・・）

そう考え、俺は中を覗き込み、ついでに魔法を使って畏がないか確かめる。

「おい。誰もいないみたいだぞ？」

そう言って茂みに隠れてたルイズたちを呼ぶ。

そして、俺、キュルケ、タバサで中に入って調査をし、ルイズが見張り、ロングビルが周囲の探索をしにいった。

「破壊の杖。」

しばらく探索していると、タバサが原作通りに破壊の杖を見つけた。

「キヤーーーー！！！！」

ドーン！

ルイズの悲鳴と共に炭焼き小屋の屋根が吹き飛び、巨大なゴーレムが姿を現した。

そして、キュルケとタバサは魔法を唱えてゴーレムに応戦するが、まったく歯が立たない。

そして、ルイズがゴーレムに向けて杖を向ける姿が、目に飛び込んできた。

「馬鹿！！何やってんだ！さっさと逃げろ！！」

「嫌よ！アンタ私が強くなれるって言ったじゃない！それに、私は貴族よ！！」

魔法が使えるのを貴族と呼ぶんじゃないわ！敵に後ろを見せない者を貴族と呼ぶのよ！！」

そう言ってルイズは杖を振るい、爆発魔法がゴーレムを襲う。

しかし、ゴーレムの方にはダメージがなく、逆にルイズに標的を絞



られる結果となった。

（っち！さっき話したことが裏目に出たか！）

「ルイズ！！」

俺は『瞬動術』でルイズに駆け寄り、そのままルイズを抱え、ゴーレムから距離をとる。

「ったく、あの時約束しただろ？死に急ぐなって・・・それに、勇気と蛮勇はまったくの別物だぞ？」

「だって、いつも、いつも馬鹿にされて・・・アンタに励まされたけど、やっぱり悔しくて・・・逃げたらまた馬鹿にされると思ったの・・・」

「ルイズ・・・」

そう言つてルイズは俺の胸の中で悔し涙を流す。

「それに・・・さっきアンタが言ってくれたこと、証明したくて・・・」

アンタの自慢のご主人様だって、思われたかったんだもん・・・」

その言葉を聞いて、俺は恥ずかしくなり照れ隠しに頭を掻く。

そして、シルフィードに乗ったタバサとキュルケが現れた。

「乗って。」

タバサは短く俺に言う。

「キュルケ。うちのご主人様を頼むわ。」

俺はルイズをキュルケに預ける。

「貴方も。」

「いや、俺はうちのご主人様を泣かした、あのゴーレムにお仕置きしてくる。」

そう言っただ俺はデルフを抜く。

「早く行け！それとルイズ、俺はお前を自慢のご主人だっと思ってるぜ？」

だから、安心して空から俺の戦いぶりを見てな。」

そう言っただ俺はゴーレムに目掛けて駆け出して行った。

「行くぞデル公！お前のデビュー戦だ！」

『おう！任せろ相棒！！』

そうして俺はゴーレムに切りかかる。

「喰らえ！神鳴流奥義『斬岩剣』！」

スパーン！

俺は斬岩剣でゴーレムの右足を切り落とす。

「もういつちょ！奥義『斬岩剣！百花繚乱！』」

ザン！スパパパ！

片足を無くしバランスが崩れたゴーレムの体に、俺は斬岩剣の連撃を食らわしていく。

細切れになったゴーレムは、そのまま地面に倒れた。

ズズーン！

しかし、倒れたゴーレムは地面の土を吸収していく。

「クソ！やっぱ一筋縄じゃいかねーか・・・」

俺は再生するゴーレムを見て悪態をつく。

『相棒。土系統で出来たゴーレムはその再生能力が強みだ。だが、ゴーレムの体のどこかに存在する、魔法の核を潰せば倒せる！』

デルフがアドバイスをくれた。

「わかった。」

そして、俺はゴーレムの核を探す為に再びゴーレムに切りかかった。

一方そのころ、ルイズたちはシルフィードの背中の上で、マモルの戦いを見ていた。

「強い」

「本当だわ。ギーシュとの決闘が、まるで遊びみたい・・・」

タバサとキュルケはマモルの異常な実力に驚きを隠せずにいた。

「やった！ゴーレムを倒したわ！」

マモルがゴーレムを倒したのを見てルイズは喜んだ。

「待つて。アレを・・・」

「ウソ！」

「そんな・・・再生した？」

マモルが倒したはずのゴーレムが再生したのを見て、三人は驚く。

「これじゃダーリンに勝ち目なんかないわよ！」

キュルケが驚いたまま、不安そうに言う。

そしてルイズは、タバサが持っていた破壊の杖を奪う。

「貸して！」

「何する気？」

突然自分が持っていた破壊の杖を奪われ、タバサは奪ったルイズに尋ねる。

「私を降ろして！」

「ルイズ！！」

ルイズはタバサの質問に答えず、シルフィードから飛び降りた。

タバサは仕方なくルイズに魔法をかけ、ルイズを地面へと降ろした。

俺はゴーレムの再生能力に徐々におされている時、ルイズが空から下りてくるのを目撃した。

「バカ！何やってんだ！！」

俺は下りてくるルイズに言う。

「マモルから離れなさい！」

しかしルイズは俺の言葉を見向きもせず、ゴーレムに言う。

「えい！えい！」

そしてルイズは手に持っていた破壊の杖、『ロケットランチャー』を懸命に振るっていた。

それに気づいたのか、ゴーレムがルイズに標的を変える。

「ツチ！ルイズー！！」

俺は瞬動術でルイズに駆け寄り、ルイズからロケットランチャーを奪う。

そしてそのまま、ガンダールヴの効果でロケットランチャーを組み立て、ゴーレムに狙いを定める。

「伏せろ！！」

俺はルイズにそう言って、ゴーレムにロケットランチャーをぶっ放す。

シュ……ドーン！！

凄まじい爆風を受けながら、ゴーレムは完全に破壊された。

俺は、崩れ落ちるゴーレムを見て、ロケットランチャーを投げ捨て

てルイズを振ってくる石から守る。

ゴーレムが作った土煙が晴れたのを確認して、俺はルイズの無事を確認する。

「無事か？ルイズ。」

「え、ええ。ありがとう。」

ルイズが戸惑いながら答えると、不意に後ろから衝撃を受けた。

「平民なのに魔法の杖を扱えるなんて！やっぱり私のダーリンね。」

そう言って俺に抱き付いてきたのはキュルケだった。

「フリーケはどこに？」

タバサは、俺達に近づいて言う。

「あ！ゴーレムがいたってことは、まだこの近くに？」

キュルケはタバサの言葉を聞いて気を引き締めて辺りを見回した。

ルイズもタバサの言葉に気づいたのか、キュルケと同じように周りを見回す。

「ふふ、ご苦労様。」

そう言っで、今まで姿を現さなかったロングビルが、破壊の杖『ロケットランチャー』を持って言う。

「ミス・ロングビル。今までどこに？」

ルイズがロングビルに問う。

「『破壊の杖』と言うだけはあるわね？私のゴーレムが、粉々じゃない？」

そう言っただけでロングビルは、ロケットランチャーを俺達に向ける。

「私のゴーレム？」

「どういう事？」

キュルケとルイズが戸惑ったように言う。

「そんなの決まってるじゃん。ミス・ロングビルが『土くれのフィーケ』だったってことだよ。」

俺は戸惑うルイズたちに説明をしていく。

「へえ？使い魔君は私がフィーケだったってことに気づいてたのかい？」

「ああ、まあな。」

目を細めて聞くフィーケに対し、俺は飄々とした態度で言う。

「アンタ！気づいてたのなら教えなさいよ！」



「そうよダーリン！何で教えてくれなかったの？」

俺の言葉にルイズとキュルケは激怒する。

「いや、だってあんな矛盾だらけの事言ってたから、とっくに気づいているのだばかり・・・」

俺は戸惑いながら言う。まあ演技なんだけど・・・

「矛盾だらけ？」

「どういう事よダーリン？」

二人は俺の言葉を聞き、不思議そうな顔をする。

「へえ・・・どこが矛盾だらけだって？ぜひとも説明してもらおうじゃないか。」

フーケも気が付いていないのか、俺に聞いてくる。

「おいフーケ。お前気づいてないのか？」

さすがに驚いたので、フーケに聞いてみた。

「何にだい？私は完璧にロングビルを演じたはずだよ？」

「おかしなところはない」とでも言いたげな顔で言うフーケに対し、俺はフーケの矛盾を説明してやった。

「じゃあ説明するけど、昨日俺達はルイズ達の決闘のために夜中に

中庭に出て、その時にフーケを目撃した。ここまではいいな？」

俺は確認のために、いったんここで区切る。

「俺達はすぐにオスマン氏に報告したが、夜遅く宝物庫も暗くて何が盗まれたのかわからない状態だった。

そして明るくなったその翌日、つまり今日なのだが、早朝にフーケが破壊の杖を盗んだことが学院内に発覚。その後学院全体に知れ渡る。ここまでは何も矛盾はないはずだ。」

俺はそう言ってルイズ達を見渡す。

「そして授業が始まる頃の時間帯、俺達はフーケの目撃者として学院長室に呼び出される。そして俺達は犯人はフーケだったと知らされて、討伐の為に志願する。

んで、問題なのはここから。志願した後にフーケ、お前が帰ってきた。」

そう言っただけ俺はフーケを見る。

「フーケお前は言っただけ？朝騒がしかったから独自で村に調査に行っただけ。」

「ああ言っただけ。それがなんだってんだ。」

「村で調査をしたということは、学院から村まで行き、村の人から聞き込みをして学院まで戻ってきたことになる。

それにお前はフーケの居場所を突き止め、この炭焼き小屋までの場所を迷うことなくきている。つまりそれは、この場所に来たという証拠だ。」

さてフーケ、学院でフーケが侵入したと騒がれて、俺達が志願するまでの時間は多く見積もっても4時間が限度。

その間に君はどうやって村に行き、聞き込みを開始して、さらに馬車で5時間もあるこの場所を確認することが出来、尚且つ帰ってくることが出たのかな？」

そこまで言うところ、ルイズ達も理解したのか、フーケを見た。

「おそらくお前は、昨日その『破壊の杖』を盗んだ方がいいが、大方便い方がわからなくて仕方なくこの炭焼き小屋に隠し、学院まで戻ってきたんだろう。」

しかし、学院に戻った時はすでにフーケの騒ぎがあり、急いで学院長室に戻った時にすでに討伐隊が結成されていたから、慌てて話を合わせたんだ。

「どうだ？俺の推理、間違っているか？」

俺は原作で知ったことをそのまま披露する。

「ツク、その通りだよ。さすが『ガンダールヴ』ね。でも、結局アンタ達はこの状況から逃れられない。もし、アンタ達が動いたら容赦なく破壊の杖を使う。」

さあ、お嬢ちゃんたちは杖を捨てな。アンタはその剣を捨てるんだ。

「

開き直ったのか、フーケはロケットランチャーに手を当てて言う。

ルイズ達はさっきのロケットランチャーの威力を見ていたので、素直に杖を捨てる。

「どうした？アンタも早く捨てな！これを使って欲しいのかい？」

剣を捨てようとしないうちにフーケは起こったように言う。

「！」

「マモル！」

「ダーリン！」

ルイズ達が俺の行動に驚く。

「撃てよ……」

「何？」

俺はフーケに対し小さく呟く。

「撃てるもんなら撃ってみろっていったんだ！」

俺の啖呵にその場にいた全員が驚く。

「そう。ならお望みどおり撃ってあげる。さよなら。」

そう言ってフーケは引き金を引く。

カチッ

ルイズ達は全員目を瞑ったが、俺はフーケに向かって走り出した。

「あれ？なんで？」

カチツカチツ

いつまでも玉が発射しないフーケは焦る。

そして俺はフーケの腹に剣の柄を当て、フーケを気絶させる。

「残念だったなフーケ。これは俺の世界の武器で、一回しか使えない単発式なんだ。」

そう言っで、俺は倒れたフーケを抱える。

「これで今回の事件は無事終了だな。」

そう言っで俺はルイズ達に笑みを浮かべた

その後、俺はルイズに『破壊の杖』を預けて、シルフィードにルイズ達を乗せて先に学院に帰らせた。

「アンタ本当に大丈夫？ 気絶しているとはいえ、フーケと二人きりだなんて。」

ルイズがシルフィードに乗りながら言う。

「大丈夫だよ。それより、早くこいつを持って学院長に報告しな。」

そう言っで俺は『破壊の杖』を渡す。

「じゃあタバサ、学院まで頼んだぞ。」

タバサは頷くと、ルイズ達を乗せて学院に向けて飛び立った。

「さてと・・・おいフーケ。起きてるんだろ？」

俺は、気絶している振りをしているフーケに声を掛ける。

「なんだ。ばれてのかい。」

拘束されているフーケが起きて俺に言う。

「まあな。さてフーケ。いや、マチルダ・オブ・サウスゴータ。取引をしようじゃないか。」

俺はニヤッと笑ってマチルダに話をする。

「ずいぶん昔の名前が出てきたねえ。アンタ、それをどこで知った？」

マチルダは、自分の名前が出た途端俺を睨み付ける。

「さあ？俺に付いてくれるのなら、情報源を明かそうじゃないか。」

「アンタ。何が目的だい？」

マチルダは怪しい者を見るような目で俺を観察する。

「君の妹って言ったらどうする？」

そう言つて瞬間、マチルダは目を見開き、鬼のような形相で俺を睨み付けた。

「アンタ！テファに手を出そうつてのかい！」

「ちげーよ。俺は俺の計画を発動させる為に、お前の力が欲しいんだ。そのために君の妹にも協力して欲しい。」

「なんだつて？」

俺の言葉にマチルダは驚く。

「俺に協力してくれるのなら、この場で君を助ける。王宮に捕まったら即牢獄行き。そうなったら、一体誰が孤児院で住む君の妹と、その子供達を養つていくんだ？」

君にとつても悪い条件じゃないはずだよ？俺も、君に無茶なことをさせないと約束する。」

「一つ。確認させてくれ。あんたは何をするつもりだい？」

「将来的なことは詳しくは話せない。だが、絶対に悪い条件じゃない。俺を信じて付いてきて欲しい。」

俺はマチルダの眼を見て言った。

「・・・わかった。アンタに付くよ。どの道王宮に捕まったら終わ

りなんだ。けど、ティファニアは渡さないからね?」

そう言っマチルダは承諾してくれた。

「ははは、わかった。でも、もしティファが俺に惚れたら、その時は妹の幸せを考えてやれよ?」

「ふん。言ってくれるじゃないか。」

そうして、俺はマチルダを無事に仲間に入れることに成功した。

「じゃあ、しばらくは王都で身を潜めてくれ。護衛の為に俺の分身を付けるから、後で落ち合おう。」

そう言っ俺は影分身を作りだす。

ボン

「うわ!それっ『偏在』かい?」

突然現れた俺の影分身にマチルダは驚く。

「まあ似たようなもんだよ。あと、これ。こいつで宿でも取ってくれ。」

そう言っ俺は、以前スリから貰ったお金をマチルダに渡す。

「こんなにかい?」

マチルダは、受け取った金額に驚いていた。



「ああ。余ったお金はやるよ。じゃあ俺もそろそろ行かないと、ルイズ達に怪しまれるから。」

街までは俺の分身に送ってもらえ。じゃあ、頼んだぞ。」

「わかった。」

俺の分身は返事をして、マチルダを抱えると、『ムーブポイント座標移動』で、王都まで移動した。

それを見送った俺も、学院まで、『ムーブポイント座標移動』で移動して帰ったのだ。  
った。

## それは崩壊の始まり

俺は学院に帰って今回のフーケ討伐の報告をした。

その内容は、ルイズ達が先に話していたが、俺はフーケの死亡と言う偽の情報を追加した。

「そうか。ミス・ロングビルは亡くなったか・・・」

オスマンが酷く落胆した声で言った。

「はい。すいません、実力が拮抗していたので生きて捕らえる事が難しく、止むなく手を下しました。」

「すまんのう、おぬしには辛い思いをさせた。」

「いえ・・・気にしないで下さい。それより、あの『破壊の杖』はどこで手に入れたのですか？」

俺はオスマンに破壊の杖の事を聞いた。

「なぜ、そんなことを聞くんじゃない？」

（ツチ、タヌキが・・・やっぱ情報<sup>カード</sup>を切るしかないか・・・）

そう判断し、俺は異世界人であることを明かした。

「実は俺はこの世界の人間じゃないんです。何もわからずルイズに召喚されたんです。」

「そうなのか？」

俺の言葉にオスマンが驚く。

「あの『破壊の杖』は、元々は俺がいた世界の武器なんです。」

「なるほどのう……そうじゃったか。」

オスマンは俺の言葉を聞き、何か思い出すように言う。

「『破壊の杖』はある男の形見なんじゃ。」

もう30年ほど前になるかのう……わしがワイバーンに襲われていた時に、その男に出会ったのじゃ。

その男はワイバーンから破壊の杖でわしを守ってくれた命の恩人での、奇妙な格好をしておったわい。

その男は酷い怪我を負っていたの、わしは男を学院まで連れて行き、手厚く看護したのじゃが……」

そこでオスマンは言いよどむ。

「その結果はむなしく、亡くなったと……？」

「うむ……結局何者なのか、どこから来たのかわからなかった。」

男は『破壊の杖』を2本持っておってな、私を救った一本は男と共に墓に、もう一本はわしが宮廷に献上したんじゃないよ。」

「なるほど……そうだった経緯があっただんですね。」

俺は感心した様に言う。

「辛い思い出をお話して下さい、ありがとうございました。」

俺はオスマンにお礼を言う。

「いや、いいんじゃない。わしからはもう話す事はない。君も今夜の祝賀会に参加するが良い。」

「はい。ありがとうございます。」

俺はお礼を言つて学院長室を後にした。

そして開かれる祝賀会。

生徒達は礼服に身を包み、あるモノはダンスのパートナー探しを、またあるモノは豪華な食事を楽しんでいた。

俺はその中で、食事をしているタバサに話しかける。

「おっすタバサ。今ちよつといいいか？」

そう尋ねた俺に、タバサは食事を中断して俺の方を向く。

「なに？」

「今日はありがとう。君がいてくれて助かったよ。お礼がしたいんだけど、今日の夜にでも君の部屋を訪ねてもいいかな？」

「別に構わない。」

タバサはそっけなく言う。

「じゃあまた後で。祝賀会が終わった後にも行くよ。」

そう言うタバサは頷いて、食事を再開する。

「じゃあな。シャルロット。」

そうタバサの耳元で小さく呟いた俺は、その場を後にしてバルコニーの方に向かった。

『ヴァリエール公爵が息女、ルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール嬢のおなごりっ！！』

バルコニーで寛いでいたら、祝賀会にルイズが登場する声が上がった。

そしてドレスに身を包んだルイズは、祝賀会に参加する際と全員を魅了したのだ。

そしてルイズはたくさんの男子生徒に誘われるが、その全てを無視

して俺の前にやってきた。

『おう、馬子にも衣装じゃねーか』

「う、うるさいわね！」

デルフの冷やかに、ルイズは顔を赤くして反論する。

「へえ・・・似合ってるじゃん。」

俺は正直な感想を口にする

「あ、ありがとう。」

ルイズは恥ずかしそうに俺の言葉を受け取る。

そして、会場に音楽が流れ始めた。

「お？なんか始まったみたいだな。お前も行ってこいよ？誘われてたろ？」

俺はそう言つと、ルイズは無言で手を差し伸べる。

「お、踊ってあげても良くってよ？」

ルイズは恥ずかしそうにそばを向いて俺に言う。

「はぁ・・・こういう時は、誘うほうが淑女でも礼儀ってもんがあるだろ？」

俺はため息混じりにそう言う。

「き、今日だけだからね!」

ルイズはそう言うのと、姿勢を正して俺に言った。

「私と、一曲踊って下さいませんか。紳士様?」  
わたくし ジェントルマン

「ふふ、畏まりました。お姫様。」  
レディ

俺達はそう言うて手を取り合い、ダンスホールに足を運ぶ。

「ねえ、信じてあげるわ。貴方の事。」

踊っている時にルイズが話しかけてきた。

「何だ?まだ信じてなかったのか?」

「今まで半信半疑だったの。でも、あの『破壊の杖』はあんたの世界の武器なんですよ?

あんなの見せられたら、信じるしかないじゃない・・・」

ルイズは俺にそう言った。俺はそのまま無言でルイズの言葉を聞く。

「ねえ・・・帰りたい?」

「さあな?今はもうわからなくなってきた。」

「そうなの？」

「ああ、この世界でお前に会って、カトレアを治して婚約しちまったからな・・・カトレアの事を裏切れねーよ。」

「そうなんだ・・・」

「・・・」

そうして俺達はしばらく無言で踊る。

「あの・・・ありがとう。」

そうしてルイズが俺に言う。

「なにが？」

「ゴ、ゴーレムに潰されそうになった時に助けてくれたじゃない。そのお礼よ／＼」

ルイズは早口で言う。

「なんだ、その事か。そんなの当たり前だろ？」

「どうして？」

「俺はお前の使い魔だからな。」



もう決めちまっただ。俺は今から、お前の剣になるって・・・」

そう言うと、ルイズは嬉しそうに俺を見つめていた。

『こりやおでれーた。主人のダンスの相手を勤める使い魔なんて、初めて見たぜ。こりやおでれーた。』

そう言ってデルフリンガーは、月明かりの下で自分の使い手とそのご主人様のダンスを見ていた。

そして、祝賀会が終わり、俺はタバサの部屋を訪ねていた。

コンコンッ

俺はタバサの部屋をノックする。

「タバサ？俺だ。マモルだ。いるか？」

そう言つと部屋の中から声が聞こえた。

「入って。」

そう言われて部屋に入ると、パジャマ姿で杖を構えるタバサがいた。

（なんつか、シユールな格好してんな、こいつ・・・）

俺はいきなりのタバサの姿に、一瞬思考が停止する。

「話してもらつ。何故私の名を？」

タバサは敵対心丸出しで俺に尋ねる。

「ふむ・・・」

パチンッ

俺はタバサの言葉をいったん無視し、指を鳴らして結界を張る。

「！これは？」

タバサは突然張られた結界に驚く。

「落ち着け、これはこっちで言うつと、  
『ディテクトマジック探索魔法』と『サイレント消音魔法』  
を掛け合わせたものだ。」

「なぜ？そのような事を？」

「どこに間者がいるかわからないからな。ちなみにこの結界は外か

らじや絶対に中の様子はわからないし、俺らの声も結界の外には漏れない。

その方が何かと便利だろ？なあ、ガリアのお姫様？」

「！！何が目的？」

そう言つて、タバサは再び杖を構える。

「ガリアと協力体制を結びたい。そのために君に協力してほしい。」

「でも、私には王位継承権はない。私に協力を仰いでも無意味。」

「知ってる。だから君にはガリア王との橋渡しをしてもらいたい。ちなみに報酬は、君が今最も望むものだ。」

「！母様の事まで知っているの？」

タバサは驚いたように言う。

「ああ、知ってるよ？誰が君の母親の心を狂わしたのか？そしてその心を狂わした原因も、その解除方法もね？」

「話してもらう！力尽くでも！」

そう言つとタバサは杖に力をこめる。

俺はタバサの杖を『↑フポイント座標移動』で取り上げる。

「少し落ち着けて・・・君が俺に協力してくれたら万事解決するんだから。」

それで、どうする？俺に協力するか？」

俺はニヤツと笑ってタバサに話しかけた。

「わかった。協力する。けどそのかわり・・・」

「ああわかってる。きっちり君のお母さんを助けるよ。だけど、助けるには条件が2つある。」

「なに？」

「なに、難しい事じゃない。」

一つは、君のお母さんを治しても、現ガリア国王であるジョゼフに対し復讐をしない事。

二つ目は、君の上司でもありジョゼフの娘でもあるイザベラとの和解だ。」

「それは出来ない。」

タバサは短く言う。やはり恨みは深いか・・・

「まあそう言うなって。理由は今はいえないけど、ジョゼフもイザベラもどちらかと言うと被害者なんだよ。」

「どういうこと？」

俺の言葉に、タバサは不思議そうにする。

「今はまだ言えない。だけど、近いうちに絶対に言うから待っててくれねーか？最後は全員、ハッピーエンドにしてやるからよ。」

（俺の計画の為にな・・・）

「わかった。あなたを信じる。でも、裏切ったら・・・」

タバサは強い意思を持って俺の眼を見る。

「ああ、そんときゃ俺を殺せ。正々堂々正面から、お前の攻撃を受けて死んでやるよ。」

「わかった。最後に一つだけ・・・」

「なんだ？」

「どうして、あなたは私を助けてくれるの？」

タバサは不思議な顔をして俺に尋ねた。

「『イーヴァルデイの勇者』・・・」

「え？」

「囚われのお姫様を助けるのって男の夢だろ？」

そう言うって俺は結界を解いて、タバサの部屋を出る。

「じゃあなタバサ。近いうちに連絡を入れる。おやすみ。」

そうって俺はタバサの部屋を後にした。

（よっしゃ！タバサゲット！原作崩壊の始まりだぜ！）

そう思っていた俺を見ていたのは、淡く夜空に輝く二つの満月だけだった。

## 修行開始！ギーシュ最凶化計画

フーケとの一件後、俺は今後の対応を決めかねていた。

（うーん・・・取り合えずフーケも仲間にしたし、これで農業関係、特に土木系の仕事がやりやすくなった。あいつは土のメイジだし、会社でも建てればすぐに稼げるようになるだろう。

で、問題なのはタバサだよな。

ガリアはかなりの技術先進国だし、早いうちにジョゼフの件に手を打って、俺と組んでもらわないと・・・

だけどこの後は確かアルビオンに行くんだよな？どう考えても、タバサと一緒にガリアになんか行けねーぞ？）

「っち！打つ手なしか・・・」

そう言って舌打ちをすると、部屋にノックをされた。

コンコン

「はあい！どちら様ですか？」

（まったく、誰だよこんな朝早くから・・・）

そう思いつつも、部屋の扉を開けると、そこにいたのはかつて決闘でボコボコにしたギーシュだった。

「や、やあ使い魔君。」

ギーシュはぎこちない笑顔で俺に挨拶した。

「何か用ですか？ルイズはまだ眠っていますが・・・」

ルイズに視線をやると、すうすうと規則正しい寝息を立てて眠っていた。

「いや、用があるのは君なんだ。」

ギーシュは何か決意したように俺に言う。

「はあ？なに？リターンマッチですか？それなら相手になりますけど、先にルイズを起こさせてください。」

俺は面倒だったので、適当に言っただけで事を終わらせようとした。

「ち、違う違う！僕を弟子にしてほしいんだ！！」

「弟子……？！……！」

俺はギーシュの発言に驚き、声を大きくすると、その声でルイズが起きてしまった。

「ふあゝ、うるさいわよまもる・・・」

まだ寝ぼけているのか、ルイズの声に覇気がない。

「ああ悪いルイズ。起こしたか？」

俺はルイズを起こしてしまったことに謝罪する。



「いいわよ別に。それで、何騒いでたの？」

ルイズは目をこすりながら聞いてくる。

「いや、それがさ、ギーシュが俺に弟子入りしたいんだって。」

「弟子入り？何であんたなんか？」

「さあ？知らない。これから聞いてみる所。で、いったいどういう事だ？」

俺は素でギーシュに聞いた。

「あの日の決闘の後に彼女たちに謝ったのさ。そしたらモンモランシーに言われたよ、『もっと強くなって私を守って』ってね。」

そして僕は気づいたんだ。誰が自分のことを愛してくれるのかをね・・

だから僕は強くなりたい。せめて自分の恋人は守れるくらいに。」

ギーシュの目は真剣だった。俺はその真摯な態度が気に入った。

「いいだろう。ならばあんたをトリステインで最強の土メイジにしてやるよ。」

俺は口許を吊り上げてそういった。

「おお！ありがとう！僕のことはギーシュと呼んでくれ。我が友よ！」

そう言ってギーシュは嬉しそうに俺に抱きついた。

「はぁ〜・・・男って単純ね・・・」

そのやり取りを見ていたルイズは、一人ベッドの上で愚痴を言っていた。

コンコン

抱きついて来たギーシュを振りほどき、難なくその場から脱出出来た俺は次の来客の対応に追われていた。

「つたく、次から次へと・・・はぁい！今開けます。」

そう言ってドアを開けたら、そこにはタバサが立っていた。

「タバサ？どうしたんだ？」

「あなたに用がある。」

俺の問いにタバサは短く答える。

「あゝ、もしかしてこの間の件のことか？」

俺がそう聞くと、タバサは小さく頷く。どうやら当たりの様だ。

「そっか。じゃあ外に出よう。」

俺はそう言っ外に出ようとしたが、タバサはそれを止めて首を横

に振る。

「……でいい。」

「ここで？でもここじゃあ……」

俺はタバサの行動に驚いた。

「別にあの話をするわけじゃない。あなたに稽古をつけてもらいに来た。」

「……はあ？」

タバサの発言に俺とルイズの言葉が被る。

「ミス・タバサ。君も強くなりたいのかい？」

ギーシュが気軽に聞く。するとタバサは頷いた。

「そうかい。僕たちは同志だ。一緒に頑張ろうじゃないか。」

そう言つてギーシュは嬉しそうに笑う。

「はあ……わかったよ。じゃあ今日の放課後な。授業が終わつたらここに来い。ルイズもそれでいいか？お前も稽古つけてやるよ。」

「え！何で私まで？」

俺の言葉に、突然言われたルイズは驚く。

「この前、フーケとやり合う前に少し話しただろ？お前のためなんだ。やっておいて損はないぞ？」

「わ、わかった。」

俺の説得に渋々ながらもルイズは了承する。

「じゃあお前たちは授業に行け。俺はちょっと準備があるから。」

そう言っただけ俺はルイズの部屋を出る。

「という訳で、お前にも修行してもらってから、ルイズたちの授業が終わるころにこの魔法陣の上に立っていてくれ。」

「なにが『という訳』なのさ？ちゃんと事情を説明しとくれよ。」

俺の言葉にマチルダは、訳がわからないという風な顔をする。

「えつとだな、前にギーシュと決闘した後に、なぜかギーシュに懷かれて弟子にしてくれて頼まれた。それで、この前お前とやりあった時にタバサにも同様に弟子にしてくれて頼まれた。」

ついでに、この前の馬車の中で話したことをルイズに覚えてもらう

ために、ルイズも稽古をつけようと考えたわけだが、それならマチルダも一緒にいいかと思い、今君に相談を持ちかけている。」

俺は一気にそう説明した。

「え、えらく簡略した説明だね・・・まあ事情は理解したけど、あの子達と一緒にいてもいいのかい？」

マチルダは不安そうに言う。

「まあ何とかなるでしょ？納得してくれなかったら、お前の事と孤児院のことを話すことになるけど、それでもいいか？」

「あんまり同情は買いたくないけど、マモルがそういうなら私はかまわないよ。」

「そっか。ありがとう。」

俺はマチルダに許可をもらい、一緒に修行することにした。

「あ、そうそう。別荘に着いたら今後のことも少し話すから。」

「わかったよ。あんたの計画ってやつが、ついに動き出すんだろ？」

「まあね。じゃあまた後で。授業が終わったらこれで連絡する。」

そう言っただ俺は、『念話石』をマチルダに渡す。

「これは？」

「俺が作った『念話石』って言うマジックアイテム。効果は、離れた相手と話ができる石だ。」

「へえ・・・あんたって本当にすごいね。」

マチルダは念話石をまじまじと見ながら感想を言う。

「まあな。じゃあまた後でな。」

俺はそう言ってマチルダのいる宿を後にした。

そして放課後。俺の前にはルイズを含め、4人の人物がいた。

「で？何でツエルプストーまでいるのよ！」

ルイズが吼えた。

「知らんがな。何でここにいるんだ？キュルケ？」

俺がキュルケに尋ねると、妖艶な笑みを浮かべ俺に言う。

「だって面白そうだったから。」

「面白そうだからって、お前な・・・」

肩を落とす俺。そんな俺をキュルケはただニコニコと見つめている

だけだった。

「お前のことだ。どうせだめって言うても付いてくる気なんだろう？」

「もちろん。」

（こいつ、満面の笑みで言いやがった・・・）

「はあ・・・わかったよ。そんなわり、絶対に逃げ出すなよ？」

「わかってるわよ。」

笑顔で返してくるキュルケに対し、俺は深くため息をつく。

「さて、一人余計なのが入ったけど、この際はどうでもいい。修行に入る前にお前たちにいくつか契約して欲しい事がある。」

「・・・契約？」「・・・」

みんなが声をそろえて聞く。

「なに。別に難しいことじゃない。詳しくは契約書を見てくれ。」

そう言って俺は、ギアスペーパー強制契約書で書いてある契約書をみんなに渡す。

内容は、俺の能力の秘匿、修行先の出来事の黙秘、あとは個人的にいくつかの契約が書いてある。

そしてみんなが契約書にサインしたのを確認してから、俺は『別荘』を取り出した。

「それは？」

ギーシュが聞いてきたので答える。

「これから行く修行先だ。これは俺が開発したマジックアイテムで、この中に入ると外での1時間はこの中では24時間になる。」

「つまりどういうことよ？」

ルイズはいまだ理解できないのか、首をかしげて聞いてくる。

「つまり、こいつを使うと一日中修行ができるということだ。しかも、中と外じゃ時間の流れが違うから、この中で一日過ごしたとしても、この世界じゃたった一時間しか時間が経過していない。それを寝るときに合わせて行うから、大体一人当たり一日に6〜8日分の修行を行ってもらおう。」

「なるほど。でもさすがはダーリンね。こんなマジックアイテム見たことないわ！これ確実にアカデミーものじゃない！」

キュルケは『別荘』をひたすら褒めた。

「まあな。でも、わかってると思うがこれは絶対に内緒だぞ？まあ言おうとしてもさっきの契約書の効果で言うに言えないと思うけど・  
・・」

「そうなの？」

「ああ。それより早速修行を開始するぞ。みんな魔法陣の上に立つ



て。」

そう言ってみみんなを魔法陣の上に立たせて、俺たちは別荘の中に入った。

青い空、そして透き通るくらいな綺麗なコバルトブルーの海、そして極めつけは、南国のこの舞台に違和感丸出しの西洋風の大きな城『シューベルト城』。

俺たちは今、南国のリゾート、『別荘』の中にいる。

「な、な、なによこれ！！！」

あまりの凄さにルイズが驚き、声を上げる。

「すっごい……これ全部ダーリンの所有物？」

「はぁ……見事だね……」

「凄い……」

そして、キュルケ、ギーシュ、タバサは驚きを通り越しこの光景に呆けていた。

「さ、呆けてないで行くよ。こっちだから付いてきて。」

そう言って俺たちは城を目指す。

「やっと来たのかい？ずいぶん遅かったじゃないか？」

「悪かったって。もしかして結構待ったか？」

城に着いた俺たちを待っていたのは、『土くれのフーケ』ことマチルダだった。

「ちよつと！何でフーケがいるのよ！あんたが殺したんじゃないかったの？」

生きているフーケを見てルイズが俺に突っかかる。そして、キュルケとタバサも警戒していた。

「あゝ、あれ嘘。」

「「うそ〜！？」」

俺の言葉を聞き、キュルケとルイズが被る。

「そ、まあこいつにもいろいろ事情があったんだ。一応許可を取っているから、盗賊をやった理由を話してもいいけど、あまり人の過去を詮索するのは感心しないな。」

俺はそう牽制すると、みんなは黙り込む。

「まあそんな顔すんなって。時がきたらちゃんとその理由も教えるから。」

俺が軽い調子で言うと、ルイズが何か決意した目で俺を見てくる。

「絶対？絶対にちゃんと後で教えてくれる？」

「あ、ああ。約束する。」

ルイズの強い目に押された俺は、少し戸惑いながら答えた。

「そう、わかったわ。なら待ってる。みんなもそれでいいわね？」

そしてルイズはみんなに振り向いて聞く。しかし、その顔は『反論は認めない』とでも言いたそうな顔をしていた。

そして、キュルケたちはそんなルイズの迫力に負け、何度も首を縦に振った。

「じゃ、そういう事だから今から修行を開始します。個人別にやるからそこんとこよろしく。」

「個人別って、どうやって教えるの？」

「こうやって。」

俺は影分身で4人の分身を作る。

「それって偏在？」

キユルケが驚いたように言う。

「まあ似た様なもんだ。じゃあみんな一人ずつ個人レッスンで鍛えるからよろしくね。」

そう言うて俺たちは修行を開始した。

### ギーシュの場合

「さてギーシュ。これからお前に修行を付けるんだが、正直言ってお前が一番伸びると思うからがんばってくれ。」

「本当かい？」

ギーシュは俺の言葉を聞き喜ぶ。

「本当だ。まあ実際に伸びるのはお前の努力しだいなんだけどな。」

「わかった。どんな過酷な試練にも打ち勝って見せるよ。」

「上等だ・・・じゃ、さっそくだけど、ゴーレムを作って。自分の今出せる全力の数で。」

「わかった。『錬金』」

そう言うてギーシュは、青銅のゴーレムを7体作った。

「よし、ならそのゴーレムに武器を持たせて俺に攻撃して来い。あ、もちろん刃引きはしておいてくれ。」

「え？いいのかい？さすがに危ないかな？」

俺の提案にギーシュは戸惑った。

「大丈夫だって。俺を殺す気で来い。」

「わ、わかった。」

そう言つてギーシュはゴーレムに命令を下す。

そして突つ込んでくるギーシュのゴーレムの攻撃を、俺は次々にかわしていった。

そして10分後・・・

「さて、もうこのくらいでいいか。ギーシュ、お前の今後の課題が決まったぞ。」

「く・・・なんで当たらないんだ。」

ギーシュは一撃も攻撃が当てられなかったことを悔やんでいた。

「まあそう悔しがるなって、これから強くなればいいんだから。それでだなギーシュ、お前の今後の課題は武器の扱いだ。」

正直さっきのゴーレムの動きは素人だ。たぶんお前は武器の扱い方

を知らないんだろう。それを今からお前に叩き込む。」

「え？僕はそれでも軍人の家系だぞ？剣くらいは扱える。」

「まあ剣の動きは多少マシだったが、それでもあんな動きははつきり言って教科書の動きだ。まだ隙だらけだし、剣筋が真っ直ぐ過ぎて少し腕のあるやつから見たら、どこに攻撃が来るか丸わかりだ。」

「そうだったのかい・・・」

俺の言葉を聞き、ギーシュはショックを受けた。少なからず自信があつたのだろう。

「まあこればかりは一朝一夕で上達するわけじゃないから、継続して鍛えるしかないな。  
後は座学か・・・取り合えず、ギーシュには『原子の理論』を覚えてもらおう。」

俺はそう言つて原子の理論をギーシュに教えていった。

「す、凄いじゃないか！これを公表したらアカデミーも驚くぞ！」

理論を話し終えたら、ギーシュは目を輝かせていた。

（やっぱりこの世界には、原子の理論は成立していなかったか。）

「じゃあ早速実践。これを・・・鋼に練成してみて。あ、これ見本ね。先に解析してからやったほうがうまくいくかも。」

そう言つて俺は、『錬成術』で作りだした砂鉄と木炭をギーシュに渡し、見本の鋼をギーシュに見せる。

「さっきやったのは『錬金』かい？」

「まあ似たようなもんかな？俺の事はいいからさっさとやりな。」

「わ、わかったよ。『錬金』」

そう言つてギーシュは錬金の魔法をする。すると、俺の見本とは少し劣るが、ちゃんとした鋼ができていた。

「ふむ。まあ合格点かな？じゃあ今度は材料なしアレで鋼を作ってみて。」

そう言つて指差したのは、少し大きめの鉄鉱石だった。

「わかった。」

そう言つてギーシュは、俺が指示した鉄鉱石を鋼に変えた。

「よし。成功だな。鋼は鉄と炭素の合金だから、さっきの岩に含まれていた鉄鉱石に炭素を加えて鋼を作ったな。よしよし、ちゃんと教わったことができてるから大丈夫だ。よかったなギーシュ。これで土×土×火のトライアングルメイジだ。」

「何でこんなにうまくいったんだろう？なんか釈然としない・・・」

「

俺の説明に納得していない様子のギーシュ。

「まあ基礎はしっかりしてたんだ。後は理論をしっかりと正しく学べば、こんなもんだよ。」

そう言っただけはギーシュの肩をたたき、修行を再開した。



## トリスティンの姫君

修行開始から54日目。外の世界で1週間が経過した。

最初はみんなには基本方針を説明して、それぞれの特徴にあった個人レッスンをしてもらった。

ギーシュの場合は、武器の扱いとゴーレムの制御、そして錬金の上達。ゴーレムの制御の方はマチルダにも見てもらったので、ギーシュのゴーレムにも再生能力が付いた。

タバサの場合は、すでにトライアングルクラスの実力者だったので、俺と一緒に考えた魔法の応用と、身体能力の強化をした。

キュルケの場合は、トライアングルクラスだったのだが、魔法の制御が甘かったので、精密操作と魔法の制御を徹底した。

ルイズの場合は、前に話した通り、キュルケと同様に魔法の制御と精密操作、そして指定された場所を爆発させる空間把握能力の強化をした。

そしてマチルダは、ギーシュと同様に原子の理論を教えて、徹底的に錬金を鍛えていった。

さらに、みんなには体術を覚えてもらい、身体強化の魔法も習得してもらった。

「じゃあ今日は、みんなに『瞬動術』を覚えてもらう。」

すっかり俺の講義に慣れたのか、みんなの目は真剣だった。

「取り合えず説明な。今から教える『瞬動術』は、俺の世界の体術の歩法だ。これは、気・・・みんなの場合は魔力を足の裏に溜めて、一気に爆発させて移動する技だ。」

そう言っただ俺は実践してみせる。

フォンツ

俺は瞬動術で移動して見せた。そしたらみんな驚いていた。

「い、今のは瞬間移動なのか？」

ギーシュが驚いたように言う。

「違っって、さっきも言った通り歩法だよ。これのコツはメリハリをつけること。そうすればさっきみたいに一瞬で消えたように見えるから。」

そう言っただ俺はみんなに実践してみせるように言う。

しかし、最初からうまくいくやつはいない。みんな失敗ばかりだった。

「体術は失敗と練習の繰り返しだ。頑張った分だけ自分に返ってくるから、みんな頑張れよ。」

そう言っただ一人一人の瞬動術を見て、悪いところを直していった。

そして数日がたち、ミスター・ギターの授業から、今回の事件は始まった。

「では授業を始める。知つてのとおり、私の二つ名は『疾風』。疾風のギターだ。」

威張り散らしたギターを見て、みんな静まった。そんな態度に満足したのか、ギターはキュルケに質問をする。

「最強の系統は知っているかね？ ミス・ツエルプストー」

「『虚無』じゃないんですか？」

「伝説の話をしているわけではない。現実的な答えを聞いてるんだ」  
いちいち引つかかる言い方をするギターに、キュルケはちよつとかちんときた。

「『火』に決まってますわ。ミスタ・ギター」

キュルケは不敵な笑みを浮かべて言い放った。

「ほほう。どうしてそう思うね？」

「すべてを燃やしつくせるのは、炎と情熱。そうじゃございませんこと？」

「残念ながらそうではない」

ギトーは腰に差した杖を引き抜くと、言い放った。

「試しに、この私にきみの得意な『火』の魔法をぶつけてきたまえ」  
キュルケはぎょっとした。そして、一緒に修行をしていた俺たちも驚いた。

（（（いきなり、この先生はなにを言うのだろう・・・）））

この瞬間、俺たちの心は一致した。

「どうしたね？ きみは確か、『火』系統が得意なのではなかったかな？」

挑発するような、ギトーの言葉だった。

「火傷じゃすみませんわよ？」

キュルケは、目を細めて言った。

「かまわん。本気できたまえ。その、有名なツエルプストー家の赤毛が飾りではないのならね」

キュルケの顔からいつもの小ばかにしたような笑みが消えた。

胸の谷間から杖を抜くと、炎のような赤毛が、ぶわっと熱したようにざわめき、逆立った。

杖を振った。

目の前に差し出した右手の上に、小さな炎の玉が現れる。キュルケがなおも呪文を詠唱すると、その玉は次第に膨れ上がり、直径一メートルほどの大きさにもなった。

生徒たちが慌てて机の下に隠れる。

そして俺はキュルケにストップをかけた。

「ちょっと待て！お前さすがにそれじゃギトーが死んでしまうぞ？もう少し加減しろ！」

俺がそういうと、キュルケは残念そうに顔を歪めて、炎の玉の威力を落とした。

「ちえ、これならいいでしょ？でもこれじゃあギトーの魔法で跳ね返されるわよ？」

「いいんだよ。そんなとき俺が守ってやるから。」

俺がそういうと納得したのかキュルケは手首を回転させたあと、右手を胸元にひきつけ、威力を落とした炎の玉を押し出した。

唸りをあげて自分めがけて飛んでくる炎の玉を避ける仕草も見せず、ギトーは腰に差した杖を引き抜いた。そのまま剣を振るようにして薙ぎ払う。

教室に烈風が舞い上がる。

一瞬にして炎の玉は掻き消え、その向こうにいたキュルケを吹っ飛ばそうとした。

しかし、俺は『アクセラレータ一方通行』の能力で、キュルケに向かってきた風を別方向に反射した。

その事にも気が付かずに悠然として、ギトーは言い放った。

「諸君、『風』が最強たる所以を教えよう。簡単だ。『風』はすべてを薙ぎ払う。『火』も、『水』も、『土』も、『風』の前では立つことすらできない。残念ながら試したことはないが、『虚無』さえ吹き飛ばすだろう。それが『風』だ」

キュルケは手加減された事にも気が付かないギトーを冷たい目で見たが、気にした風もなく、ギトーは続ける。

「目に見えぬ『風』は、見えずとも諸君らを守る盾となり、必要とあらば敵を吹き飛ばす矛となるだろう。そしてもう一つ、『風』が最強たる所以は……」

ギトーは杖を立てた。

「ユビキタス・デル・ウィンデ……」

低く、呪文を詠唱する。しかしそのとき……、教室の扉がガラツと開き、緊張した顔のミスタ・コルベールが現れた。

彼は珍妙ななりをしていた。頭に馬鹿でかい、ロールした金髪のカツラをのっけている。よく見ると、ローブの胸にはレースの飾りや

ら、刺繍やらが耀っている。何をそんなにめかしているのだろう？

「ミスタ？」

ギトーがコルベールの格好に眉を顰めて訪ねる。

「あややや、ミスタ・ギトー！ 失礼しますぞ！」

「授業中です」

コルベールを睨んで、ギトーが短く言った。

「おっほん。今日の授業はすべて中止であります！」

しかしギトーの言葉を無視しコルベールは重々しい調子で告げた。

その言葉を聞き教室中から歓声があがる。その歓声を抑えるように両手を振りながら、ミスタ・コルベールは言葉を続けた。

「えー、皆さんにお知らせですぞ」

もったいぶった調子で、コルベールはのけぞった、のけぞった拍子に、頭にのつけた馬鹿でかいカツラがとれて、床に落っこちた。

( ( ( ( ( . . . . . ) ) ) ) )

教室中がくすくす笑いに包まれる。

一番前に座ったタバサが、コルベールのつるつるに禿げ上がった頭を指差して、ぽつんと呟いた。

「滑りやすい」

教室が爆笑に包まれた。キュルケが笑いながらタバサの肩をぽんぽんと叩いて言った。

「あなた、たまに口を開くと、言うわね」

コルベールは顔を真っ赤にさせると、大きな声で怒鳴った。

「黙りなさい！ ええい！ 黙りなさいこわっぱどもが！ 大口を開けて下品に笑うとはまったく貴族にあるまじき行い！ 貴族はおかしいときは下を向いてこっさり笑うものですぞ！ これでは王室に教育の成果が疑われる！」

とりあえずその剣幕に、教室中がおとなしくなった。

「えーおほん。皆さん、本日はトリステイン魔法学院にとって、よき日であります。始祖ブリミルの降臨祭に並ぶ、めでたい日であります」

コルベールは横を向くと、後ろ手に手を組んだ。

「恐れ多くも、先の陛下の忘れ形見、我がトリステインがハルケギニアに誇る可憐な一輪の花、アンリエッタ姫殿下が、本日ゲルマニアご訪問からのお帰りに、この魔法学院に行幸なされます」

コルベールの発言に教室がざわめいた。

「したがって、粗相があつてはいけません。急なことですが、今か



ら全力を挙げて、歓迎式典の準備を行います。そのために本日の授業は中止。生徒諸君は正装し、門に整列すること」

生徒たちは、緊張した面持ちになると一斉に頷いた。ミスタ・コルベールはうんうんと重々しげに頷くと、目を見張って怒鳴った。

「諸君が立派な貴族に成長したことを、姫殿下にお見せする絶好の機会ですぞ！ 御覚えがよくなるように、しっかりと杖を磨いておきなさい！ よろしいですかな！」

（はぁ・・・やっぱ原作どおりか。一応原作は読んだけど、記憶に自身がないんだよね・・・）

俺は、これから始まる事件に不安を隠せないでいた。

そしてしばらく経ってから、学院の正門に王家の紋章が付いた馬車が到着した。

魔法学院の正門をくぐって、王女の一行が現れると、整列した生徒たちは一斉に杖を掲げた。しゃん！ と小気味よく杖の音が重なった。

正門をくぐった先に、本塔の玄関があった。そこに立ち、王女の一行を迎えるのは、学院長のオスマン氏だった。

「トリスティン王国王女、アンリエッタ姫殿下のおな　り

ッ！  
」

しかし、がちやりと扉が開いて現れたのは枢機卿のマザリーニであった。

生徒たちは一斉に鼻を鳴らした。しかし、マザリーニは意に介した風もなく、馬車の横に立つと、続いて降りてくる王女の手を取った。その瞬間生徒の間から歓声があがる。

王女はにつこりと薔薇のような微笑を浮かべると、優雅に手を振った。

（アレが馬鹿王女か・・・）

「あれがトリスティンの王女？ ふん、あたしの方が美人じゃないの」

キュルケがつまらなそうに呟く。

「ねえ、ダーリンはどっちが綺麗だと思う？」

「さあね？人それぞれじゃない？俺はどっちも綺麗だと思うよ。」

俺は当たり障りのないことを言って、その場を逃げる。

ルイズの様子を見てみたら、ワルドに熱っぽい視線を送っていた。

（ワルドか・・・あいつどうすっかな・・・）

俺はワルドの対応を決めかねていた。そして、本を読んでいたタバサに近づく。

「タバサ。悪いんだけど、近いうちに手伝ってもらうと思うけどいいか？」

俺がそう聞くとタバサは頷く。

「おし。ありがとなタバサ。」

俺はお礼を言ってその場を離れる。

そしてその夜。俺はルイズの部屋で、これから来る客を静かに待っていた。

コンコン

そして待ち人は来る。

ノックは規則正しく叩かれた。初めに長く二回、それから短く三回……。

ルイズの顔がはっとした顔になった。急いで立ち上がり、ドアを開いた。

そこに立っていたのは、真っ黒な頭巾をすっぽりとかぶった、少女だった。

辺りをうかがうように首を回すと、そそくさと部屋に入ってきて、後ろ手に扉を閉めた。

「・・・あなたは？」

ルイズは驚いたような声をあげた。

頭巾をかぶった少女は、し　　と言わんばかりに口元に指を立てた。

それから、頭巾と同じ漆黒のマントの隙間から、魔法の杖を取り出すと軽く振った。同時に短くルーンを呟く。光の粉が、部屋に舞う。

ディテクトマジック  
「探知魔法？」

ルイズが尋ねた。頭巾の少女が頷く。

「どこに耳が、目が光っているかわかりませんかね」

部屋のどこにも、聞き耳を立てる魔法の耳や、どこかに通じる覗き穴がないことを確かめると、少女は頭巾を取った。

現れたのは、やはりアンリエッタ王女であった。

「姫殿下！」

ルイズが慌てて膝をつく。

アンリエッタは涼しげな、心地よい声で言った。

「お久しぶりね。ルイズ・フランソワーズ」

ルイズの部屋に現れたアンリエッタ王女は、感極まった表情を浮かべて、膝をついたルイズを抱きしめた。

そしてその後、原作どおりに昔話に花を咲かせる二人。

そして、ひと段落着いたのかアンリエッタ王女は悲しそうな顔を作ってつぶやく。

「わたくし結婚するのです。ゲルマニアの皇帝に嫁ぐことになったのです・・・」

「ゲルマニアですって!」

ゲルマニアが嫌いなルイズは、驚いた声をあげた。

「あんな野蛮な成り上がりどもの国に!」

「その野蛮な国を今までのさばらせておいて、自分たちは伝統だの何だのって言って汚職し放題だったんだ。完全な自業自得だろ?」

俺は呆れたように言う。

「ちょっと、少しは言葉を選びなさいよ!」

ルイズは俺に注意した。

「だが、事実だ。そして今、アルビオンは内乱の真っ只中。王国軍は敗北確定って噂だし、アルビオンの貴族派が勝ったら確実にこのトリステインに攻めてくるだろう。」

そうなる前に、国力が高いゲルマニアについて政略結婚してしまい、同盟を組んで戦争に備えようってとこだろ？王女様？」

俺がそういうと、ルイズは蒼白になり、アンリエッタ王女は悔しそうに唇をかんでいた。

「本当なのですか？姫様・・・」

「ええ。悔しいけど、その人の言う通りよ。ところで貴方は何者なのですか？アルビオンの事まで知っているなんて・・・」

アンリエッタは少し警戒したように言う。

「情報は基本でしょ？ちなみに俺はルイズの使い魔です。」

「使い魔さん？人にしか見えませんか？」

「そりや人間なのですからそう見えるのは当然でしょ？」

俺の言葉に王女様は驚き、ルイズの方を見る。

「はー、ルイズ・フランスワーズ、あなたって昔からどこか変わっていたけれど、相変わらずね」

「好きであれを使い魔にしたわけじゃありません」

ルイズは恥ずかしそうにそっぽを向く。

「さて、いい加減本題に入ろうか。姫さんよ、どうして護衛を付けずにこんな場所まで来たんだ？正直に答えてもらおうか。」

俺は威圧感を放ちアンリエッタを見据える。

「貴方は王女であるわたくしに、そのような態度を取るのですか？」

アンリエッタは負けじと俺を睨み返す。

「ハッ！下手すりゃこっちの首が飛ぶんだ。それに、いまだ自分の行動に責任を取れない奴に払う敬意なんてねーよ。」

喧嘩腰の俺にルイズは嗜めるように言う。

「マモル！いい加減にして。姫様の言うことを聞きなさい。」

「あのなあルイズ。お前まだこの状況を理解してないのか？王女様が護衛も付けずに俺たちの部屋まで来てるんだ。事情はどうあれ、護衛兵にでも見つかったら。最悪その場で殺されても文句は言えねーぞ？今頃必死になって探してるかもしれない。下手したら誘拐騒ぎになりうるんだ。そうだったらこの姫さん自身の問題にも発展しかねん。」

これは俺たちと、姫さんと、国のために言ってるんだぞ？」

そこまで言っていると、ルイズとアンリエッタがはっとした顔をした。

「も、申し訳ありません使い魔さん。わたくしは自分の事ばかり考えていたようです。」

アンリエッタは慌てて俺たちに謝罪する。

「まあいいですけどね？さっさと用件言ってください。どうせ今回

の婚約絡みでしょうけど・・・」

「なぜわかったのですか？」

アンリエッタは不思議そうな顔をする。

「最初の芝居がかった再会に、突然の婚約の報告。誰でもわかるだろう？」

「本当なのですか？そのような物があるというのですか姫様？」

ルイズが不安そうにアンリエッタに問い詰める。

「ええ。実はアルビオンに・・・」

「ああ！ちょっと待った。」

俺はアンリエッタの話をさえぎり、扉を思いっきり開ける。

ドシンッ

そこに倒れていたのはギーシュだった。

「ギーシュ！あなたなんでここに？」

「まっ。どこに目や耳があるかわからないからな。ちなみに、気配がしたのは少し前からだ。」

「教えなさいよ！」



「だからこうやって部屋に入れただろ？さて姫さん、話を折つてすまなかった。こいつはギーシュ。グラモン元帥の息子で、腕は確かだ。」

俺がギーシュを紹介すると、アンリエッタは目を輝かせた。

「まあ、あなたがあのグラモン元帥の？」

「はい。息子にございます。アンリエッタ王女。なにやらお困りの様子で、わたくしも姫殿下のための力になりましょう。」

そう言つてギーシュは恭しく礼をする。

「つたく、どうなつても知らねーぞ？さて姫さん、話の続きだ。」

「そうでしたね。貴方達にお願いしたいのは、わたくしが以前したためた手紙の事なのです。」

「ほう。つまりアルビオンまで言つてその手紙を回収して来いつてか？」

「その通りです。使い魔さん。」

（こいつ、マジで自分の発言に気がついてないのか？）

「わかりました姫様！この私、ド・ラ・ヴァリエール家三女のルイズ・フランソワーズにお任せください！」

「私も全力で協力いたします。このギーシュ・ド・グラモンにお任せください！」

「やってくれるというの？」

「もちろんでございます。」

そう言つて二人はアンリエッタに深く頭を下げる。

「俺は反対だ。第一、お前ら今から行く所を理解しているのか？」

そついうと、ルイズとギーシュは反論した。

「なにを言つんだマモル。ただアルビオンに言つて手紙を取りに行くだけだろ？」

「そうよ。姫様のためになるの。どこに反対する要素があるのよ！」

（はぁ・・・こいつらは・・・）

俺は二人の反論を聞き、心の中で深く、深くため息をついた。

「アホ共が！今から行くのはただのアルビオンじゃねー！内乱中の戦場に手紙を取りに行くんだ！大体お前らは戦場を経験したことがないからそんな風に簡単にいえるんだよ。今から行くところを簡単に体験させてやるから、お前らそこに並べ。姫さんもだ。あんたは俺らを死地に追いやるんだ。これから俺らの行くところを少しでも体験しておいたほうがお前のためになる。」

そう言つて俺は三人を並ばす。

「死地？いったいどういうことだい？」

ギーシュはまだわかっていないのか、軽い感じで聞いてくる。

「すぐにわかるさ。とりあえず、最後まで立ってたら合格だ。」

俺はそう言って三人に強烈な殺気を当てた。

ドサドサドサッ

突然の殺気に三人は案の定倒れた、そして俺は不甲斐ない三人の様子に呆れる。

「はぁ・・・やっぱこうなったか。」

そして俺はルイズとアンリエッタをベットに運んだ。

しばらく経ってみんなが目覚まし、俺は事情を説明していく。

「どうだ？これが戦場の殺気って奴だ。今から行く所はずっとさっきの感覚が付きまとう。お前たちはそれに堪えられるのか？」

「そ、それは・・・」

ギーシュは俺の質問に目を伏せる。

「それでも私は行くわ！たぶん耐えられないと思う。けど、せつかく姫様が私を頼ってくれたんだもの。落ちこぼれの私を頼ってくれて嬉しかった。私は姫様の期待に応えたい！」

ルイズは確かな意思を持った目で俺を睨みつける。

「・・・いいだろう。ギーシュ、お前はどつする？ここで降りるか？」

俺がそう聞くと、ギーシュは足を震わせながら言った。

「い、行くよ。僕も行く。正直怖いけど僕だって男だ。ちゃんと自分の発言には責任を持つ。」

そしてギーシュは言い切った。

「上等だ。さて姫さん。こつちの覚悟は決まった。後はあんたの覚悟だぜ？親友を死地に追いやる勇氣があるなら、俺たちに手紙を取って来いって命令しな。」

「そ、そんな・・・出来ません。出来ない！ルイズをこんな危険な場所に送るなんて！」

アンリエッタは辛そうに言った。

「甘えてんじゃねーぞ！アンリエッタ！お前は何だ！！」

「わ、わたしは・・・」

俺の気迫にアンリエッタは怯える。

「何だと聞いている！名前と役職を答えろ！！！」

「ア、アンリエッタ・ド・トリステイン王女です・・・」

「声が小さい！！！！！」

「ア、アンリエッタ・ド・トリステイン王女です！！」

「そうだ。俺たちはお前が命令すれば絶対にその通りにしなければならぬ。だから王女であるお前は命令しろ。アルビオンにある手紙を回収して来いと、そして、必ず生きて帰って来いと！そう命令してくれば、俺たちはなにが何でも生きて帰る事を約束する。」

俺の言葉を聞き、アンリエッタははっとした表情を作る。

「わかりました。ならばわたくし、アンリエッタ・ド・トリステインは王女としてルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエールと、ギーシュ・ド・グラモンの二名に命じます。アルビオンにある手紙を取りに行きなさい。そして、必ず生きてこのトリステインに帰ってきなさい。」

「はっ！かしこまりました。」

そう言つてルイズたちは、アンリエッタから命令を受けた。

「・・・これでよかったかしら？使い魔さん。」

「上出来だ。ま、安心しろ。二人はちゃんと守つてやるよ。あ、そうだ。後二人連れて行きたい奴がいるんだが、いいか？」

「その方は信用に足る方ですか？」

「そこは保障する。」

「わかりました。あなたを信じましょう。」

そう言ってアンリエッタは左手を差し出した。

「わりーな。あんたに忠誠を尽くすのはまだ先だ。忠義を尽くせるようになったら、喜んであんたのために働くよ。」

俺はそう言ってアンリエッタへのキスを断った。

そして、俺たちはアンリエッタと別れ、俺はタバサとキュルケの部屋を訪ねた。

そして二人に事情を説明し、後発隊としての協力を得たのだった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1541v/>

---

虚無と紅翼の使い魔

2011年8月5日01時34分発行